

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

| | |
|----------|-------------------|
| 氏 名 | 顧 珊珊 |
| 学位の種類 | 博士（学術） |
| 学位記番号 | 博甲第 181 号 |
| 学位授与の日付 | 2014 年 3 月 14 日 |
| 学位授与大学 | 東京外国語大学 |
| 博士学位論文題目 | 平安前期における日本漢詩文学の研究 |

| | |
|--------------------------|--|
| Name | Gu , Shanshan |
| Name of Degree | Doctor of Philosophy (Humanities) |
| Degree Number | Ko-no. 181 |
| Date | March 14, 2014 |
| Grantor | Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN |
| Title of Doctoral Thesis | A Study of Japanese Kanshi in the Early Heian Period |

平安前期における日本漢詩文学の研究

顧
姍姍

平安前期における日本漢詩文学の研究

目次

| | |
|----|---|
| 序論 | 4 |
|----|---|

| | |
|-----------------|--|
| 第一章 対句の形式に関する考察 | |
|-----------------|--|

| | |
|---------------------------|----|
| 第一節 流水対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開 | 16 |
|---------------------------|----|

| | |
|---------------------------|----|
| 第二節 隔句対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開 | 31 |
|---------------------------|----|

| | |
|---------------------------|--|
| 第二章 押韻法に関する考察 — 次韻詩を中心に — | |
|---------------------------|--|

| | |
|----------------------|----|
| 第一節 平安時代以前における次韻詩の発生 | 46 |
|----------------------|----|

| | |
|--------------------|----|
| 第二節 平安前期における次韻詩の展開 | 63 |
|--------------------|----|

| | |
|---------------|--|
| 第三節 分韻詩から次韻詩へ | |
|---------------|--|

| | |
|------------------------------------|----|
| — 奈良・平安前期における日本の新羅、渤海使との漢詩交流を中心に — | 92 |
|------------------------------------|----|

| | |
|---|-----|
| 附節 渤海使関係詩注釈稿 大江朝綱「裴大使重押蹤字、見賜瓊章。不任諷味、敢以酬答」 | 110 |
|---|-----|

| | | |
|------|--------------------------------|-----|
| 第三章 | 主題内容に関する考察――詠史、歴史講書を中心に―― | |
| 第一節 | 平安前期の竟宴詠史詩の一考察―― | 124 |
| 第二節 | 平安前期における日本紀講書―中国三史の講書との関わりから―― | 149 |
| 結論 | | 172 |
| 参考文献 | | 179 |
| あとがき | | 185 |

序論

一、平安前期の日本漢詩文学と関連の先行研究

古代東方文学史において、漢詩文学は、日本、中国、渤海、新羅、越南などのアジア各国に共通する文学様式であり、民族や国境を超えた国際的な性格を持つものである。日本において、漢詩文学は、七世紀からの遣隋使・遣唐使を初めとした盛んな文化交流を背景として開花してきた。平安初期の日本漢文学については、大江匡房が『詩境記』に「我朝、起於弘仁・承和、盛於貞観・延喜」(三善為康編『朝野群載』卷三。吉川弘文館、一九九九年)と述べているように、弘仁・承和朝、即ち嵯峨天皇を中心とした九世紀前半においてその隆起を迎え、貞観・延喜期、即ち宇多朝の時代に至り、より円熟し、盛時に達したという歴史的な文学潮流を形成した。特に九世紀前半の日本の宮廷社会では、「文章経国」¹という中国的な建国の理念が高揚されていた。漢文学の教養は、もはや単に中国大陆の文化への憧憬によるもののみではなく、律令制国家の構築

や、貴族と官吏たちに立身出世のための道具としても益々重視されるようになる。奈良時代に成立した国家官吏養成機関としての大学寮はますます完備されていくと同時に、藤原冬嗣によって勸学院などのような私学も次第に立てられるようになり、漢詩文学を含む中国の歴史や哲学などの古典に通じた人材をより多く輩出させている。² 八一四年から八二七年にかけて、嵯峨天皇と淳和天皇との勅旨により、矢継ぎ早に『凌雲集』(弘仁五(八一四)年)、『文華秀麗集』(弘仁九(八一八)年)、『経国集』(天長四(八二七)年)といった日本最初の勅撰事業、いわゆる漢詩勅撰三集が編集された。これらは、後に編纂された和歌の最初の勅撰集である『古今集』(九〇五年)より約百年も早く成立したのである。漢文学は、公的な文芸形式として、和歌よりも圧倒的な勢いをもって発展してきた。こうした九世紀前半、承和期以前の漢詩文を主流とする日本文学は、後に「漢風謳歌時代」とも「国風暗黒時代」とも呼ばれるようになる。承和期以降、九世紀後半の日本漢文学は、それ以前と同様に異なる性格をあらわしてきた。藤原氏の摂関権力の増長によって、承和以前に詩人存在の倫理的拠り所としての「文章経国」思想はもはや空洞化してしまったのである。³ 国家的事業の一環として漢詩文を編纂するという勅

撰三集時代のような勢いはとうとう見られなかった。とはいえ、日本漢詩史上の空白期とも言えないだろう。同時期には、都良香の『都氏文集』（八九七年ごろ）や、島田忠臣の『田氏家集』（八九一年ごろ）、菅原道真の『菅家文章』（九〇〇年）および『菅家後集』（九〇三年）などの個人詩集が結集されており、日本詩壇は技術上の円熟期、黄金期を迎え、新たな段階に入ったのである。風格においても内容においても、『文華秀麗集』などにみられる日本離れた観念的な世界の色彩が弱くなり、日本化してゆくのである。特に『菅家文章』に対して、『日本文学鑑賞辞典』は、「道真の出た宇多天皇の時代は、平安朝としては嵯峨天皇時代に次ぐ二度目の漢詩文の興隆期である。この時代の漢詩文は平安朝的な優美さを加えて、日本的になったのがその特色であるが、道真の詩はそういう時代の代表的作品である」⁴と高く評価している。

こうした日本文学史上においてひととき異彩を放つ平安初期の日本漢詩文学、及びそれを代表した詩集、即ち勅撰三集の『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、及び個人詩集の『菅家文章』『菅家後集』、『田氏家集』における詩作が、本研究の主要な考察対象である。

この時代の日本漢詩の本質追求の必読注釈書に関して言うならば、安

世良一氏の先駆的な注釈『凌雲集詳釈』（一九六六年）を始め、小島憲之氏校注の『文華秀麗集』（日本古典文学大系。一九六四年）、小島氏の『国風暗黒時代の文学』（中・中。一九七九年）・（中・下Ⅰ、Ⅱ。一九八五年）所収の『凌雲集』・『経国集』の全注釈、川口久雄氏校注の『菅家文章・後集』（日本古典文学大系。一九六六年）、小島憲之氏監修の『田氏家集注』（一九九四年）、また小西甚一氏校注の『文鏡秘府論考 攻文篇』（一九五三年）が研究の土台を築いたものと言える。小島氏を始めとしたこれらの研究者たちは、徹底して綿密周到な漢詩文の出典・用例調査を積み重ねており、平安初期の漢詩人が中国六朝文学・唐代文学を熟知していたことを印象付けている⁵。小島憲之氏の言葉を借りて言えば、平安初期の日本漢詩文学の中国文学との関係は、「奈良朝文学が一時代一時期遅く「中国物」を借用するのに対して、平安初頭文学は殆ど同時期のごく新しいものを合わせて借用する。また前者が文選・玉台新詠・王子安集（初唐王勃詩）といった特定の詩文集や類書（芸文類聚）によるのに対して、平安初頭はこれらのほかに類書「初学記」（初唐までの文学を類聚する）を加へ、更にあらたに新来の諸詩集をも借用し利用する」と総括することができよう。

また、日本文学史論の立場から行われた研究に関しては、五十嵐力氏の『平安朝文学史』（一九四九年、一九五〇年）、岡田正之氏の『日本漢文学史』（一九二九年）を始め、川口久雄氏の『平安朝日本漢文学史の研究（上）』（一九六九年）、小島憲之氏の『国風暗黒時代の文学』における諸論考などは、平安初期の日本漢詩文学の全体像を浮き彫りにしており、研究の進展に裨益したところは計り知れない。これらの著作は、単に日本漢詩文学を中国文学との関連から追求するだけでなく、日本文学とありわけ十世紀初めごろに再興した国風文学との関連においてもとらえようと努めたのである。それでほぼ一世紀にわたって隆盛した日本漢詩文学が、ただ中国文学との緊密な交流の中で展開していたのではなく、日本伝統的な和歌文学の発展にも寄与し、万葉集から古今集までの渡し橋の役割を発揮していたことは明らかになった。こうした領域横断的な視点は示唆に富んでおり、今後の日本漢詩文学研究を新たな境地へと展開させるのに繋がると言えよう。

さらに、これらの諸先学による成果に基づいて行われた近年の平安前期の漢詩に関する研究の進展には、瞠目すべき所がある。研究成果として、金原理氏『平安朝漢詩文の研究』（一九八一年）、菅野礼行氏『平安

初期における日本漢詩の比較文学的研究』（一九八八年）、後藤昭雄氏『平安朝漢文学論考』（一九九一年）、藤原克己氏『菅原道真と平安朝漢文学』（二〇〇一年）、和漢比較文学会編『菅原道真論集』（二〇〇三年）、波戸岡旭氏『宮廷詩人菅原道真『菅家文章』・『菅家後集』の世界』（二〇〇五年）、谷口孝介氏『道真の詩と学問』（二〇〇六年）等が挙げられる。これらを始めた諸先学の研究課題は多岐に亘り研究方法も多彩を極めるが、考察対象の時代区分で言うところ、漢風賛美時代と言われる弘仁・天長期、平安初期の漢詩文学史の分水嶺と位置されている承和期、及び菅原道真・島田忠臣らの詩人が輩出した承和以降から延喜期までの時期に對して、より多く注目が集められているといえる。

まず、弘仁・天長期に関しては、中国文明に憧憬を抱いた嵯峨天皇を中心とした詩壇が形成され、「文章経国」の理念が標榜されていた時期であることが盛んに論じられている。川口氏「王朝漢詩文芸の開花―嵯峨朝」（『平安朝の漢文学』一九八一年）、後藤氏「嵯峨天皇と弘仁期詩壇」（『平安朝漢文学論考』所収）、「小野岑守論」（『古代文化』一九七六年）、金原氏の「嵯峨朝文壇の基調」（『国語と国文学』一九八三年）、藤原氏「嵯峨朝の政治文化と勅撰三集」・「吏隠兼得の思想―勅撰三集の一考察」（『菅

『原道真と平安朝漢文学』所収）など枚挙に暇がないほどである。その中で、後藤氏の論考は、平安初期政治史研究の成果を綿密に取り入れることにより、嵯峨朝の日本漢詩における経国的性格と唯美的性格との両面性を、当時の政治状況との関連を結び付けながら克明に分析し、勅撰三集研究に新たな視角を切り開いた画期的な論文であるといえよう。

また、承和期の日本漢詩について、平安文学に巨大な影響を及ぼした白氏文集の渡来とその受容には多くの関心が集まっている。『文徳実録』巻三に、承和五（八三八）年に藤原岑守が元稹と白居易の詩文をまとめた「元白詩筆」を献上したという記述がある。これは、白居易の詩の渡来を史書によって確認された最初の記述である。しかし、嵯峨天皇が小野篁の詩句の措辞に「卿の詩情は楽天に同じ」と評価したという佳話が『江談抄』に記されているため、白詩の日本への伝来時期に関して、承和期以前ではないかという疑問が生じてくる。小島氏の「白詩以前」『国語国文』一九六一）の中の、承和以前の嵯峨天皇や小野篁の漢詩にすでに白詩の表現の投影が見られるという指摘は、もっとも早い時期になされたものである。

さらに、承和期以降の日本漢詩の詩境が一変し、より私的な人生に即

した詠懐に向かったことをめぐって、種々の考察が行われている。その変遷の原因は、前期撰関係体制の進展という漢詩文学の置かれた政治的環境の変化と、『白氏文集』の大規模な流行とが複合した結果であると認識されている。前者の原因に重点を置いた論考では後藤氏の「菅原道真とその時代」『平安朝漢文学論考』所収、藤原氏の「文章経国思想」から詩言志へ『菅原道真と平安朝漢文学』所収）が代表的なものである。一方、松浦友久氏『白氏文集』と『菅家文草』―詩歌の諷諭性をめぐって―（『古典の変容と新生』一九八四）、波戸岡氏「白詩の受容と菅原道真―平安朝漢詩の展開」（国学院中国学会報、二〇〇二年）、焼山広志氏「道真の詩に投影された『白氏文集』―「水鷗」の詩をめぐる―」（『国語国文学研究』一九八七年）などは、白詩の影響を中心とした調査と検討に重点を置いたものである。しかし、こうした白詩の承和以降の日本漢詩への影響に注目する傾向がある一方で、白詩以外のその他の中国古典への関心に注目する論考もある。金原氏の「延喜前後の漢詩人の方法―島田忠臣の場合」（『平安朝漢詩文の研究』所収）は、承和以降の漢詩における六朝的な要素の濃厚さが白詩の影響に劣らないことを強調した論考であり、また福島正義氏「菅原道真の作品と老荘思想の一端」

『漢文学研究』一九八三年）、若林力氏「道真の詩に見える杜甫の影」
『古典の変容と新生』一九八四年）などは、老子、莊子、杜甫という「非
白詩圈」の中国古典に視線を向けた論文である。これらにより、九世紀
後半の日本漢詩人の視野に入った中国古典の書籍がより広い範疇に亘っ
ていることは実証的に明かされている。

以上、おおまかにではあるが、重要な先行研究に触れた。諸先学は、
平安初期の日本漢詩文学の特質及びその史的展開を、六朝、初唐、盛唐
また白居易文学集団を代表とした中唐の文学との関わりの中、また平安
初期の政治の史的動向の中に見据えて考察してきたと考えられる。

二、本研究の目的と構造

前述のように諸先学は、平安前期の日本漢詩文学の研究にあたる基本
的な考察方針を示唆し、堅実な研究基盤を構築してきたのである。しか
し、そこには開拓の余地が未だに少なからず残されていると言わざるを
得ない。特にこの時代の日本漢詩は、その形成と展開の過程では六朝や
唐の文学に対する模倣や受容が多く論じられている一方、中国漢詩文学

に見られないその独自の様相については未だに十分に検討されていない。
中でも、日本漢詩における新たな「かたち」や要素の出現を考えるにあ
たり、中国文学のそれから直接影響を受けずに、日本漢詩文学の基盤の
上で自ら発生した可能性については改めて綿密且つ実証的な論考を行う
必要性がある。

そのため、本研究では、諸先学を踏まえた上で、そこに更なる展開が
期待されるテーマや、未だに注目されていない課題に重点をおき、平安
前期の日本漢詩文学の史的展開や新たな一面を探索し、平安前期の漢詩
文学の研究をより一層展開させることを試みる。

周知のように、詩歌は「形式」の側面、「音韻」の側面、「内容」の側
面において一定の規律や特徴を有し、歴史の流れと共に史的な変化を展
開してゆくものと考えられる。こうした性格に即すると、詩歌の研究
にあたる際の考察の視座は、（一）「形式」、（二）「音韻」、（三）「内容」
に大きく分類することが可能である。無論、ここですった詩の「形式」、
「音韻」、「内容」は、すべて広義の概念である。例えば、詩歌の「形式」
の課題は、詩句の形（詩句の字数、詩句と詩句との関係など）、詩作一首
の形（詩体）、詩群の形（詩と詩の関係）などの多くの課題を含む。詩の

「音韻」は、頭韻、脚韻、押韻配列などの課題があるが、詩歌の種類によって音韻の課題も異なる⁶。詩の「内容」は、詩語一つ一つの表現の問題もあれば、詩の全体にかかわる主題、内容、思想までを包含する課題も存在する。漢詩文学の研究の場合も、同様に「形式」、「音韻」、「内容」にそれぞれ重点を置く研究領域に大きく分けられよう。こうした三つの視座から平安前期の日本漢詩を考察するのが、本研究の最も基本的な研究方法である。それ故、本研究は、漢詩の「形式」に関する考察、「音韻」に関する考察、「内容」に関する考察という三つの部分から構成されるものとなる。

平安前期の日本漢詩文学の先行研究を顧みるとかわるように、最も多数を占めるのは、詩作の「内容」を中心にした論考か、或はそれを考察の手掛かりとして、詩人の経歴や当時の日本文学史、中国文学史、日本をめぐる歴史（政治史、文化史、外交史など）などと結びつけて考察した論考である。これは、詩作の「内容」と関連する課題がかなり広い範疇にわたることによるものだろう。これに反して、日本漢詩の「形式」・「音韻」の課題をめぐる考察については、決して多いとは言えないのが現状である⁷。だが、逆に言えば、「形式」・「音韻」の視座からの考察は、

日本漢詩文学研究に新たな展開を開くことが期待されるのだ。

漢詩の「形式」に着目すると、既に数多くの先学に指摘されているように、中国詩学において「対句」は最も顕著な修辭的特徴であり、それを構成する要素（平仄、押韻、対語など）が既成の尺度として存在しているため、漢詩の性格を考察するのに客観的な指標となりうる。そして、対句は、漢詩文学の展開につれて、初唐に至り、様々なバリエーションが生まれてきたのである。平安初期に唐に渡っていた留学僧の空海が中国で網羅した詩話を整理して編集した文学理論書『文鏡秘府論』⁸（弘仁十一（八二〇）年以前）によると、当時、二十九種類の対句が存在している。現在までの日本漢詩の形に関する研究には、詩体の検討を中心とした黄少光氏の「奈良・平安朝日本漢詩の詩律的研究」（東京外国語大学博士論文、二〇〇三年）などが見られるが、構成や発想が異なる各種の対句の特徴を重視し、個別的かつ具体的に行われた調査は未だにみられない。

そのため、本研究の第一章では、「対句」の形式に関する考察を試み、特に個別の種類の対句に注目することを通じて、平安前期の日本漢詩文学の句法、また当時の日本詩人の創作姿勢に新たに光を当てることを試

みる。

第一節「流水対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開」では、対句表現の中でも比較的特異な存在とされる「流水対」を考察の手掛かりとして、九世紀の日本近体詩の格式作法が如何に展開したのかを解明すると同時に、平安前期の日本漢詩の展開の中から流水対が自己発生した可能性を検討し、日本漢詩の独立性について私見を述べる。

第二節「隔句対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開」では、平安前期の日本漢詩における隔句対に関する実態を検討することにより、九世紀の日本漢詩人たちが中国書物を介して、如何に漢詩文の格式作法を受容し、自らの漢詩文学を形成していったのかを明らかにすることを試みる。

また、第二章の「音韻」に関する考察についてであるが、漢詩文学における重要な格式作法、押韻法の課題に注目する。近年、この課題を取り扱った論考には黄少光氏「勅撰三集の押韻」(『言語・地域文化研究』(八)東京外国語大学大学院編、二〇〇二年三月)、半谷芳文氏「勅撰三漢詩集押韻考―韻書の利用と韻律受容から考察する奈良末・平安初期の詩賦」(『国文学研究』一五八、二〇〇九年六月)が挙げられる。これらは平安

前期の日本漢詩における韻字の使用状況を検討することで、当時の日本詩人が如何なる韻書を利用したのか、中国漢詩文学の韻律と如何なる関わりを有したのかについて実証的に論じている。しかし、これらの論考が注目しているのは、詩作一首一首の中での押韻法である。周知のように、漢詩は『詩経』の時代から感情表現や意思疎通のための手段であり、詩と詩の間に関連性を持つ場合がかなり多い。そして、詩作格式が発達してゆくにつれて、詩人の押韻法によって詩作と詩作の間にはある特定の関連性が生まれてくる。たとえば、詩人の異なる押韻法によって、詩作の関係は「分韻詩」或いは「和韻詩」の関係になる。中でも、和韻詩の一種である「次韻詩」は、唱和詩を詠じようとした詩人に対し、原詩と同じ脚韻をまた同じ順序で用いることが規せられるものである。その作詩には詩人の脚韻の運用への強い工夫が施されており、また、韻字の次元、ひいては一首の詩作の次元を超え、詩と詩との往来によって築かれていく「座」の意識にも緊密に関わっていることが特徴として挙げられる。こうした次韻詩への注目と検討は、当時詩壇における押韻法の実態、座の意識を看取し、詩人の創作姿勢を浮彫りにすることに繋がると考えられる。だが、管見の限り、日本の漢詩文学研究では、こうした押

韻法に関する課題は未だに関心が寄せられていない¹⁰⁾。

そのため、第二章では「次韻詩」の課題を扱い、第一節「平安時代以前における次韻詩の発生」、第二節「平安前期における次韻詩の展開」、第三節「分韻詩から次韻詩へ―奈良・平安前期における日本の新羅、渤海使との漢詩交流を中心に―」と節を立て、次韻詩の奈良・平安前期における史的展開について考察を行う。

第一節・第二節においては、日本漢詩における次韻詩の発生と展開を論ずる際に、それらが中国の次韻詩の直接影響を受けずに、日本の漢詩文学環境の中で育った自然の産物ではないかという問題意識に基づき、当時の日本詩壇の文学的傾向や漢詩創作の技術的基盤について探ることから、日本漢詩の自立性に光を当てることを試みる。

第三節では、日本の外交上の場における漢詩交流に着目し、その創作形式が奈良時代における新羅使をもてなした宴会から平安前期における渤海使を招待した宴会へ、分韻詩から次韻詩へと変化してきたことについて考える。そうした変化の原因を中国文学潮流の変化だけでなく、当時の日本と、新羅・渤海との外交状況からも考察する。このように、第一節から第三節までの次韻詩をめぐる考察は、日本漢詩が日本独自の文

学的環境と独自の政治的背景の中において、やはり独自の展開の様相を表わしていることを明確にできると考える。

さらに、本章の附節として「渤海使関係詩注釈稿」「大江朝綱」「裴大使重押蹤字、見賜瓊章。不任諷味、敢以酬答」を掲載し、日本官人の渤海使への次韻詩唱和の具体的ありようを呈示する。

一方、日本漢詩の「形式」・「音韻」に関する考察と比較すると、「内容」に関する考察は盛んに行われていると言えよう。多くの先行研究の蓄積の上で、近年、あらたな視座を開拓した論考も見られる。例えば、桑原朝子氏の『平安朝の漢詩と「法」―文人貴族の貴族制構想の成立と挫折』（東京大学出版社、二〇〇五年四月）と長谷部将司の「氏族秩序としての「勅撰」漢詩集」（『特集 国史学会古代史部会 平安時代シンポジウム』二〇〇七年三月）がそれにあたる。これらの新たな視座から漢詩の「内容」を探る論考は、考察方法の面において本研究に大きな示唆を与えたものである。

第三章の「内容」に関する考察においては、日本漢詩研究分野における手薄の課題、「竟宴詠史詩」及びその成立の背景である「中国三史の講書」について探求し、平安前期の日本漢詩文学の新たな一面を照らし出

したい。

中国三史、即ち『史記』・『漢書』・『後漢書』の講書は、日本朝廷におけるアジア文明の中心たる中国への関心の高まりや、政治の運営に中国正史の知識が必要とされていることを時代背景にし、官吏養成の過程において不可欠なものであると認識されており、奈良時代から国家教育の最高機関である大学寮の紀伝道において行われていた。三史の講書の終了後に開催された竟宴の場で、詩人たちが歴史上の人物の題目を予め与えられ、いわゆる題詠の形式で製作したのは、竟宴詠史詩である。近年、詠史詩を中心に行った考察としては、佐藤真一氏の「菅原道真と父是善——卷一、九「八月十五夜、嚴闇尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲。平序。」を中心に——と、堀誠氏の「菅原竟宴詠懷人士考」が挙げられる。だが、こうして菅原道真の詠史詩だけへの関心が寄せられているのに対して、日本漢詩文学の研究では、その他の竟宴詠史詩に注目した研究がいまだに見当たらない。

そのため、第一節「平安前期における竟宴詠史詩の一考察」では、平安前期の竟宴詠史詩の一部を収録した『凌雲集』（一首）、『文華秀麗集』（四首）、『菅家文章・後集』（六首）、『田氏家集』（四首）、『扶桑集』（一

○首）を考察の対象とする。それら詩作の題材に着目しつつ、題材をその詠法や詩人の官職、当時の政治と関連付けて考えることで竟宴詠史詩の創作に潜む政治的な意図を浮かび上がらせると同時に、平安前期において漢詩文学が宮廷文学の首座を占めた論理的根拠である「文章経国」の理念の九世紀前半から後半への展開を明らかにする。特に「葉子の変」（八一〇年）という政治的事件や、九世紀後半における宇多天皇の親政姿勢を考慮に入れ、儒教的な国家政治に根を下ろした「文章経国」の理念が嵯峨朝の詩壇においてその頂点を極め、九世紀後半に至って、菅原道真らの詩作において改めて光彩を放ったという日本独自の展開を明確にする。

また、竟宴詠史詩の成立の背景である中国三史の講書は、日本紀講書に先立ち、それに影響を与えながらも、平安前期の政治の影響のために日本紀講書の展開とは異なった様相を呈している。日本紀講書は、日本和歌文学史において異彩を放つ『日本紀竟宴和歌』を誕生させた直接の文学背景であり、日本国風文化の復帰を物語る文学行事だと言える。日本紀講書と中国三史の講書の平安前期における展開を考察することを通じて、日本の漢詩文学と日本伝統文学との行方を展望できるかもしれない。

い。

そのため、第二節「日本紀講書―中国三史の講書との関わりから―」では、中国三史及び日本書紀の講書の性格や意義を反映する様々な要素があるなかでも、殊に両者の相違が顕著である講書の受講者、講書場所、講書の修了を祝う竟宴の状況に着目し、両者の特徴を対照することにより、中国三史の講書と日本紀講書との平安前期における展開について検討する。

結論では、序論の問題提起を受け、平安前期の日本漢詩が中国漢詩文学の影響を多く受けながらも、形式上、音韻上、内容上において独自の展開の有様を有しており、日本漢詩の独自性を呈示するものであったとして論を結ぶ。また、平安前期の日本漢詩文学研究における今後の課題を提示したい。

〔注〕

1 「文章経国」とは、詩や歴史の学問をする心は国家を経営する心に連なる

という考えである。「文章経国」の問題については、藤原克己「文章経国思想から詩言志―勅撰三集と道真菅原」『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学、二〇〇一年）を参照されたい。

2 平安遷都以後、「学校2「文章経国」とは、詩や歴史の学問をする心は国家を経営する心に連なるという考えである。「文章経国」の問題については、藤原克己「文章経国思想から詩言志―勅撰三集と道真菅原」『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学、二〇〇一年）を参照されたい。

の勃興」の問題については、岡田正之・山岸徳平・長澤規矩也『日本漢文学史』吉川弘文館、一九五四年。112―114頁を参考されたい。

3 藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学、二〇〇一年。128頁を参照。

4 吉田精一『日本文学鑑賞辞典（古典編）』東京堂出版、一九七〇年、157頁。

5 小島憲之氏は、「奈良・平安初頭文学と渤海文学との交流」『比較文学』日本比較文学会（通号三）、一九六〇年九月）九頁。

6 和歌文学の押韻に関する論文は、石川淳「和歌押韻―東斎清言9」『文学界』七（五）文藝春秋、一九五三年五月）赤羽淑「定家の歌における押韻―主として頭韻について」（フートルダム清心女子大学紀要『国語・国文学』四（二）一九八〇年）が見られる。

7 半谷芳文「勅撰三漢詩集押韻考―韻書の利用と韻律受容から考察する奈

良末・平安初期の詩賦」(『国文学研究』一五八、二〇〇九年六月)

8 空海は後に『文鏡秘府論』の要所を抜粋し『文筆眼心抄』を著した。『文筆眼心抄』の成立時期は、弘仁十一(八二〇)年である。

9 脚韻の運用の課題は、「聯句」の創作様式にも関わる。「聯句」は複数の者が「句」を「聯」ねて、一篇の詩を作ることである。「柏梁詩」にその源流を見出すことができる。「柏梁詩」の押韻上の特徴は、「各人一句」、「一韻到底」、「毎句韻」である。しかし、各詩人が作ったのは、詩句であり、独立した詩作ではない。

10 日本の和韻詩に言及した論文には、下西善三郎「奈良・平安時代の唱和詩」(『金沢大学国語国文』5、一九七六年五月)が見られる。

第一章 対句の形式に関する考察

第二節 流水対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開

はじめに

漢詩の対句表現は、作者独自の風格を形成すると共に、歴史的な文学潮流に大いに影響されながら展開してきた。九世紀の日本漢詩の研究においても、当時の対句表現の基本的な特徴を検討することにより、歴史的な変遷が明らかにされてきた。殊に韻律に重点を置く考察が、九世紀後半における近体詩の円熟を実証するには有効であった。これらの先行研究を踏まえ、さらに対句の形式的要素と意味的要素に着目することにより、新たな展望を開くことが期待できよう。本節では、対句表現の中で比較的特異な存在とされる「流水対」を考察の手掛かりにして、平安前期の日本近体詩の格式作法が如何に展開してきたかをさらに明らかにする共に、日本詩人が近体詩を創作する際の姿勢を浮き彫りにしてみたい。

一、流水対とは

本節では、まず関連文献を踏まえ、対句を形成する意味的と形式的な要素の視点から、流水対の定義づけをあらためて試みる¹⁾。

対句表現の根底にある原理は、数多くの先学に指摘されている通りに、対照あるいは対立である。それは、漢詩の典型的な対句であり、『文心彫龍』が説いた「正対」・「反対」、あるいは『文鏡秘府論』における二十九種類の対句の一番目に挙げられた「的名対」のような表現形式である。例えば、

漢祖想粉榆 光武思白水（『文心彫龍』麗辞篇）

漢祖は粉榆を想ひ、光武は白水を思ふ²⁾。

鍾儀幽奏楚 莊舄顛吟越（『文心彫龍』麗辞篇）

鍾儀は幽はれて楚奏し、莊舄は顛はれて越吟す。

鮮光動葉上 艷采出花中（『文鏡秘府論』東卷）

鮮光 葉上に動き、艷采 花中より出づ³⁾。

のような詩句は、そういった典型的な対句形式である。それぞれの一聯に述べられた二つの事柄が並列し、あるいは対立しており、上句と下句は互いに独立しても意味の伝達では障害がなく、シンメトリの構造にあることが明らかである。しかしながら、流水対は、

遥憐小兒女 未解憶長安（杜甫「月夜」）

遥かに憐れむ 小なき兒女の、未だ長安を憶ふを解せざるを⁴。

のように、普通の対と同様に、品詞的に対を成している一方、一つの事柄が二句にわたって述べられ、両句で一まとまりの意味になるというものである。こういった性格は、漢詩研究の権威とされる王力氏も強調している。以下は彼の見解である。

通常の対句は、みな並行する二つの事柄である。原則によれば、互いにその位置を交換することができる。たとえば出句（上句）を対句（下句）に取り替え、対句を出句にしても、意味がやはり変わらない

い。しかし、稀に出句と対句とが意味的に前後関係しており、その位置を逆さにすることできないという対句があり、それを流水対という⁵。

また、周振甫氏も、「均斉の美を有し、自然で且つ平板ではない。意味が貫通しており、内容を損なうことがない、良い対句である。」と流水対を評価し、その上・下句が互いに繋がっている所に着目している。さらに、私の調査範囲内において「流水対」の名称をはじめて用いた詩話『唐音癸簽』によると、流水対の上下句が一体となっている特質は、明の時代にすでに明らかにされている。以下のようなのである。

嚴羽卿以劉脊虛「滄浪千萬里 日夜一孤舟」為十字格、以「江客不堪頻北望 塞鴻何事又南飛」為十四字格。謂兩句只一意也。蓋流水對耳。⁷（明・胡震亨『唐音癸簽』）

嚴羽卿は、劉脊虚の「滄浪千萬里 日夜一孤舟」を以て十字格と為し、「江客 頻りに北望に堪へず 塞鴻 何事ぞ又た南飛」を以て十四字格となす。謂ゆる兩句只だ一意なり。蓋し流水對耳み。

殊に傍線部から、流水対が「兩句只一意也」という特徴を持つからこそ、ほかの対句と峻別して特異な存在となっていることが強調されていることがわかる。また、「嚴羽卿」、即ち南宋の嚴羽は、明の胡震亨以前に流水対の詩句に関心を示し、それを対句の表現法の一つとして際立たせていることも、この記述から読み取れる。

つまり、流水対は、明代の詩話から、現代の詩学理論に到るまで、上・下句に潜在する水流のように切ろうとしても切れない意味上での一体感が強調されており、それが流水対の本質を表す所であると解釈されてきたことが明瞭である。

しかし、こういった流水対の意味上での特徴について、一致した認識に達している一方、その韻律上の特徴、即ち古体詩ではなく、近体詩の韻律の規則に従っていることについては、十分に重視されていない状況にある。本節では、古代詩話にみられる流水対の詩句に基づき、流水対を定義する際に、その韻律上の要素も不可欠な条件にすべきであると考ええる。

ここで、前述した『唐音癸籤』にある二つの用例を改めて見てみよう。

各詩語に平仄の印をつければ「滄浪千万里 日夜一孤舟」「江客不堪頻北望
●○○●●○○○
塞鴻何事又南飛」のように、近体詩の韻律の規則、即ち「二四不同・二六対」の規則に従っていることがわかる。

また、ほかの詩話にある流水対に関する記述をみてみよう。

流水対如「微昇古塞外 已隱暮雲端」之類。(清・朱之荊『黃白山』杜

詩說『句法』)

流水対は、「微かに昇り 古塞の外、已でに隠れたり 暮雲の端」の類の如し。

この一聯は、次のように杜甫の「初月」という五言律詩に見える。

| | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ○●○○○● | ○●○○○● | ○●○○○● | ○●○○○● |
| 光細弦初上 | 影斜輪未安 | 微昇古塞外 | 已隱暮雲端 |
| ○●○○○● | ○●○○○● | ○●○○○● | ○●○○○● |
| 河漢不改色 | 關山空自寒 | 庭前有白露 | 暗滿菊花团 |

光細くして弦 初めて上る。影斜めにして輪 未だして安からず。
微に昇り古塞の外、己に隠れたり 暮雲の端。

河漢 色を改めず、関山 空しく自ずから寒し。

庭前に 白露あり、暗に菊花の団に満ちる。

この詩作は新月の美しさと詩人の閑寂な心境を詠じた一首である。頷聯に位置している流水対は、新月の動きを描写しており、「三日月が秦州の古くからあるこの塞のすこし上にのぼりかけたと思つたら、いつの間にか夕暮れの雲の端にかくれてしまった」という意味であり、上句と下句が逆接の意味関係にあり、互いに緊密にかかわっていることがわかる。また、「初月」の詩体を確認すると、近体詩の七言律詩であることは明らかである。

以上の用例から、流水対が近体詩の対句形式として運用されていることは明白であろう。こういったことは、流水対を考察するに当たり、注意深く念頭に置くべきであると思われる¹⁰。

以上のように、対句の意味及び形式的な要素から考えても、流水対は、典型的な対句と同様に対語と韻律の規則に従いながら、意味内容においては、対照・対立関係にある典型的な対句と異なり、上下句が互いに繋がって一体となっている対句表現であると確認することができよう。

二、対句表現史における流水対の意義

漢詩の対句論の歴史を遡ると、最初に対句の種類を説いた六朝時代の『文心彫龍』には、流水対と考えられる対句が見当たらない。それ以降、中唐にかけての詩学を集成した『文鏡秘府論』には、流水対と共通の性質を持つ対句が存在していると考えられる。それは、『文鏡秘府論』の東巻にある二十九種類の対句形式の中での「第二十五 仮対」の条である。

詩曰 ●●○○●●○○●●○○
不 献 胸 中 策 空 帰 海 上 山（『文鏡秘府論』東巻）

詩に曰く 胸中の策を献ぜず、空しく海上の山に帰る。

松浦友久氏は、この詩句について「語義的には対偶性が不鮮明な各語が、品詞的には完全に対をなしており、しかも全体としては、両句で一意をなす「流水対」の関係になっている¹¹」と既に指摘している。また、興膳宏氏は「例句から察するに、意味の上からいえば対を成さないにもかかわらず、文型の上での対応がひとまず成り立っている¹²」と述べ、仮

対の詩句が、対語上と意味上では流水対の性格と共通していることを窺わせている。さらに、用例の韻律をみると、確かに「二四不同、二六対」という規則に従っており、この仮対の用例がイコール流水対であると言ってもよからう。従って、仮対の用例に対する論考や評価を参考し、流水対の対句表現史における意義を説明することは可能にならう。

以下は仮対について言及した日本研究者の見解である。

『懷風藻』では（略）形式的な対のみであり、仮対の如き高次の対はみられない¹³。

仮対は、対句の形式的な用件を踏み外さない範囲で、自由な表現を求めた対句と言えるだろう。（略）力量のある詩人の手の中では、むしろ高度な対句技巧として活用されていたと理解すべきであろう¹⁴。

仮対、即ち流水対は、自由な表現を目指し、高度なテクニクとして運用されている対句形式であると認識されていることがわかる。本論では、流水対自体が必ずしもほかの対句より、高次あるいは優れているとは強

調しないが、それが韻律上と対語上では対句の伝統を守りながら、句法（上下句の意味）では新たな変化を遂げたため、「自由な表現」を求める指標のひとつとして認識しておきたい。これは、正に『文心彫龍』の「通変篇」¹⁵が主張した永遠の文学の道、即ち「通（伝統を正しく継承すること）・変（変化を求めること）」が共存する道ではなからうか。

言うまでもなく、文学のあらゆるジャンルの創作には、それぞれ不変の法則がある。近体詩の場合では、一つの対句をなすのに、平仄、押韻、対語に對しての様々な規則がある。それは、対句の様式的な美に関わるものである一方、「近体は定規あり、伸縮に難し¹⁶」（明・胡應麟『詩藪』）にあるように、対句表現の自由さを妨害する恐れもある。近体詩にこういった矛盾が内在しているため、「詩を学ぶに、まさに活法を知るべし。所謂活法は、規矩具に備へ、しかもよく規矩の外に出る。変化不測にして、また規矩に背かざるなり¹⁷」（宋・呂本中『夏均父集序』）と唱える見解も見えてくる。つまり、詩人に對して、近体詩の定めを守ることに配慮することは当然でありながら、それらに縛られずに、篇法や、句法や、字法に変化を求める姿勢も望まれている。流水対は、「変」と「通」という両面を併せ持ったための、詩学の活法の一つではないかと思われる。

更に、小西甚一氏が『文鏡秘府論』の対句論を検討する際に述べた典型的な対偶に関する見解からも、同様の考え方が窺える。

民族性に深く根ざした対偶的表現が新しい展開を必要とするに到ったのは、対偶そのものに内在する矛盾性の表れと思ふ。対偶的表現は、その均斉や映発により、くつきりした姿を描き出すところに特徴があるけれど、あまりにも姿がきまり過ぎると、かえって動きが取れなくなり、表現も際立たない。そこで、対偶を生かすためには、ある程度のゆとりがなくてはならない。それには、均斉や映発の度を幾つか減殺することが必要となる。こうして、典型的な対偶にはなかった別の味ひが生まれ、その味ひを積極的に生かしていったのが、非対偶的な表現にまで進展したものと思われる¹⁸。

この記述で、小西氏は、典型的な対偶を肯定しながらも、非対偶的な要素が表現法の進展を促進したのだと認めている。ここで流水対に置き換えて考えてみると、意味上では、上句と下句が対照あるいは対立な関係にないことが、小西氏が述べた「均斉や映発の度を幾つか減殺する」

という非対偶的な要素ではないかと考えられる。流水対はこの非対偶的要素を用いることにより、今までになかった味わい、上下句の豊かな表現能力を引き出すことを可能にしている。このことは正に彼の言うところの「対偶的表現が新しい展開を必要とするに至った」局面における、対句表現史においての一つの打開策となったということができよう。

以上を簡潔に纏めると、流水対の対句表現史においての意義は、「通」と「変」、すなわち、伝統的な対句表現の規則を正しく保ちながらも、それに縛られずにあらたな変化を求め、対句表現にバリエーションを齎したことにあると考えられる。

三、九世紀の日本漢詩における流水対

平安初期の日本漢詩文学を俯瞰すると、近体詩の規律が受け入れられ、定着しはじめた九世紀前半と、近体詩の創作がより熟練の境に達したとされている九世紀後半という、二つの時期に分けて考察することができ¹⁹。これに基づき、本節では九世紀前半の日本漢詩の性格を最も忠実に反映している詩集とされる『文華秀麗集』と、九世紀後半を代表する

島田忠臣と菅原道真の詩集を考察の対象にした。

『文華秀麗集』の近体詩の対句の全体像を見てみると、対照・対立関係にある対句表現が多いことが顕著である一方、流水対は以下の一例のみである²⁰。

●●○○●●○○○○
地勢風牛雖異域 天文月兔尚同光（27月夜言離。桑原腹赤。首聯）

地勢風牛域を異さかひにすると雖も、天文月兔尚てんもんげつとし光を同じくす。

対語と韻律では、はっきりした対をなしていると同時に、意味上は、「土地の有様は相慕う牡と雌の牛が遠く離れているようであつて、君と私とは住む地域を別々にするが、空の月はやはり光を同じくする」という文脈をなし、上下句が「雖…尚」という逆接的な関係にあるのである。

一方、『菅家文章・後集』と『田氏家集』における流水対を調査したところ、それぞれ三十五例、十一例を検出した。これらの流水対は、まず、対語上と韻律上では、近体詩の対句の規律を厳守している。また、意味上では、上下句をもつて一つの事柄を叙述する事は勿論、その上下句の互いのかかわり方が、前述した『文華秀麗集』にある流水対に見られる

逆接的な文脈のみに留まらず、より豊かになったことが窺える。さらに、それらの様々な文脈構造は、詩人の心情、情景表現をより自在に展開させることができたように考えられる。以下では、道真詩における用例を幾つか挙げながら説明を加えてみたい²¹。

●●○○●●○○○○●●
1) 欲避逋租客 還爲招責身（201寒早十首之二。領聯）

避けまくほりして租を通る客は、還りて責めを招く身となる。

この一聯では、上句の「客」は、連体修飾語の「避けまくほりして租を通る」の対象でありながらも、下句の「還りて責めを招く身」の主語でもあるため、上句・下句は互いに深く関わっており、緊密的に一体となっている。一句一句独立できる典型的な対句より、巧みな句法を為し、趣のある対句表現であると考えられる。

●●○○●●○○○○●●
2) 曉出蓬門去 昏尋澗水還（168樵夫。領聯）

曉に蓬の門を出で去き、昏に澗の水を尋ねて還る。

上句の「曉」と、下句の「昏」という時間を表す言葉で、時間の経つと共に変化して行く出来事を語っている。一聯の出来事は、時系列に沿って展開される為、意味上での一貫したリズムが流れている。上句と下句の語順が任意に替えられない所に、流水対の特徴が窺える。

3) 唯○●●○○●● 豈○●●●○○
 有十句相長養 豈教五出且銷殘

(149 相府文亭、始讀世說新書。聊命春酒、同賦雨洗杏壇花。 頸聯)

唯だ十句相長養すること有り、豈 五出をして且銷え残はしめむや。

一聯は「春雨は、十句即ち百日、万物を育て養うものであるから、花びらをいつまでも散り残しておくわけではない」という意味で、上下句が原因と結果との関係にあり、互いに独立できせず一体となっている。特に、下句は上句に述べた原因を踏まえながら、また「豈」という反語のニュアンスを表す副詞を用いて、花びらがいつまでも散り残っているわけではない、という結果をより確実に際立たせている²²。表現の重点を下句に置くことにより、詩人の感情の微かな起伏や、心の動きも巧みに表現できるようになったと思われる。

4) 怪○●●○○●● 祇○●●○○●●
 來日日形容變 祇是行行世路難 (301 白毛嘆。 第三聯)

怪來むらくは 日日形容の變れること。 祇に是れ行行世路の難。

「日々わが容貌がかわってゆくのは、いったいどうしたわけであろうか。それは、人生行路は危難に満ちているからである」という意味である。

語順から見れば逆さまの因果関係を示していると考えられる。だが、文脈構造からみれば、上下句が主従関係にあり結果と原因との関係を明白

にするという目的よりは、むしろ一聯の重点が下句に置かれており、下句の原因を強調していると扱うべきである²³。つまり、上句の述べた「日形容の變れる」という結果より、「行行世路難」という原因を強調している。こうした「行路難」の嘆きは、道真詩にしばしば見られるが、これをこの一聯の中で際立たせることにより、当時讃岐に流されたための憂いの思いをより一層強烈に表現できるようになった。偏りのない典型的な対句に比べ、作者の心緒をより精密に描写した一聯ではなからうか。

5) ●○○●○○●● ○○○●○○●●
 寄身雖苦爲南海 投歩猶安省北堂 (190 得故人書、以詩答之。 頸聯)

身を寄する 南海たることを苦しべども。 歩びを投せば猶し安に北堂を省みる。

「身を南海道の讃州に寄せて、旅愁に苦しんでいるのだけでも。庭先をことごとく歩いてみると、まるで大学寮の庭にでもいて、安らかに北堂(文章院)を振り返ってみるかのような錯覚におちいつてしまう」という意味で、詩人の苦しい心境から自適な心境への移り変わりの跡を表現している。また、この移り変わりの跡には、都から追い出されたという悲しみを生き抜き、安らかな精神状態を求め、樂觀的な考えをしようとする姿勢が窺えると共に、彼が南海にいながらも、都への深い未練を

持っていることも表わしている。詩人の複雑な感情表現が、「雖…猶…」という流水対特有の文脈の中で可能になっている。

●●○○●● ●●○○●●
6) 従自初來言已立 欲令後到禮相沿

(262丙午之歳、四月七日、(略) 便以嗟歎云尔。第十三聯)

初め來りて言已に立ちしより、後に到りしものをして禮相ひ沿はせしめまく欲りす。

「初めて蓮を部内の寺にあまねく移植しようという願いを立てて以来、私の後に赴任してきた人に対しても、私の志を受け継いでもらいたいと思っている」という意味である。下句の述べた出来事を、上句において時間的背景をより詳しく表わしている。換言すれば、下句は、上句に述べた特定の場合でこそ成立するものであるため、出来事はより精密に叙述することが可能になっている。

○○●●○○●● ●●○○●●
7) 如何露溢思親處 況復潮寒望闕時 (98八月十五日夜、思舊有感。頸聯)

如何にぞ 露溢れて親を思ふ處。況復むや潮寒くして闕を望む時はや。

「白露が万象に溢れるほどしつとりおりるこの地に、亡親のことをしみ

じみ思うこの気持ちは如何ばかり切ないかを知ってもらいたい。まして、瀬戸の海の潮が冷涼の気を帯びるとき、東北方の宮城の空を振りさけ見る気持ちはいうまでもない」という意味である。上句では、まず詩人が親を思う時の寂しい風景を描き、下句はこれを受けながらも、「況復」という副詞を通じ、更なる荒涼な背景を際立たせ、上句に表れる切ない気持ちをより一層深化させている。構造が比較的単純な正・反対に比べれば、起伏のある句法であり、より大きな表現力を持っているように思われる。

四、流水対に見られる日本近体詩の展開

前述したことをまとめると、以下の二点が明らかになった。

一、勅撰三集の時代に、流水対の運用が夙に起こっており、菅原道真と島田忠臣などの詩人が輩出した時代に到ると、前代に比べ、更に多くの流水対が用いられるようになった。

二、句法の運用の視点からすれば、菅原道真と島田忠臣の時代に至ると、流水対は、上句と下句の関わり方がより変化に富むようにな

まず第一点についてであるが、当時の文学的背景を踏まえてより深く分析する必要があるものの、先行研究がすでに明らかにしている通り、勅撰漢詩集の日本詩人は、既に近体詩の規則を正しく運用する能力を持つており、近体詩の対句形式としての流水対を成立させる基盤が整っていた事は確かである。しかし、一方では、嵯峨天皇の趣向によつて古体詩への偏重が見られ、正しい律詩の声律に合致しない詩作が少なくないことも指摘されている。これは「より自由な思想の展開を求めた当時の詩壇における創作の一つ側面」を表わしているともいえる²⁴。『文華秀麗集』の一四八首の詩作に近体詩がわずか四七首しかないのに対し、古体詩が多数あるということは、その一つの表れであろう。

微誠有感降恩顧　欲酌春醪心自寛　（15春日左將軍臨況　勇山文繼）

感發良宵不寐久
況乎聞鴈白雲天

感は良宵に發りて寐られぬこと久し、況乎むや鴈を聞く白雲の天。

何れの處にか衣を擣ちて宵より旦に達る。空楼の月下 万家の場

四五老僧迎鳳輦
久除有結意恒空

四五の老僧鳳輦を迎へ、久に有結を除きて意恒に空なり。

思蟲寧ぞ憶有らむや、誰が為にか寒衣を織る。

これらの五つの詩句を分析すると、一つの事柄が両句にわたって述べられており、韻律上では、近体詩の規律を守っている。仮に対語の規則も守っているならば、流水対と見なすべき詩句である。ここで、詩人達が対語の規則を放棄した理由を考える時、中国詩人李白の場合と同様に古風を求めようとした、とするのは早計であろう²⁵。各用例の作者の律詩全体を見渡すと、頷聯に散句を用いているのはただ一箇所のみであり、決して常用していた手法ではなく、対語を成さなかった理由が古風な作風を目指したことにあるとは考えにくいからだ。

詩の本質は人間の感情を表す所にある。意思の自由表現と詩の形式との間に衝突が起こり、両立できない場合に、形式上での規則を放棄するのは決して不自然なことではない。前掲の最後の詩句を例にすれば、「物思わしげに悲しそうに鳴く虫は、恋しい人がいないのに、機を織るような声を出して鳴いているのは、一体誰のためか」という意味で、女性が遠方にいる恋人を切なく思慕しつつも、思慕の無意味さに気付くという矛盾した心情を婉曲に表現している。こうした屈折した意味や、繊細な心の動きを、対立・対照の関係にある対句において表現するのは、かなり困難なことであろう。これは技術上での問題とも関わるかもしれない

が、『文華秀麗集』の詩人は、意志の自由表現と規則を守ることを両立できない場合には、自由表現を重視し、対語上での規則をやむなく放棄したものと考えられる。

しかし、島田忠臣や菅原道真が出現したことにより、日本詩人たちは完熟した近体詩風を受け入れるようになり、近体詩の規則意識がより深く根付いた²⁶。島田忠臣の二二二首の詩作中、近体詩は二一九首あり、菅原道真の五百十九首の詩作には、近体詩は五〇二首見られる²⁷。流水対が近体詩の表現法であることを併せて考慮すると、九世紀の前半から後半にかけて近体詩への偏重が進んだことは、流水対を作り出す比率を次第に高くしたと考えられよう。殊に、道真の詩作は平安漢文学史における大きな転換点に立つもので、技術上での高さを示す記念碑的達成だとされている。近体詩に対する運用力が非常に高いため、対語や押韻、平仄の規則を厳守しながらも、それに拘束されることなく、心の複雑な動きをより自在に詩句に書き込むことができたのである。このようなしつかりした技術的な基盤の上で、流水対も、次第により多く創作されるようになったわけである。

次に、第二点目についてであるが、対句表現に着目して考えると、島

田忠臣、菅原道真の詩作における流水対は、日本漢詩の対句表現にバリエーションを齎したと思われる。

『文華秀麗集』の対句を調査したところ、前述した一例の流水対、及び律詩の定めに従っていない五つの用例以外は、対照・対立関係にある典型的な対句形式が殆どである。以下は、『文華秀麗集』に収録された菅原清公のすべての律詩である。

御狄寧無計 微軀鎮一方 泣隨重塞尽 愁向遠天長

隴月分行鏡 胡水凍旅裝 誰堪氈帳所 永代綺羅房（64 奉和王昭君）

狄を御ぶるに寧ぞ計無からむや、微軀一方を鎮む。泣は重塞に随ひて尽き、愁は遠天に向きて長し。隴月行鏡を分かち、胡水旅装に凍る。誰か堪へむ氈帳の所、永に綺羅の房に代ふることを。

春風吹物暖 朝夕蕩庭梅 花点紅羅帳 香縈玉鏡台

榆關消息断 蘭戸歳年催 度征人意 空勞錦字廻（68 奉和梅花落）

春風物を吹きて暖けく、朝夕庭梅を蕩がす。花は点く紅羅の帳。香は縈る玉鏡の台。榆關消息断え、蘭戸歳年を催す。未だ度らず征人

の意、空しく勞く錦字を廻らすことに。

百年嗟易辞 過隙幾何時 晨晷斜無駐 春花落有期

桃蹊長掩迹 蒿里忽迎輜 雖覺生涯理 人情尚可悲

（89 奉和侍中翁主挽歌詞二首之一）

百年の辞り易きことを嗟く、隙を過ぐること幾何の時ぞ。晨晷斜にして駐まること無く。春花落つる期有り。桃蹊長に迹を掩ひ、蒿里忽ちに輜を迎ふ。生涯の理を覺ると雖も、人情尚し悲しむべし。

鳳掖榮華尽 烏書卜兆通 向朝傷薤露 欲暮泣楊風

漢浦星光缺 秦楼月影空 定知雲雨貌 長絶楚臺中

（90 奉和侍中翁主挽歌詞二首之二）

鳳掖榮華尽き、烏書卜兆通ふ。朝に向かひて薤露を傷み、暮に欲して楊風に泣く。漢浦星光缺け、秦楼月影空く。定めて知る雲雨の貌、長に楚臺の中に絶ゆることを。

歲暮倡楼冷 征夫消息希 思蟲寧有憶 誰為織寒衣

細緯元無杼 疎經不待機 疋成如可借 遠送寄金微

歳暮の倡楼冷やかにして、征夫の消息希らなり。思蟲寧ぞ憶有らむや。誰が為にか寒衣を織る。細緯元より杼無く、疎経機を待たず。

疋成りて如し借るべくは、遠く送りて金微に寄せむ。

傍線部の箇所は、意味上では、何れも対照或いは対立関係にある対句であり、流水対の使用は一箇所も見当たらない。これは、菅原清公の律詩に限られた特徴ではなく、『文華秀麗集』の近体詩の詩作に見られる一般的な傾向でもある。

無論、島田忠臣、菅原道真の詩作には、こういった典型的な対句表現が多数存在している。だが、流水対の使用は、勅撰三集時代より明らかに多くなり、上下句の関わり方もより豊かになったのである。殊に、道真の流水対を細かく分析してみれば、前述した「暁…昏…」のような句法が時間に即して精密に出来事を叙述することを可能にし、「雖…猶…」などの屈折した句法が詩人の繊細な感情の変化を巧みに表現することを可能にしたことが分かる。彼の流水対は、意味の精密な伝達、感情の自由表現を実現させる上で大きな役割を果たしたと考えられるのだ。さら

に、彼の流水対は対立・対照以外の様々な関わりをなしており、これ自体が非対偶的な要素を齎し、対句表現を内的な次元(意味内容)において変化させたといえよう。

平安前期の日本漢詩文学の展開の流れの中で、九世紀後半の詩人は、典型的な対句にとどまることなく、より変化に富んだ句法を作り出し、対句表現に新たなバリエーションを齎したのである。

おわりに

前述したように、流水対の概念は、中国の明代に至ってからはじめて詩話に記述されたものであるが、その句法自体は、唐代における近体詩の発達と共に、対句表現のバリエーションの一つとして生まれたものである。九世紀の日本漢詩文学が中国唐代のそれに大いに影響されたことから考えれば、日本における流水対の発生原因を中国漢詩に求めるのは、順当な考察であると思われる。しかし、流水対を形成している要素、即ち近体詩の対句規則を厳守できる技術力の基盤と、心情表現や意思伝達をより自在に展開させようとする詩人の意欲という二点から考えると、

日本漢詩の展開の中から流水対が自己発生した可能性についても検討する余地がある。『文華秀麗集』に窺えるような対語の規則を破り自由表現を追求しようとする表現意欲が、対句形成の成熟の中で、流水対に実現するという展開も考えられるかもしれない。流水対に注目することで見えて来る問題は豊富にあると考えられる。

〔注〕

- 1 流水対を言及した書籍は、中国側では、周振甫氏の『詩詞例話』（江蘇教育出版社、二〇〇六年）王力氏の『漢語詩律学』（『王力全集』卷十四、山東教育出版社、一九八九年）、蔣紹愚氏の『唐詩語言研究』（中州古籍出版社、一九九〇年）、傅佩韓氏の『中國古典文學的對偶藝術』（光明日報出版社、一九八六年）などが挙げられる。日本側では、古田敬一氏の『中国文学における対句と対句論』（風間書房、一九八二年）、松浦友久氏の『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）などにおいては流水対に関する記述が見られる。

- 2 詩文の引用と訓読は、戸田浩暁『文心彫龍』（明治書院、一九七八年）に従う。

- 3 詩文の引用と訓読は、興膳宏『弘法大師空海全集 第五卷』（筑摩書房、一九八六年）に従う。
- 4 松浦友久『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）における「流水対」の条を参照。

- 5 前掲注1に同じ。王力『漢語詩律学』220頁。原文は中国語で、日本語への翻訳は私訳である。

- 6 周振甫『詩詞例話』（江蘇教育出版社、二〇〇六年）原文は中国語で、日本語への翻訳は私訳である。

- 7 明・胡震亨『唐音癸簽』（上海古籍出版社、一九八一年）31頁を参照。劉沄虚とは、劉長卿のことを指す。

- 8 王德明『中国古代詩歌句法理論の発展』（広西師範大学出版、二〇〇〇年）249頁。

- 9 領聯、尾聯の出句には下三連の問題がある。しかし、近体詩の規則では、仄三連は平三連ほど厳しくは問わないため、この一首は五言律詩と見なすべきである。

- 10 古体詩が主体を占めている『懷風藻』を考察対象にする際に、流水対と相似しながらも、韻律上では流水対の条件を満たしていない対偶表現を如何に見なすべきか、等の問題にも関わっているためである。

- 11 松浦友久『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）250頁。

- 12 前掲注3に同じ。三五八頁。

- 13 小西甚一『文鏡秘府論考』研究篇 上下（講談社、一九五二年）175

頁。

14 注4に同じ。710頁。

15 『文心彫龍』の中で、戸田浩暁が「通變篇」は「創作に際しては、一方では伝統を正しく継承する（通）と共に、他方では伝統を踏まえつつ新しい工夫を試みる（変）ことの重要性を説き、さらにこの二事に関する原則を論ずる」ものであるとしている。

16 引用は横田輝俊『詩藪』（明徳出版社、一九七五年）に従う。

17 原文は中国語。宋・劉克庄『後村先生大全集』卷九五（上海商務印書館、一九三六年）の『江西詩派小序』に収録。

18 前掲注13に同じ。

19 黄少光「奈良・平安朝日本漢詩の詩律的研究」（東京外国語大学博士論文、二〇〇三年）。

20 詩文の引用、訓読は、小島憲之『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（岩波書店、一九六四年）に従う。現代語訳は、小島憲之の注釈を基にしたもの。

21 道真詩文の引用は、川口久雄『菅家文章・後集』（岩波書店、一九六六年）に従い、訓読は、主に川口久雄の訓読を参考にした。現代語訳は、川口久雄の注釈を基にしたもの。また、詩句の文脈構造に対する分析方法は、王力氏の『漢語詩律学』（第二十一節 近体詩的語法（中））、楊伯峻氏と何樂士氏の『古代漢語語法及其發展』（語文出版社、一九九二

年）を参考にしている。

22 楊伯峻・何樂士『古代漢語語法及其發展』960頁に「因果複句的分句之間有原因和結果的關係。它又可分為兩類，一類是先因後果，一類是先果後因。無論哪一類，重點都在下分句」とある。

23 前掲注22に同じ。

24 黄少光「勅撰三集の詩人と詩律学」（『和漢比較文学』第二十五号、二〇〇〇年）13頁。

25 律詩の領聯に對をなさないのは、古詩の風格を追求することに裏打ちされていた。例えば、詩仙と呼ばれる李白も、五言律詩の領聯に散句を用いて、古詩の風格を模倣したのである。王力『漢語詩律学』174頁。

26 注19に同じ。「貞観・寛平・延喜期になると、日本漢詩が完熟した唐の近体詩風を受け入れる過程はほぼ完成した。その時代を代表する優れた詩人である島田忠臣、菅原道真が残した詩集『田氏家集』『菅家文章・菅家後集』を読めば実感できるのである」とある。

27 谷口孝介『菅家文章』の詩体と脚韻」（『国文学』第三号、同志社、一九九〇年三月）、小島憲之『田氏家集注』（和泉書院、一九九四年）を参照。

第二節 隔句対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開

はじめに

本節は、隔句対の運用という視点から、平安前期の日本漢詩の対句の形を考察するものである。隔句対は、漢詩の対句表現の一つとして、『筆札華梁』（上官儀（約六〇七―六六四年））、『文筆式』（作者不詳。盛唐以前）、『詩格』（旧題魏文帝。初唐）、『詩議』（皎然（七二〇―七九八年））等に説かれており、中国唐代の詩学理論において既に定着したものである¹。通常の対句は、連続する二つの詩句を対にしており、句を対の単位にしている。これに対して、隔句対は、

昨夜越溪難 含悲赴上蘭

今朝踰嶺易 抱笑入長安

昨夜 溪を越ゆること難し、悲しみを含んで上蘭に赴く。

今朝 嶺を踰ゆること易し、笑ひを抱きて長安に入る。『文鏡秘府論』東

卷²

のように、句を隔てて、第一句と第三句、第二句と第四句を対照させており、聯（二句）を対の単位にしている。つまり、隔句対は、通常の対句に見られる対比・対照の性格をもちながらも、その具体的な形においては、通常の対句と異なり、独特の形式を有している。こういう独自の形を持つ対句を考察の手掛かりにすることは、日本漢詩の対句の特質を明らかにするために、一つの有効な考察方法ではないかと考える。

一、平安前期の日本の文学理論書における隔句対

平安前期の日本詩人が漢詩を創作する際に、中国や朝鮮などの国から渡来した漢籍の書物が不可欠な糧であったことを考えると、日本漢詩人の隔句対に対する認識は、漢籍に載るその情報と密接な関わりをもっていると思われる。

前述した隔句対を説いた唐代の詩話は、大同元（八〇六）年に、留学僧の空海により日本に招来されたものである。それは、最初の勅撰漢詩集『凌雲集』の成立より十年ぐらい前の事である。また弘仁年間、彼は

網羅した詩話を整理編集し、文学理論書の『文鏡秘府論』を完成させ、また本書の要所を抜粋し、『文筆眼心抄』を著した。『文筆眼心抄』の成立時期は弘仁十一（八二〇）年であるため、隔句対の日本における理論としての確立は遅くとも弘仁十一年以前であり、つまり勅撰三集の最後を飾った『経国集』の結集以前であることがわかる。

『文鏡秘府論』の東巻は、対句の二十九種類の第二種類目において、隔句対の用例と用法を詳細に記している。前に引いた一例を始めとして以下の四例の実例が示されている。

相思復相憶 夜夜泪沾衣

空悲亦空嘆 朝朝君未歸

相ひ思ひて復た相ひ憶ひ、夜夜 泪 衣を沾す。

空しく悲しみて亦た空しく嘆き、朝朝 君未だ歸らず。

月映茱萸錦 艷起桃花頰

風發蒲桃綉 香生云母帖

月は茱萸の錦に映え、艷は桃花の頰に起る。

風は蒲桃の綉を發き、香は雲母の帖に生ず。

翠苑翠叢外 單蜂拾蕊歸

芳園芳樹裏 雙燕歷花飛

翠苑翠叢の外、單蜂 蕊を拾ひて歸り。

芳園芳樹の里、雙燕 花を歷て飛ぶ。

始見西南樓 織織如玉鈎

末映東北墀 娟娟似蛾眉

始めて西南の樓に見るに、織織として玉鈎の如し。

末に東北の墀に映じ、娟娟として蛾眉に似たり。

これらは、空海みずから『文鏡秘府論』を整理要約して携帯や檢索に便利なようにした『文筆眼心抄』（一卷。弘仁十一年）にも記載されている。またうち四つの隔句対の用例の後に、「釈に曰く…」という様式がとられ、その構成については詳細に解釈している。例えば、前に引用した用例については、「釈に曰く、第一句の昨夜と第三句の今朝

と對し、越溪と逾嶺と是れ對し、第二句の含悲と第四句の抱笑と是れ對し、上蘭と長安と對す」とある。

つまり、九世紀前半の知識人たちは、これらの用例と解釈を通じて隔句對を理解していた可能性が高いと考えられる。

二、『詩經』・『文選』における隔句對

本節では、前述した隔句對の定義に基づき、中国最古の詩集である『詩經』および漢魏六朝の文華を収録した『文選』の詩作を考察の對象として、両集における隔句對を調べてみた。調査の結果、『詩經』には九十六例、『文選』の「詩篇」の部門には八例見つけた。まず『詩經』にある隔句對を見てみる。

参差荇菜 左右流之

窈窕淑女 寤寐求之 (『詩經』周南・關雎³)

参差たる荇菜は、左右に流む。

窈窕たる淑女は、寤寐に求む。

参差荇菜 左右采之

窈窕淑女 琴瑟友之 (同上)

参差たる荇菜は、左右に采る。

窈窕たる淑女は、琴瑟もて友す。

参差荇菜 左右芼之

窈窕淑女 鍾鼓樂之 (同上)

参差たる荇菜は、左右に芼る。

窈窕たる淑女は、鍾鼓もて樂む。

この三つの用例は、『詩經』の冒頭における一首の詩作に用いられているものであり、二十句の原詩のうち、半分以上の十二句が隔句對の形を取っていることがわかる。

また、『文選』からの用例は以下の通りである⁴。

吾希段干木 偃息藩魏君

吾慕魯仲連 談笑却秦軍(卷二十一「詠史八首」三 左太沖)

吾は希^{こひねが}ふ 段干木^{だんかんぼく}の、偃息して魏君に藩たりしを。

吾は慕ふ 魯仲連の、談笑して秦軍を却^{しりぞ}けしを。

貴者雖自貴 視之若埃塵

貧者雖自賤 重之若千鈞(同上「詠史八首」六)

貴者は自ら貴^{たつと}ぶと雖も、之を視ること埃塵^{あいじん}の若し。

貧者は自ら賤^{せん}しむと雖も、之を重^{せん}んずること千鈞^{せんきん}の若し。

習習籠中鳥 拳翮触四隅

落落窮巷士 抱影守空廬(同上「詠史八首」八)

習習たり籠中の鳥、翮を拳^{こぶ}げ四隅に触る。

落落たり窮巷の士、影を抱^{かか}りて空廬を守る。

この三つの用例は、左太沖の手によって「詠史八首」の三首において使われているものである。同じ作品群にあるため、比較的に読み取りやす

い対句の表現法ではないかと考えられる。

なお、以下の日本の『養老律令』の学令と考課令からもわかるように、『詩経』と『文選』が奈良時代以降、国家最高教育機関である大学寮において用いられる教科書であったことは、周知の通りである。

凡そ経は、周易・尚書・周礼・儀礼・礼記・毛詩・春秋佐氏伝は各一経となす。(学令)

凡そ明経は、試みむこと周禮・左傳・禮記・毛詩各四条。(考課令)

凡そ進士は、試みむこと時務策二条。帖じて読まむ所。文選の上株に七帖。(考課令)

つまり、平安前期の知識人たちは、『詩経』や『文選』の詩篇を通して隔句対を読み取った可能性がかなり高いと言える。殊に、勅撰漢詩集における駢儷文などをみると、実際に隔句対の文章がすでに用いられており、熟練した文学表現法であることがわかる。

こうした文学素養を有する人たちは、その漢詩の創作において隔句対を用いていたかどうか、またもし用いたならば、如何に運用していたのか、とても興味深い問題となる。

四、平安前期の日本漢詩における隔句対

本節では、平安前期の漢詩文学を代表とする勅撰漢詩集と『田氏家集』『菅家文草・後集』における隔句対を考察の対象にした。調査の結果、九世紀前半を代表する勅撰三集『凌雲集』（八一四年）、『文華秀麗集』（八一八年）、『経国集』（八二七年）の詩作において隔句対の運用は一例もなかったのに対し、九世紀後半の詩人、島田忠臣の『田氏家集』（八九一年）と菅原道真の『菅家文草・後集』（九〇〇・九〇三年）には、前者に二例、後者に十一例が確認された。つまり、現存作品に限るとはいえ、勅撰三集時代には隔句対はまったく用いられず、島田忠臣、菅原道真の時代になつてはじめて運用されるようになったことがわかる。まず、島田忠臣の詩作における隔句対を見てみよう⁶。

李老擁龍姿 聊興世間塵

孔子懷鳳徳 曾言我道窮『田氏家集』二二「歎李孔」

李老は龍姿を擁す。聊か世と間塵を同じくす。

孔子は鳳徳を懷く。曾て言ふ 我が道窮すと。

大周非無人 眞人謝匪躬

小魯尚有君 將聖不登庸（同上）

大周 人無きに非らず。眞人 匪躬を謝す。

小魯 尚し君有り。將聖 登庸せられず。

この二つの用例は、古体詩の様式である原詩においては連続的に使われており、島田忠臣が隔句対を古体詩の対句表現として認識していたと考えられる。

次に、菅原道真の詩作における隔句対を見てみよう⁷。

1) 我挙秀才日 箕裘欲勤成

我為博士歳 堂構幸經營（卷二 八七「博士難。古調」）

我秀才に挙げられし日、箕裘 勤めて成さんと欲せり。
我博士と為りし歳、堂構 経営を幸ひにせり。

2) 明神若不愆玄鑑 無事何久被虚詞

靈祇若不失陰罰 有罪自然為禍基(卷二九八「有所思」)

明神若し玄鑑^{あやま}を愆^{あやま}たずは、事無きに何ぞ久しく虚詞^{かかふ}を被りてあらむ。

靈祇若し陰罰を失はずは、罪有るは自然に禍の基とならむ。

3) 十里百里又千里 駟馬如龍不及舌

六年七年若八年 一生如水不須決

(卷二二八「詩情怨。古調十韻。呈蒼著作、兼視紀秀才。」)

十里百里また千里、駟馬は龍の如くなれども舌に及ばず。

六年七年若しくは八年、一生は水の如くなれども決るべからず。

4) 惡我偏謂之儒翰 去歲世驚自然絶

呵我終為実落書 今年人謗非真説(同上)

我を惡むに偏に儒翰なりと謂ふ、去歲 世の驚くこと自然に絶ゆ。
我を呵して終に実の落書となす、今年 人の謗ること真説ならず。

5) 雖遇陽侯怒 基堅不近攻

雖遭班爾匠 材陋不為容(卷三二二「舟行五事」)

陽侯の怒りに遇うと雖も、基堅くして攻むるに近からず。
班爾の匠に遇うと雖も、材陋なくして容を為さず。

6) 若有僧為俗 寺中惡不通

仮令儒作吏 天下笑雷同(卷三二二「舟行五事」)

若し 僧の俗と為ること有らば、寺中惡みて通さざらむ。
仮令 儒の吏と作らば、天下雷同を笑ひなむ。

7) 茫茫不測水 豈是毛群栖

森森無涯浪 未曾野獸蹊(卷三二二「舟行五事」)

茫茫たり測らざる水、豈これ毛群のすみならむや。
森森たり涯^{はて}し無き浪、未だかつて野獸の蹊ならず。

8) 早起呼童子 扶持殘菊花

日高催老僕 掃除庭上沙(卷五 三六〇「假中書懷詩。古調」)

早く起きて童子を呼ぶ、扶持す 殘菊の花。

日は高くして老僕を催し、掃除す 庭上の沙。

9) 裸身博奕者 道路呼南助

徒跣彈琴者 閭巷称弁御(後集四八三「慰少男女」)

裸身にして博奕する者、道路にて南助と呼べり。

徒跣にして彈琴する者、閭巷にて弁の御と称へり。

10) 君瞰我凶慝 擊我如神鬼

君察我無辜 爲我請冥理

(後集 四八六「哭輿州藤使君。九月廿二日、四十韻。」)

君 我が凶慝を瞰れば、我を撃つこと神鬼の如し。

君 我が無辜を察れば、我がために冥理を請はむ。

11) 長者好漁竿 悔不早裁截

短者宜書簡 妒不先編列

(後集 四九〇「雪夜思家竹。十二韻。兼本五言古調十二韻」)

長き者は漁竿に好かりしに、悔ゆらくは早く裁ち截らざりしことを。

短き者は書簡に宜かりしに、妬ましくは先づ編み列ねざりしことを。

創作時期から見れば、用例1)は、道真が三十八歳時の「博士難」、用例3)・4)は、三十九歳時の「詩情怨」、用例5)から7)までは四十三歳時の「舟行五事」、用例9)は五十七歳時の「少き男女を慰める」、用例11)は五十八歳時の「雪の夜に家なる竹を思ふ」から引いたものである⁸⁾。つまり、彼は、中年時代から老年時代にかけての長い期間にわたって隔句対を運用していたのである。

また、詩体からすれば、隔句対が運用された詩作は、皆古体詩である。道真の詩集における古体詩はわずか十八首に過ぎず、そのうちの十首に隔句対が用いられていることがわかる。全古詩の半数を超えており、菅原道真は、隔句対を古体詩の対句の表現法として多く用いたことが明ら

かである。

ここで、島田忠臣と菅原道真との関係をあわせて考えると、師父と弟子とが漢詩句法の運用に対し同じ見方を持つているのは不自然ではない。ただ、隔句対の使用頻度を考えると、道真の詩集においては、隔句対が古体詩の表現法として定着していたが、忠臣の詩集においては、この表現法が一首のみにしか現れておらず、試みとしての運用であると見なして良からう。

ここまで述べたことから、空海の『文鏡秘府論』・『文筆眼心抄』、大學寮の教科書であった『詩経』・『文選』などにより、隔句対がすでに日本に持ち込まれていたにもかかわらず、漢詩においての実際の運用は、島田忠臣、菅原道真の時代になって初めて見られたことがわかる。この原因としては、承和以降に日本で流行している白居易の詩集が、九世紀後半の詩人に齎した刺激が大きかったことが挙げられよう。

五、承和以降に流行した白居易の詩集における隔句対

白居易の詩集が日本に伝来した経緯及び承和以降の日本詩壇における

その流行については、数多くの先学により論じられている。本節では、それらの論考を踏まえ、前述した九世紀前半と後半における隔句対の運用の差の問題を念頭に置きながら、白居易が詩作において如何に隔句対を運用していたのかという問題に絞り、考察を加えていきたい。

中国の漢詩詩学の権威である王力氏が、古体詩の対句を論ずる際に、白居易が隔句対を愛用する詩人であることに言及し、用例として『白氏文集』の巻三、巻四に収録された「諷諭三・新樂府」・「諷諭四・新樂府」から隔句対を十箇所挙げた。王力氏の見解をふまえ、あらためて『白氏文集』の巻一から巻四までの詩作における隔句対を調査してみた。調査結果は、以下に掲載している表の通りである。

表 『白氏文集』における隔句対に関する調査

| 『白氏文集』 | 作品数 | 隔句対 |
|--------------|-----|------|
| 巻一 諷諭一 古調詩五言 | 64首 | 20箇所 |
| 巻二 諷諭二 古調詩五言 | 58首 | 20箇所 |
| 巻三 諷諭三 新樂府 | 20首 | 6箇所 |
| 巻四 諷諭四 新樂府 | 30首 | 10箇所 |

この表から白居易が隔句対をよく用いたことが一目瞭然である。

さらに、『白氏文集』巻一の冒頭に置かれた「賀雨」、「読張籍古樂府」、「哭孔戡」の三首に隔句対の形が七箇所現れていることから、それが読み取れる。殊に、第二首の「読張籍古樂府」には隔句対が四箇所も用いられている。以下の通りである¹⁰。

読君学仙詩 可諷放佚君

読君董公詩 可誨貪暴臣（『白氏文集』巻一「読張籍古樂府」）

君が学仙の詩を読めば、放佚の君を諷す可し。

君が董公の詩を読めば、貪暴の臣を誨ふ可し。

読君商女詩 可感悍婦仁

読君勤斎詩 可勸薄夫敦（同上）

君が商女の詩を読めば、悍婦の仁なるを感す可し。

君が勤斎の詩を読めば、薄夫に敦を勸む可し。

上可裨教化 舒之濟万民

下可理情性 卷之善一身（同上）

上は教化を裨おぎなふ可し、之を舒ふれば万民を濟ふ。

下は情性を理おさむ可し、之を卷けば一身を善くす。

願藏中秘書 百代不湮渝

願播内樂府 時得聞至尊（同上）

願はくは中に秘書として中に藏め、百代湮渝せざるを。

願はくは内に樂府として播き、時に至尊の聞きを得るを。

ここで、白居易の詩作においての隔句対の多用、及び白居易の詩作が承和以降の日本詩人に大きな影響を齎したという共通の認識を合わせて考慮すれば、島田忠臣、菅原道真は、白居易の詩から影響を受け、古体詩に隔句対を用いたという可能性がかなり高いと言えよう。

ただし、島田忠臣・菅原道真と、白居易との隔句対に対する運用の方法においては、異なる点も存在している。以下の三点が挙げられる。

第一に、詩語に関して、白詩の隔句対が同じ対語を使う場合があるのに対し、島田忠臣の隔句対はそれを完全に避け、道真詩の隔句対は、ある程度それを避けようとしていること。

第二に、詩句に関して、白詩の隔句対が楽府詩に用いられているので、五文字と七文字等の長短句の組み合わせがあるのに対して、島田忠臣、道真詩の隔句対は、それがないこと。

第三に、詩体に関して、白居易は、古体詩に留まらず近体詩にも隔句対を用いるのに対し、島田忠臣と菅原道真は、古体詩にしか使わないこと。

まず、一点目について。白詩の場合、相対している詩句には同じ対語が用いられる場合がある。例えば、

読君学仙詩 可諷放佚君

読君董公詩 可誨貪暴臣〔白氏文集〕卷二「読張籍古楽府」

君が学仙の詩を読めば、放佚の君を諷す可し。

君が董公の詩を読めば、貪暴の臣を誨ふ可し。

のように、対を成している詩句には、それぞれ「読」、「君」、「詩」、「可」という同じ対語を用いている。さらに、極端な例を挙げると、

太行之路能摧車 若比人心是坦途

巫峡之水能覆舟 若比人心是安流〔白氏文集〕卷三「太行路」

太行之路能く車を摧くも、若し人の心に比すれば是れ坦途なり。

巫峡之水能く舟を覆すも、若し人の心に比すれば是れ安流なり。

では、同じ対語が七文字あり、対句の半分を占めている。

一方、島田忠臣の隔句対には、同じ対語が無く、道真の隔句対には、同じ対語が比較的少なくなっている。一聯の中では、同じ対語は一文、二文字ぐらいの範囲に限られ、同じ対語が三文字に達する例は一つしかない。さらに、前述した道真の隔句対の用例(6)、(7)、(8)には、同じ対語が一箇所もない。

このことと『文鏡秘府論』、『文選』にある六朝時代の詩作の隔句対には同じ対語が極めて少ないことには何らかの関連があるのかもしれない。前述した『文鏡秘府論』に見られる五つの隔句対には、同じ対語が

一箇所もない。また、『文選』に見られる八つの隔句対には、同対語を使っている用例が二例しかない。その二例は、前述した左太沖の「詠史八首」三と「詠史八首」六に見られる隔句対である。

二点目については、樂府詩の格式作法に原因があると考ええる。樂府詩は、もとは樂曲にあわせて歌われた歌詞で、樂曲により多様な形式があり、一句の字数が定まらない。唐代に入ると、それまでの伝統的な音樂が失われたが、そのスタイルは模倣されたので、詩句の字数にはやはり定めがない。白居易も卷三「新樂府」の序において「篇に定句無く、句に定字無し」と述べている。一例を見てみよう。

為君薰衣裳 君聞蘭麝不馨香

為君盛容飾 君看金翠無顔色（『白氏文集』卷三「太行路」）。

君が為に衣裳を薰ずれば、君蘭麝を聞きて馨香とせず。

君が為に容飾を盛にすれば、君金翠を看て顔色無しとす。

しかし、島田忠臣と菅原道真は樂府詩の創作をしていなかったため、字数の異なる隔句対もないわけである。このことは、『文鏡秘府論』『文選』の詩作における隔句対についても同じことが言える。

三点目については、隔句対を近体詩に用いることがむしろ白居易の詩作の特徴であると考ええる。このことについて、王力氏も以下のように指摘している。

両聯を相對させる對句の形は白居易が最も喜んで用いていた。（略）律詩にまで用いることもある。しかし、この種の對句はやはり古風の表現法であると見なすべきである¹⁾。『漢語詩律學』第三十三節、古体詩對仗、私訳

また、錢鍾書氏が『談藝錄』において白居易の句法を言及した際に、「白香山の律詩の句法には革新的なものが多い。その「主簿に酬ゆ」等の詩には、七言律詩に隔句（扇面）對をはじめて用いた²⁾」と述べている。筆者の調べたところによれば、錢氏が言った「主簿に酬ふ」は「醉後筆を走らせ劉五主簿長句之贈に酬ひ、兼ねて張大・賈二十四、二先輩昆季に簡ず」（『白氏文集』卷十二）の略称ではないかと考えられる。この詩の第四十聯と第四十一聯に、

我随鵙鷺入煙雲 謬上丹墀為近臣

君同鸞鳳栖荊棘 猶著青袍作選人

『白氏文集』卷十二「醉後走筆、酬劉五主簿長句之贈、兼簡張大・賈二十

四、二先輩昆季」

我えんろは鵙えんろ鷺ろに随ずひて煙雲に入り、謬たんちりて丹墀たんちに上りて近臣と為り。

君は鸞鳳らんぼうと同じて荊棘けいきよくに栖み、猶ほ青袍せんじんを著て選人せんじんと作る。

という隔句対が成されていることが読み取れる。ただし、原詩を確認すると、この詩は、古詩の詩体をなしていることがわかる。隔句対が用いられた七言律詩について改めて確認する必要がある。

さらに、白居易の五言律詩にも、隔句対の用例が見出せる。以下のようである

縹緲巫山女 帰来七八年

殷勤湘水曲 留在十三弦

『白氏文集』卷六十八「夜聞箏中彈瀟湘送神曲感旧」

縹ひょうびよう緲びようたり巫山の女、帰りて来たり 七八年。

殷いんぎん勤ぎんたり湘水の曲、留りて在り 十三弦。

これらの三つの相違点からみれば、承和以降の日本詩人が実際の作品に隔句対を用いる際に、白居易の運用法と完全に一致しておらず、独自の使い方を持っていることが了解される。

このことは、日本漢詩文学の独特な展開と密接に関連していると考えられる。九世紀後半の日本漢詩人は、漢詩の格式作法を学習する過程で、前代の人が築いた土台の上で、創作能力がより高まり、自由自在に詩作の形や風格を作り上げる事ができ、また、当時流行している白居易の詩作から刺激を受けながらも、前代の『文鏡秘府論』や『文撰』などの書物からも詩作格式の情報を読みとりながら、大いに研鑽を積み重ねたのである。これらは、日本漢詩人の隔句対の使用法が、白居易と共通点を持しながらも、完全に一致していない大きな原因と言えよう。

おわりに

以上、平安前期の日本漢詩における隔句対に関する実態を検討することにより、九世紀の日本漢詩人たちが中国の書物を介して如何に漢詩文の格式作法を受容し、自らの漢詩文学を形成していったのかを明らかにすることを試みた。養老令の学令に定められた大学寮の教科書である『詩経』・『文選』や、空海が中国の詩話を網羅し編纂した『文鏡秘府論』（八二〇年以前成立）に隔句対の句法が窺えるにもかかわらず、九世紀前半の『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』においては、隔句対は、駢儷文などに盛んに用いられているのに対し、漢詩では一度も使用されていなかった。この対句法は、菅原道真や島田忠臣などが活躍する九世紀後半に至り、はじめて古体詩の表現法として使われることになった。この原因として、白居易が隔句対を愛用していたこと、承和期以降『白氏文集』の流行などが挙げられ、白詩の日本漢詩に与えた影響力の強さを推し量ることができる。しかし、道真の隔句対の運用法と白居易のそれを比較してみると、共通点を有しながらも、その相違も顕著であることが分かった。これは、九世紀後半における日本漢詩人が、当時の新たな文学潮流に強い刺激を受けながらも、大学寮で学習した唐以前の中国古典を模範として尊重していることを物語っていると考えられよう。隔

句対への注目を通じて、平安前期の日本漢詩がその形成過程において独自の文学環境のもとで、自らの漢詩文学のかたちを自由自在に作り出してきたのではないかと考える。

〔注〕

- 1 張伯偉『全唐五代詩格彙考』（鳳凰出版社 二〇〇二年）に収録。「第一の名對、第二隔句對、第三雙擬對、第四聯綿對、第五異類對、第六双聲對、第七疊韻、第八迴文對、第九同類對」（『筆札華梁』。上官儀。約六〇七—六六四年）。「第一的名對、第二隔句對、第三雙擬對、第四聯綿對、第五互成對、第六異類對、第七賦體對、第八双聲對、第九疊韻對、十曰回文對、第十一意對。第十二頭尾不對。第十三不對對。『文筆式』。作者不詳。盛唐以前）「八對。一曰正名、二曰隔句對、三曰雙聲、四曰疊韻、五曰連綿、六曰異類、七曰回文、八曰雙擬。」（『詩格』。旧題魏文帝。初唐）。「詩對有六格。一曰的名、二曰雙似、三曰隔句、四曰聯綿、五曰互成、六曰類對體。」（『詩議』。皎然。七二〇—七九八年）

- 2 詩文の引用と訓読は、興膳宏『弘法大師空海全集 第五卷』（筑摩書房、一

九八六年)に従う。

3 『詩経』の詩文の引用は、石川忠久『詩経』(明治書院 一九九七年)に従い、訓読は主に石川忠久の訓読を参考にした。

4 『文選』の詩文の引用と訓読は、内田泉之助・網祐次『文選』(詩篇上)(明治書院、一九六三年)に従う。

5 『律令』日本思想大系3(岩波書店、一九七六年)

6 島田忠臣の詩文の引用と訓読は、小島憲之監修『田氏家集』(和泉書院、一九九四年)に従う。

7 菅原道真の詩文の引用は、川口久雄『菅家文草・後集』(岩波書店、一九六六年)に従い、訓読は、主に川口久雄の訓読を参考にした。

8 道真詩の創作時間については、注7の書を参照されたい。

9 王力『漢語詩律学』第三十三節、古体詩対仗(中華書局、一九七三年)を参照されたい。

10 白居易の詩文の引用は、岡村繁『白氏文集』(三)(明治書院、一九八八年)に従い、訓読は主に岡村繁の訓読を参考にした。

11 原文は中国語。「両聯相對、白居易最喜歡用。(略)甚至於用到律詩裡去。

然而对仗終当認為古風所有」。

12 原文は中国語で、日本語への翻訳は私訳である。「白香山律詩句法多創。

…其「酬主簿」等詩又開七律隔句扇面之体」(周振甫・冀勤・錢鐘書『談芸錄』読本(上海教育出版社、一九九二年八月)553頁。

第二章

押韻法に関する考察

―次韻詩を中心に―

第一節 平安時代以前における次韻詩の発生

はじめに

奈良・平安時代における日本漢詩の特質を考えるにあたり、「押韻」の課題を中心に行われてきた考察は、当時の日本詩人の韻書への使用方法、押韻法の実態、また中国漢詩文学との繋がりを明らかにする上で、一つの有効な方法であった¹⁾。本節は、こうした押韻の課題に関連し、これまでに十分に重要視されてこなかった「次韻詩」の課題を取り上げるものである。

周知のように、次韻詩は和韻詩の一種である。次韻詩は、原詩と同じ脚韻をまた同じ順序で用いることが規せられるものであり、「歩韻」詩などとも呼ばれる。作詩には詩人の脚韻の運用への強い工夫が施されており、また、韻字の次元、ひいては一首の詩作の次元を超え、詩と詩との往来によって築かれている「座」の意識にも緊密に関わっていることが特徴として挙げられる。

日本漢詩に目を向けると、原詩と和詩が共に確認できた次韻詩の用例は、『文華秀麗集』に五組、『経国集』に一組ある²⁾。しかし、ここで、勅撰三集における次韻詩が、果たして日本で最も早期のものであるのかという疑問が浮かび上がる。その理由として、まず、次韻詩の発生時期が挙げられる。次韻詩は、中唐に白居易や元稹を中心とした文学集団によって始めて流行し、よく知られるようになったものの、その発生は、遠く五世紀の南北・六朝時代にまで遡ることができるのである。つまり、次韻詩は、中国漢詩文学史上比較的早い段階で形成されたものと言える。さらに、日本古代漢詩文学の結晶である『懷風藻』を確認すると、そこには次韻詩だと思われる詩作も存在しているのである。具体的には、「群書類従本系」に掲載されている「釈道融五首」の二首目「我所思兮在楽土」(『懷風藻』110番外一)と、葛井連広成の「奉和藤太政佳野之作。一首。仍用前韻四字」(『懷風藻』119)³⁾の二首がそれにあたる。この二点を踏まえると、日本詩壇における次韻詩の発生は、より早い時代まで遡ることが可能ではないかと考えられるのだ。

ただし、『懷風藻』の二首の両方については、いくつかの疑問が残っている。前者の「我所思兮在楽土。欲往従兮痴難。行且老兮盍眎勉。日月

逝兮不再還」は、「釈道融五首」の一首目「我所思兮在無漏。欲往從兮貪
瞋難。路險易子在由己。壯士去兮不復還」(『懷風藻』110)と同じ脚
韻を踏んでおり、次韻詩の形式をとっているが、この形式が見られるの
は刊本の群書類従本のみである。また、釈道融伝記の最後には、この「我
所思兮在樂土」が釈道融の作ではないと疑わせる細注が少なからず確認
できる。具体的には、脇坂本(静嘉堂文庫蔵)・紀州家本(南葵文庫蔵)
に「自此以下、可有五首詩等歟、有疑」と、尾張家本(蓬左文庫蔵)に
「自此以下、可有五首詩等歟、有疑」と、群書類従本に「自此以下、可
有五首詩等歟、今闕焉」という細注がそれぞれ付されている。林古溪氏
は、内容などから判断して、その詩が釈道融ではなく「細注者か誰か感
奮して、自作をかきつけただけであらう」と述べている⁴。なお、現存す
る『懷風藻』の伝本はすべて平安中期に惟宗孝言が書写したものに起源
があると考えられているが、細注を施した者が誰なのかは不明である。
ゆえに、現存資料からは、「我所思兮在樂土」が懷風藻時代の作であると
判断することは極めて難しい。後者の葛井連広成の詩であるが、これは
詩題の通り、当時すでに亡くなっていた太政大臣の藤原不比等の詩作へ
の和詩であり⁵、「韻を次ぐ」という作詩形式に従ったものである。ただ

し、藤原不比等の原作が現存していないため、韻を次いだことを確認す
る有力な根拠は不足していると言わざるをえない。

とはいえ、次韻詩の発生を可能にした文学的要素の視点から考えるに、
文献的な疑問はあるものの、この二首の詩作が懷風藻時代に成立した可
能性は十分にあると考えられる。本節では、中国の南北朝に次韻詩が発
生した背景、すなわち「座」の意識および脚韻の工夫を検討した上で、
それを懷風藻時代の漢詩創作の背景と対照させ、両者の類似性を明らか
にすることを通じて、懷風藻時代における次韻詩発生の可能性について
考察を試みる。

一、中国の次韻詩の発生およびその背景について

次韻詩の様式を有すると考えられる最古の詩は、宋の程大昌の『考古
編』などで指摘されているように、東魏の楊銜之の『洛陽伽藍記』(卷三)
における正覺寺の建立に関する記述に見られる⁶。以下の二首がそれであ
る。

贈王肅 謝氏女⁷

本為箔上蚕 今作机上絲 得路遂勝去 頗憶纏綿時

代答詩 陳劉公主

針是貫線物 目中恒任絲 得帛縫新去 何能納故時

右の一首は、王肅（四六四—五〇一年）が政治的原因により南朝の齊（四七九—五〇二年）から北朝の北魏（三八六—五三四年）へ逃れた後に、彼の前妻（謝氏女）から受けとった贈詩である。そして、左の一首は、王肅が北魏で再婚した継室（陳劉公主）が王肅の代わりに作った答詩である。脚韻をみると、答詩は贈詩と同じ韻字「糸・時」を用い、同じ順序で押韻しており、次韻詩の様式を成していることがわかる。

この用例については、偶然の産物だという見解もある。しかし、南北朝時代の詩壇における「座」の意識、また脚韻の運用を重視している文学的背景を踏まえて考えると、その発生には必然性が存在しているといえるのが、本節の述べようとする所である⁸。

そこで、当時の詩壇における「座」の意識や脚韻の運用の工夫を最も反映した文学様式、即ち聯句（「連句」とも）、分韻詩（「探韻」、「勒韻」

とも）、和韻詩に目を向けてみたい。

まず、聯句とは⁹、複数の者が「句」を「聯」ねて一篇の詩を作ることであり、前漢の「柏梁詩」にその源流を見出すことができる。「柏梁詩」の押韻上の特徴は、「各人一句」、「一韻到底」、「毎句韻」である。そこには、集団的な「座」への意識¹⁰や「脚韻」の運用への関心がうかがえる。

南北朝時代においては、東晋の陶淵明、宋の鮑照、齊の謝朓、梁の武帝蕭衍などが、聯句の展開を大いに促進した。前漢の柏梁詩と比べても、「各人一句」「毎句韻」が特徴であったのに対し、南北朝時代の聯句創作では、「二人で二句以上、（特に四句）を賦すものが、大勢をしめるようにな」り、偶数句で韻（隔句に押韻）を踏むものが多くなる。

なかでも実に興味深いのは、仮に参加者が交替に四句ずつ（あるいは四句以上）作る場合、結果的には「和韻」詩の一種、「依韻」詩と同じ形式になることである。その例として、『陶淵明集』（卷四）における「聯句」を見てみよう。

鳴雁乘風飛 去去當何極 念彼窮居士 如何不嘆息（淵明）

雖欲騰九萬 扶搖竟何力 遠招王子喬 雲駕庶可飭（愔之）

顧侶正徘徊 離離翔天側 霜露豈不切 務從忘愛翼（循之）

高柯濯條幹 遠眺同天色 思絕慶未看 徒使生迷惑（淵明）

これは、陶淵明、愔之、循之の三者が、雁をテーマにして一人四句二韻ずつ（隔句に押韻）作ったものである。そこには、目に見える宴席の座と、目には見えないものの詩文により築かれている「座」が、ともに存在している。無論、和韻詩が一編ごとに各自の意味上の完結性を有するのに対して、聯句がそうした独立性に欠けることは言うまでもない。しかし、形式だけをみると、右の十二句の偶数句は同じ韻部の脚韻を用いているため、実際には、前述した「依韻」詩と同じ形式に見えるのである。

また、分韻詩は、集団的な座において、各々の詩人があらかじめ一つ乃至は複数の韻字を与えられ、それを用いて詩を作る形式である。清の俞樾は、『茶香室叢鈔』四（卷十三）「古人分韻法」の条のなかで、南朝（宋・齊・梁・陳）の詩人の分韻詩を以下のように分類している。

又按、即陳後主集考之、頗得古人分韻之法、如『立春日泛舟元圃各

賦一字 六韻成篇』則所賦之韻止一字外、五韻任其自用者也。如云『獻歲立春日泛舟元圃各賦六韻』則所賦者有六字、各人以所賦韻作六韻詩一首也。如云『上巳元圃宣猷堂禊飲 同共八韻』則所賦者八字在坐同之、人人以此八字作八韻詩一首也。各賦一字最寬、如今詩限官韻耳、各賦六韻較嚴、六韻外不得更溢一字、然猶一人有一人之韻。同共八韻、則人人用此八字、竟如今之次韻詩矣。

また按ずるに、陳後主集に即してこれを考ふれば、頗ぶる古人の分韻の法を得たり。『立春日に舟を元圃に泛べ、各々一字を賦し、六韻にて篇を成す』の如く、則ち賦する所の韻一字に止まり、外の五韻その自ら用ゐるものに任ずるなり。『獻歲。立春の日に舟を元圃に泛べ、各々六韻を賦す』に云ふが如く、則ち、賦する所の者六字ありて、各人賦する所の韻を以て六韻の詩一首を作すなり。『上巳に元圃の宣猷堂にて禊飲す。同じく八韻を共にす』に云ふが如く、則ち賦する所の者八字坐に在りてこれに同じ、人人この八字を以て八韻の詩一首を作すなり。『各々一字を賦す』は最も寛にして、今の詩、官韻を限るが如きのみ。『各々六韻を賦す』は較や嚴しく、六韻の外、更に一字も溢るることを得ず。然れども猶一人に一人の韻あり。『同

じく八韻を共にす」は、則ち人人此の八字を用ひ、竟に今の次韻詩の¹¹とし。

この記述から、南北朝の詩人の、脚韻の運用に対する細やかな配慮がうかがい知れる。まず、韻字が一つだけ与えられた場合、参加者はその韻と同じ部立の韻字を使って詩作する。複数の韻字が与えられた場合には、参加者は、それぞれ決められた韻字で押韻する。そして、三つ目に挙げられている「同共八韻」の場合には、参加者は、同じ韻字がいくつか与えられ、なおかつ同じ順序で韻字を使わなければならかったのである。殊に、三つ目の「同共八韻」という詩作をすべて照らしあわせてみると、傍線部に「則ち人人此の八字を用ひ、竟に今の次韻詩のごとし」とあるように、結果として次韻詩とよく似た形式になる。

このように、南北朝時代の詩人が脚韻の運用に大きな関心を示し、様々な試みをしていたことを示す記述は、他にも確認できる。宋の程大昌の『考古編』（巻七）「古詩分韻」の条を見てみよう。

偶閱陳後主集、見其序『宣猷堂宴集』五言曰「披鉤賦詩、逐韻多少、

次第而用」座有江綰、陸瑜、孔范等三人。後主韻得「迕格、白、易、夕、擲、斥、拆、喈」字、其時用韻次前後正同、曾不攙乱一字、乃知其說是先書為鉤、坐客均探、各据所得、循序賦之、正後主次韻格也。

たまたま陳後主集を閲し、其の序『宣猷堂宴集』五言に曰く「披鉤賦詩、韻の多少を逐ひて、次第に用ひる」を見る。座に江綰・陸瑜・孔范等三人あり。後主の韻、「迕格、白、易、夕、擲、斥、拆、喈」の字を得たり。其の時の用韻前後に次ぎ、まさに同じくして、曾て一字も攙乱せず。乃ち其の説これ先ず書くに鉤を為し、坐客均しく探り、各々得たる所に据ゑ、序に循ひてこれを賦するを知る、まさしく後主の次韻の格なり。

この記述では、陳後主が、あらかじめ与えられた韻字を決められた順序通りに用いて詩を創作したと記されている。それは、前述した三種類の分韻詩のうち「同共八韻」に該当するものだと考えられる。

さらに、南北朝時代には、和韻詩の中で「依韻詩」が試みられていたのである。清・吳喬の『困炉詩話』（巻一）¹¹における以下の記述を見

てみよう。

蕭衍・王筠和太子懺悔詩、始是步韻。步韻、乃趨承貴要之体也。

蕭衍・王筠、太子懺悔詩に和し、始めて是れ步韻。步韻、乃ち貴要を趨承す体なり。

この記述では、南北朝の梁の時代に次韻詩（步韻詩）が始めて作られたと記されている。しかし、現存している太子蕭綱の懺悔詩、蕭衍（梁武帝。四六四―五四九年。在位期間五〇二―五四九年）と王筠の和詩を見ると、

和太子懺悔 梁武帝

玉泉漏向尽。金門光未成 云云¹³

和太子懺悔 王筠

習惡帰礼懺 有過称能改 聖徳及群生 唱説信兼採
翹心蕩十惡 邈誠銷五罪 三縛解智門 六塵清法海
超然故無著 逍遙新有待¹⁴

蒙預懺直疏 蕭綱
皇情矜幻俗 聖徳愍重昏 制書開撰受 絲綸広慧門
時英満君国 法侶盛天園 俱銷五道縛 共蕩四生怨
三修祛愛馬 六念静心猿 庭深林彩豔 地寂鳥声喧
上風吹法鼓 垂鈴鳴画軒 新梅含未発 落桂聚還翻
早煙藏石蹬 寒潮浸水門 一朝蒙善誘 方願遣籠樊¹²

太子の懺悔詩が「昏・門・園…」といった「元」韻を用いているのに対して、梁武帝蕭衍の「和太子懺悔」では「成…」などの「庚」韻が、王筠の「和太子懺悔」詩では「改・採・罪・海・待」の「賄」韻がそれぞれ用いられており、これでは次韻詩どころか、和韻詩とも言えない。調べた所によると、後に蕭衍と王筠の間に「和太子懺悔詩」をめぐる更なる唱和が行われ、その際に和韻詩が作られたことがわかった。このことについては、宋の葉夢得が『玉澗雜書』において以下のように詳記している。

唐以前人和詩、初無用同韻者、直是前後相繼作耳。頃看類文、見梁武帝同王筠「和太子懺悔詩」云、仍取筠韻、蓋同用「改」字十韻也。詩人以來、始見有此体。筠後又取所余未用者十韻別為一篇。所謂「聖智比三明。帝德光四海」者、比次頗新巧¹⁵。

唐以前の人詩に和するに、初め同じ韻を用ゐる者無く、ただこれ前後に相繼ぎて作るのみ。しばらく類文を看、梁武帝、王筠「和太子懺悔詩」に同ずるを見るに、「仍取筠韻」と云ふ。蓋し同じく「改」字十韻を用ひるなり。詩人以來、始めて此の体あるを見たり。筠後にまた余りて未だ用ゐざる所の者十韻を取り、別に一篇を為す。所謂「聖智三明に比し、帝德四海を光す」は、比べて次ぐるに頗ぶる新巧なり。

蕭衍は、王筠の前篇の「和太子懺悔詩」と同じ「賄」韻の「改」などを用いて和韻詩を作った。こうした唱和に応じて、さらに王筠は「賄」韻の韻字を用いて和詩を作ったのである。その作は以下の通りである。

奉和皇太子懺悔詩 応詔 王筠

| | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 一聖智比明 | 帝德光四海 | 荷負誠攸属 | 度脱冥斯在 |
| 懺説済蒙愚 | 推心屏欺殆 | 名僧引定慧 | 朝纓列元凱 |
| 還迷依善導 | 反心由真宰 | 和鈴混吹音 | 勝幡榮雪彩 |
| 早蒲欲抽葉 | 新篁向舒惹 | 翹歎諒懇到 | 帰誠信兼倍 |
| 睿艷似煙霞 | 欄干若珠琲 | 善誘雖欲繼 | 含毫愧文彩 |

王筠はこの詩に「海…」などの「賄韻」を用いており、前篇の「和太子懺悔詩」と同じ韻を踏んでいる。蕭衍の作は現存していないが、恐らく葉夢得の記述のとおり、「和太子懺悔詩」と同じく「賄韻」を使用しているのであろう¹⁶。

こうしてみると、南北朝時代の詩壇では座が共有され、脚韻の運用における工夫や挑戦的な試みが多く成され、その中では聯句や分韻詩、和韻詩が、社交のためのツールとしての役割を発揮していたことがわかる。なお、同時代的には「次韻」詩と類似する分韻詩の形式も出現し、さらには和韻詩の一種で、「次韻詩」よりも規則上の拘束が少ない「依韻」詩の存在も確認できる。こうした「座」の意識や脚韻の運用の重視、その他のさまざまな試みが、唐代に次韻詩が盛んになっていくことの淵源で

あると考えてよいだろう。

次に、初唐の最も早い時期の次韻詩についてみてみよう。明の謝榛は、『四溟詩話』巻二において以下のように記している。

許敬宗擬江令九日三首、皆次韻、初唐殆不多見¹⁷。

許敬宗、江令の「九日」に擬する三首、皆次韻。初唐に殆ど多く見えず。

この記述から、許敬宗（五九二―六七二年）が、南朝の江総（五一九―五九四年）の「九日」という文字が題に含まれている詩を手本にして擬詩を三首作ったことがわかる。以下が江総の原詩と、現存している許敬宗の擬詩である。

於長安歸還揚州九月九日行薇山亭賦韻 江総

心逐南云遊 形隨北雁來 故鄉籬下菊 今日幾花開

擬江令 許敬宗

本逐征蓬去 還隨落葉來 菊花応未滿 許待詩人開

又擬

遊人倦蓬軒 鄉思逐鴻來 偏想臨潭菊 芳蕊對誰開

許敬宗の二首は、江総の重陽節の詩と同じテーマで詠まれ、同じ韻字「来・開」が同じ順序で用いられている。実際に、六朝あるいは初唐の他の擬詩を見ると、韻字に関する定めがないことが明らかである。

許敬宗は、自ら韻字の制約を創作に取り入れることを通じて、江総という前代の偉大な詩人への敬意と憧れを表わそうとしたのであろう。和田英信氏の言葉を借りて言えば、ここでは「時空を超えた「座」」¹⁸が江総と許敬宗を繋いでいるのだと言えよう。

周知のように、初唐の漢詩文学は、六朝時代の流れを受け継いで展開した。許敬宗が次韻詩を用いて擬詩を詠じたのは、南北朝・六朝時代より「韻」や「座」を重ねる伝統が初唐に継承されたためではないかと考えられる。

初唐の詩壇の「押韻」と「座」への関心については、当時分韻詩の詩宴が多く開かれていることから了解されよう。近年発表された張明華

氏の「唐代における分韻詩の宴集の変化の特徴」という論考は、初唐の分韻詩について詳しく考察している。

初唐分韻詩的主要場所は朝廷或是近臣所設の宴席。以初唐的63次分韻詩題目考察，其中標明“侍宴”的有13次，如許敬宗《五言七夕侍宴得歸衣飛機一首應詔》、虞世南《侍宴應詔賦韻得前字》、許敬宗《五言侍宴莎柵宮應制得情一首》、喬知之《侍宴應制得分字》、宋之問《上陽宮侍宴應制得林字》（一題上有九月晦日四字）等，都是這樣創作的結果；標明“奉敕”、“應制”的有3次，魏元忠《修書院學士奉敕宴梁王宅 賦得門字》、張說《修書院學士奉敕宴梁王宅 賦得樹字》、宋之問《奉敕從太平公主遊九龍潭尋安平王宴別序》、武三思《奉和宴小山池賦得谿字》就是兩次創作留下的作品。如果就作品而言，則共有四十一首，占初唐分韻詩總數（81首）的一半。

詠文：初唐の分韻詩が行われた場合は、主として朝廷か、あるいは近臣が設けた宴席であった。初唐における分韻詩の題目を考察した結果、六十三回の分韻詩の詩宴の中に「侍宴」の場合が十三回あるこ

とが明らかとなった。例えば、許敬宗「七夕侍宴 得歸衣飛機 一首 應詔」、虞世南「侍宴莎柵宮應制 得情一首」、虞世南「侍宴應詔 賦韻得前字」、喬知之「侍宴應制 得分字」、宋之問「上陽宮侍宴應制 得林字」などはそうした「侍宴」の場で生まれた詩作である。また、「奉勅」「應制」の場合は三回あり、魏元中「修書院學士奉勅宴梁王宅 賦得門字」、張說「修書院學士奉勅宴梁王宅 賦得樹字」、宋之問「奉勅從太平公主遊九龍潭尋安平王宴別序」、武三思「奉和宴小山池 賦得谿字」などがそれにあたる。作品数から言えば、それらの詩作はのべ四十一首あり、初唐分韻詩の総数（八十一首）の半分を占めている。

初唐においては、分韻詩の詩宴が多数行われていたことが確認されている。そして、その分韻詩詩宴の多くは、皇帝或いはその側近が主催したものであった。その場には、皇帝を中心とした国の最高級の統治集団が形成されており、「座」の意識が濃厚にうかがえる。分韻詩の詩宴に参加した官人のリストには、許敬宗の名も見られる。このような初唐の詩壇で活躍した詩人である彼が、詩壇の色に染まっても何ら不自然では

ない。

要するに、脚韻の運用や「座」の意識を重視しようとする傾向は、南北朝・六朝の詩壇から初唐へと継承されたのであり、初唐詩人である許敬宗の次韻詩もまた、脚韻の運用や「座」の意識を重んじる当時の詩壇の傾向と緊密に関わっていると認識してよからう。

二、日本における次韻詩の発生の背景

前述したように、『懷風藻』に見られる次韻詩は八世紀頃の作である。ただし、その成立を、南北朝時代と初唐の次韻詩の影響を直接受けたものとするのは、早計であろう。本節では、懷風藻時代の詩人が、『洛陽伽藍記』や許敬宗詩集における次韻詩を直接的に受容した後に次韻詩の創作を始めたという考えではなく、むしろ「座」の意識と脚韻の運用という視座を抛り所として、当時、次韻詩の創作を可能にするような文学的土台が築かれていたからこそ次韻詩が発生したのだという認識を強調したい。

八世紀の日本詩人は南北朝時代の次韻詩から直接影響を受けたのでは

ないとする私見について、ここでは日本における漢籍の受容の観点から考えてみたい。

まず、中国最古の次韻詩を収録した『洛陽伽藍記』（五世紀―六世紀）および次韻詩の様式で擬古詩を詠んだ初唐の許敬宗の詩については、日本に伝来した年代や経緯が明らかになっていない。藤原佐世の『日本国見在書目録』のなかに、『洛陽伽藍記』を収録した『広弘明集』三十卷（六四四年）および『許敬宗集』が記録されているものの、『日本国見在書目録』の成立が九世紀後期であるため、同書によって八世紀の日本における漢籍の流通状況を確認することはできない。また、仮に『洛陽伽藍記』および許敬宗の詩作が、七世紀の遣隋使や八世紀の遣唐使、あるいは朝鮮半島を経由して八世紀の日本に招来されたのだとしても、当時の詩人がこれらの漢籍を即時に入手し読むことは可能だったのか、また、膨大な文字の世界の中にある次韻詩の存在に気づくことができたのかについては、大いに疑問となるところだ。実際、前述した南北朝と初唐の次韻詩に関する中国詩人の認識や初期の次韻詩の実態を鑑みるに、八世紀初期の詩人が『洛陽伽藍記』や許敬宗詩集のなかの次韻詩の存在に気づくのは、極めて困難であったと考えられる。

それでは、懷風藻時代において、次韻詩の発生の文学的基盤となっていたものは何であったのか。

『懷風藻』の漢詩には、公的な「座」の文学としての性格が顕著であり、また脚韻の運用に対する配慮が明らかに見て取れる。公的な「座」の文学であることに関しては、先行研究により、長屋王サロン、藤原氏サロン、「応詔詩」などの視座から考察が行われており、十分に注目されているため、ここでは重ねて議論しないこととする¹⁾。本節では、懷風藻時代の詩人たちの脚韻の運用の重視と工夫を、聯句、分韻詩、和韻詩という三種類の様式に基づいて考えてみたい。

まず、聯句の製作についてであるが、『懷風藻』には以下の聯句の作品が収録されている。

七言。述志。一首。 大津皇子

天紙風筆画雲鶴 山機霜杼織葉錦 (『懷風藻』6)

後人聯句。

朱雀含書時不至 潜龍勿用未安寝

ここには「後人聯句」と書かれているが、この「後人」について、小島憲之氏は「大津皇子の頃の当時の人某人とみるべきか」と注を付けて、辰巳正明氏は「大津皇子事件で流れた知識人の誰か」²⁾と述べている。『懷風藻』のすべての写本にこの「後人聯句」が載せられていることや『懷風藻』の成立年代を考えると、聯句という創作形式は遅くとも八世紀半ば頃には存在していたと認めるべきであろう。

また、分韻詩について、俞樾の分類した分韻詩の形式と照らしあわせてみると、懷風藻時代においては、中国南北朝時代と同様、三種類の分韻詩の創作が行われていたことがわかる。

第一に、一つの韻字がそれぞれの参加者に当てられる場合の分韻詩を見てみよう。『懷風藻』に「賦得：字」と明記してあるものは八首あり、以下に示す通りである。

60 五言。秋日於長王宅宴新羅客。 賦得風字。

從五位下大学助背奈王行文

63 秋日於長王宅宴新羅客。 賦得稀字。 正六位上刀利宣令。

65 秋日於長王宅宴新羅客。 并序。 賦得前字。

大学助教従五位下下毛野朝臣虫麻呂

7 1 秋日於長王宅宴新羅客。賦得流字。

従三位中納言兼催造長官安倍朝臣広庭

7 7 秋日於長王宅宴新羅客。賦得時字。

正六位上但馬守百濟公和麻呂

7 9 秋日於長王宅宴新羅客。賦得秋字。正五位下図書頭吉田連宜

8 6 秋日於長王宅宴新羅客。賦得難字。

贈正一位左大臣藤原朝臣総前

6 8 五言。於宝宅宴新羅客。一首。賦得煙字。

左大臣正二位長屋王

8 8 五言。暮春曲宴南池。一首。并序。

正三位式部卿藤原朝臣宇合

以上の中でも、「秋日於長王宅宴新羅客 賦得…字」という題を持つ七首の詩は、恐らく同じ座で作られたものである。また、藤原宇合の「暮春曲宴南池」の詩序では「蓋各言志。探字成篇」と詠まれており、宇合邸で開いた私宴では「探韻」、すなわち「分韻」詩の創作が行われていたこ

とを想像できる。

第二に、あらかじめいくつかの韻字が与えられ、それらを用いて詠まれた分韻詩である。

五言。秋宴。得声清驚情四字。一首。正五位上紀朝臣古麻呂

明離照旻天 重震啓秋聲 氣爽煙霧發 時泰風雲清

玄燕翔已返 寒蟬嘯且驚 忽逢文雅席 還愧七步情 『懷風藻』23

五言。秋宴。一首。正五位下肥後守道公首名

望苑商氣艷 鳳池秋水清 晚燕吟風還 新雁拂露驚

昔聞濠梁論 今辨遊魚情 芳筵此僚友 追節結雅声 『懷風藻』49

道公首名の一首は、紀古麻呂の詩作と共通の詩題を冠し、用いられた脚韻も同じであることがわかる。ただ、脚韻の次序では、「声」を最後の脚韻として「清・驚・情・声」の順で押韻されている。

第三に、あらかじめいくつかの脚韻が与えられ、同時にそれらを使う順序が決められている場合である。参加者全員がそれらの決まりに従っ

て韻を踏むという。パターンの分韻詩である。『懷風藻』には以下の四首が確認できる。

五言。上巳禊飲。応詔。 從五位下大学助背奈王行文

皇慈被萬国 帝道沾群生 竹葉禊庭滿 桃花曲浦輕
雲浮天裏麗 樹茂苑中榮 自顧試庸短 何能繼叡情 『懷風藻』62

五言。侍讌。 外從五位下大学頭箭集宿禰蟲麻呂

聖豫開芳序 皇恩施品生 流霞酒処泛 薰吹曲中輕
紫殿連珠絡 丹墀萸草榮 即此乘槎客 俱欣天上情 『懷風藻』81

五言。賀五八年。 正六位上刀利宣令

縱賞青春日 相期白髮年 清生百万聖 岳土半千賢
卜宴當時宅 披雲広樂天 茲時尽清素 何用子雲玄 『懷風藻』64

五言。賀五八年宴。 從五位下上総守伊与連古麻呂

万秋長貴戚 五八表遐年 真率無前後 鳴求一愚賢

令節調黃地 寒風變碧天 已応蠡斯徵 何須顧太玄 『懷風藻』107

「上巳禊飲応詔」と「応詔」ではいずれも「生・輕・榮・情」を用いており、「賀五八年」と「賀五八年宴」でもともに「年、賢、天、玄」を用いて韻を踏んでいる。詩題を見なければ、これらが次韻詩であると誤解してしまうであろう。

まず、曲水宴の詩が和韻詩であることについて説明したい。ここで、改めて俞樾の分類のうち二種類目の分韻詩についての記述、すなわち『上巳元圃宣猷堂禊飲 同共八韻』則所賦者八字在坐同之、人人以此八字作八韻詩一首也」を思い出そう。この記述で取り上げられている詩は、以下の通りである。

上巳玄圃宣猷堂禊飲 同共八韻 陳後主

綺殿三春晚 玉燭四時平 藤交近浦暗 花照遠林明
百戲堦庭滿 八音絃調清 鶯喧雜管韻 鐘響帶風生
山高雲氣積 水急溜杯輕 簪纓今盛此 俊乂本多名
帶才尽壯思 文采発彫英 樂是西園日 歡茲南館情 『陳後主集』21

詩題からもわかるように、宣猷堂で開かれた三月三日の曲水宴では、陳後主（五五三―六〇四年。在位五八三―五八九年）が当座の詩人たちとともに、同じ八韻を共有し詩を詠じた。この記述は、「上巳禊飲。應詔」と「侍讌」もまた三月三日の曲水宴において詠まれたものであることを思わせる。また、背奈行文の詩題には、陳後主と同じく詩語である「上巳」と「禊飲」が用いられている。これらの詩語は、六朝の陳の曲水宴を詠んだ詩ではよく使われているものであるが、『懷風藻』における曲水宴、あるいは暮春を詠んだその他の詩作では一度も用いられていない。さらに、脚韻上での類似性にも注目したい。背奈行文、箭集宿禰蟲麻呂の詩において「庚韻」の「生・輕・榮・情」が用いられているのに対し、陳後主の詩においても「庚韻」の脚韻が使用され、第四聯、第五聯、尾聯において「生・輕・情」で押韻しているのである。

このように考えると、背奈行文、箭集蟲麻呂が曲水宴で詠じた詩は、南北朝の最後の皇帝陳後主の詩と何らかの関連を持っているのではないかと考えられる。

一方、四十歳の賀を詠じた二首はどうであろう。詩題をみると、「和」

などのように唱和を意味する文字がない。「賀五八年」、「賀五八年宴」では「宴」の文字だけが異なっているが、恐らくは同じテーマと脚韻が与えられ、同時に詠じられた詩作であろう。

これらのことから、兪樾の分類のうち三種類目の分韻詩の創作は、八世紀初期に行われていたことが了解されよう²²。

最後に、懷風藻時代の和韻詩の創作についてみてみたい。当時、和韻詩の中で「依韻」詩の創作がすでに行われていたことが確認できる。以下の二首を見てみよう。

五言。遊吉野。 贈正一位太政大臣藤原朝臣史

夏身夏色古 秋津秋氣新 昔者聞汾后 今之見吉賓
靈仙駕鶴去 星客乘查遼 渚性捫流水 素心開靜仁（『懷風藻』32）

五言。和藤原太政遊吉野川之作。仍用前韻。

從五位下陰陽頭兼皇后宮亮大津連首

地是幽居宅 山惟帝者仁 潺湲浸石浪 雜沓応琴鱗

靈懷対林野 陶性在風煙 欲知歛宴曲 滿酌自忘塵（『懷風藻』83）

右の二首は、題目の「遊吉野」と「和藤原太政遊吉野川之作」からわかるように、前者の和詩が藤原史の「遊吉野」、後者の和詩が天津連首の詩である。藤原史の詩には、「新・賓・逡・仁」という「真韻」の韻字が用いられているのに対し、天津連首は、同じ韻部の「親・鱗・陳・津」で韻を踏んでいる。詩題のなかで「仍用前韻」と自注しているのは、脚韻の運用を通じて、相手の詩に和すという創作方法を意識的に用いていることを意味している。こうした依韻詩の創作において、脚韻上での拘束をさらに厳しくし難度を上げること「用韻」へ、さらに「次韻」へと展開してゆくことは、不可能ではないと考えられる。

ここで、前述した中国の次韻詩の発生の背景とあわせて考えてみると、懷風藻時代の詩壇では、南北朝時代と同様に、聯句、分韻詩、和韻詩の形式の創作が行われており、「座」の意識や脚韻の運用の重視という点で、南北朝時代と同じ傾向を示していることは明白である。つまり、次韻詩が発生するための文学的要素が揃っていたと言えるのである。前述した日本最古の次韻詩には、確かに文献的な問題はあるものの、次韻詩の発生のメカニズムから考えるに、それらが懷風藻時代において次韻詩として存在した可能性は十分に考えられるのではなかろうか。

おわりに

以上、日本における次韻詩の発生の問題を中心に、それを可能にした懷風藻時代における文学的背景について考察を試みた。そこから、直接の影響関係にあるわけではないが、中国の南北朝時代と『懷風藻』時代における次韻詩の誕生は、「座」の意識や、脚韻の運用の重視という共通の基盤に立脚していることが判明した。こうした奈良時代の日本詩壇の風潮は、次の時代の日本詩壇に継承されており、前述の勅撰三集に見られる次韻詩の詩作もそうした風潮とは無関係だとは決していえないだろう。漢詩文学は、平安前期には全盛期を迎えていたが、それは前時代の漢詩人が開拓した文学の基盤に深く関わっているのである。日本漢詩の形成と展開の過程において中国文学への依存が認められるべきである一方、あらゆる日本漢詩は中国の直接的影響の下で発生したとする見解は、妥当性に欠けていると言わざるを得ない。次韻詩の課題への注目こそが、日本漢詩の展開の独自性を見出すことに繋がるものとなるのである。

〔注〕

1 月野文子『懷風藻』の押韻―韻の偏りの意味するもの―『上代文学と漢文学』和漢比較文学叢書2、一九九三年。

2 『文華秀麗集』における次韻詩とその原詩は以下のようである。1)「在辺亭賦得山花 戲寄兩箇領客使并滋三 一首」(王孝廉39)と「春夜宿鴻臚 簡渤海入朝王大使 一首」(滋野貞主37)、2)組「奉和侍中翁主挽歌詞 二首」(菅原清公90)と「奉和侍中翁主挽歌詞 二首」(巨勢識人92)、3)組「河陽十詠四首 以三字為題、以終字為韻 江上船」(嵯峨天皇97)と「奉和河陽十詠四首 河上船」(仲雄王103)、4)組「河陽十詠四首 以三字為題。以終字為韻 山寺鐘」(嵯峨天皇99)と「奉和河陽十詠四首 山寺鐘」(仲雄王105)、5)組「故閑聴鷄 一首」(嵯峨天皇117)と「奉和故閑聴鷄 一首」(桑原腹赤118)。『経国集』における次韻 詩は以下のようである。6)組「五言 落梅花 一首」(平城天皇 在東宮82)と「五言 落梅花 一首」(84和氣広世)。

3 「五言 奉和藤太政佳野之作 一首 仍用前韻四字」物外囂塵遠 山中幽隱親 笛浦棲丹鳳 琴淵躍錦鱗 月後楓声落 風前松響陳 開仁対山路 獵智賞河津(正五位下中宮少輔葛井連広成。『懷風藻』119)。「懷風藻」の詩文の引用は、日本古典文学大系(岩波書店)に従う。

4 林古溪『懷風藻新注』(明治書院、一九五八年)二四二頁。同じ頁に「細

註は何人ともわからぬが、或は今本の懷風藻の最初に写した惟宗孝言か。「四愁詩に倣ふ」とでもあれば、その一首残存、その三首紛失と考へられる」とある。

5 葛井連広成の「奉和藤太政佳野之作。一首。仍用前韻四字」が、當時すでに世を去った藤原不比等(死後の養老四年十月に太政大臣少正一位が贈られた)への和韻詩であるため、この詩作は、養老四(七二〇)年以降に作られたものだとは推定できる。

6 程大昌『考古編』(『四庫全書全文版』迪志文化出版)巻七における「古詩分韻」の条。

7 『洛陽伽藍記』の本文では題と作者が記されていない。

8 『四庫全書総目提要』(巻一八六)における『松陵集』に関する記述にあるように、「依韻唱和、始於北魏王肅夫婦。至唐代、盛於元白、而極於皮陸」という肯定的な見方をしているのも見逃してはいけない。『松陵集』は、晩唐の皮日休と陸龜蒙と間の唱和詩、その中では多くの次韻詩を集めた詩集であり、『元白唱和集』・『劉白唱和集』と共に、唱和集の代表的なものである。

9 『漢詩の事典』の「連句 柏梁体」の条、「和田英信「聯句から次韻詩へ―中国における『座』の文学」、橘英範「白居易と劉禹錫の聯句」(『アジア遊学』第九十五号、二〇〇七年)などを参照。

10 和田英信「聯句から次韻詩へ―中国における『座』の文学」(『アジア

『遊学』第九十五号、二〇〇七年）141頁に、「聯句は日本の連歌と同じように、「座」の文学であつた。そこでは一座を共にする人々の競争意識が交錯し、即興性や機知的な発想、分析的・理知的な言語操作が場を支配するであらう。：しかも中国の文学はもとと他社とのコミュニケーションの道具としての性格・機能を濃厚に有する。一座を共にしての聯句はそうしたコミュニケーションにうってつけのものであつたはずだ」とある。

11 吳喬『圉垺詩話』（藝文印書館、一九六七年）

12 詩文の引用は、四部叢刊電子版『広弘明集』に従う。

13 前注に同じ。

14 王筠の詩文の引用は『王詹事集』（続修四庫全書に収録）に従う。

15 葉夢得『玉澗雜書』（朱易安等主編『全宋筆記』大象出版社、二〇〇六年）

16 趙翼（一七二七—一八二二年）の『陔余叢考』（中華書局、二〇〇六年三月）卷二三の「和韻」の条にも、「葉石林『玉澗雜書』謂類文有梁武帝同王筠「和太子懺悔詩」云仍取筠韻。則六朝已有此体、以後罕有為之者、至元白始立為格耳」とある。

17 謝榛『四溟詩話』（人民文学出版社、一九六一年）

18 前掲9「聯句から次韻詩へ——中国における『座』の文学」144頁。

19 辰巳正明「懷風藻の詩学（二）——応詔の詩学」（『懷風藻研究』第六号、

二〇〇〇年三月）32頁に、「現存する懷風藻一一六首の中に「応詔」と詔こられた漢詩が八十首見られる。また、これに順ずる「侍宴（讌）」詩は十首あり、行幸従駕詩なども公的な要素が強く、これらを含めれば、懷風藻の詠詩の場が多くは公讌にあつたことを教えている」とある。福田後雄「懷風藻の応詔詩」（大東文化大学日本文学会編『日本文学研究』村上・森・永山三教授退職記念増大号、一九八三年一月）

20 辰巳正明『懷風藻全釈』（笠間書院、二〇一二年）

21 張溥輯『漢魏六朝百三名家集』第八五冊『陳後主集』。

22 背奈行文、箭集蟲麻呂は、養老五（七二一）年正月にそれぞれ明經第二博士、明法博士に任ぜられ、背奈行文は神龜四（七二七）年に、箭集宿禰蟲麻呂は天平三（七三二）年に従五位下についた。当時、侍宴が許されるのは五位および五位以上の位にある者のみであつたため、彼らの詩作は七三〇年代頃の作品ではないかと考えられる。また、「賀五八年」、「賀五八年宴」は、小島憲之氏の説によると、長屋王の四十歳を寿ぐ宴会での作である。長屋王の生存年については諸説あるが、この作品の制作年代は恐らく靈龜元年（七一五）年あるいは養老七（七二三）年であるとされている。

第二節 平安前期における次韻詩の展開

はじめに

第二章第一節では、次韻詩の発生のメカニズムに着目し、懷風藻時代における日本の次韻詩の発生の可能性について考察した。日本で最も早期の次韻詩であると考えられる二首、すなわち釈道融と関係する「我所思今在楽土」(『懷風藻』110番外一)と、葛井連広成の「奉和藤太政佳野之作。一首。仍用前韻四字」(『懷風藻』119)は、文献的な問題が残されているものの、それらを誕生させた文学的基盤が当時の日本詩壇にすでにあったことは実証により明らかであることから、八世紀初期から懷風藻の成立の頃(天平勝宝三(七五一)年)にかけて次韻詩が発生したという結論に至った。だが、ここで、八世紀前期に萌芽した次韻詩は、次の時代、すなわち平安前期に至って如何に開花したのかという疑問が浮かび上がる。本研究の調査によると、勅撰三集における次韻詩の形式をとる詩作が六組あり、そこに詩人の「韻を次ぐ」ことへの意識が明白に見えてくる。また九世紀後半に至り、菅原道真や島田忠臣の詩

集において次韻詩が急速に増加した。それらと中国文学との関連を考えるにあたり、白居易の九世紀後半の詩人に対する巨大な影響は容易に推測できる。しかし、九世紀始めの弘仁期(八一〇―八二四年)に制作された次韻詩に関しては、中国で八一〇年以前に制作された次韻詩に直接の影響を受けたのかは疑問である。ここでは、中唐大暦までの中国に次韻詩が極めて少ないことや、次韻詩がその唱和した原詩と別々の詩集に収録されていること、詩集の日本への流伝などをも同時に考慮すべきであろう。

本節では、平安前期における次韻詩の展開、またそれ以前および同時期の中国における次韻詩の展開をそれぞれ把握した上で、平安前期における次韻詩の歴史的展開の様相を明らかにし、特に弘仁期における次韻詩の成立を対象としてとりあげる。こうした次韻詩をめぐる考察は、平安前期の日本漢詩の展開、また当時の日本詩壇の様相の特質を究明することと密接に繋がっていると考えられる。

一、勅撰三集における次韻詩

平安初期の詩作を多く収集した勅撰三集『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』を中心に調査を行った結果、次韻詩と原詩が共に現存しているものを六組確認できた。『文華秀麗集』に五組、『経国集』に一組見つかった。まずは、それらが意識的に制作されたものか否かを考えてみたい。

六首の中では、『経国集』巻一一（詩十）「雑詠一」に収められている以下の二首、つまり延暦期に、皇太子であった平城天皇と和氣広世との間に行われた次韻唱和が最古のものである。

1)

五言。落梅花。一首。 平城天皇 在東宮

二月云過半 梅花始正飛 飄飄投暮牖 散乱拂晨扉

萼尽陰初薄 英疏馥稍微 再陽猶未曉 誰為恹芳菲 『経国集』82)

同前 和氣広世

凌寒朱早發 競暖素初飛 送吹香投牖 迎光影拂扉

蕊疎寒漸見 葉細陰猶微 願遇重陽日 承暉擅芳菲 『経国集』84)

この二首の押韻を見てみよう。和氣広世が東宮平城の詩作で用いられた韻字「飛・扉・微・菲」を同じ序列で用いており、次韻詩の形式を使用

していることは明らかである。和氣広世の詩の題目に「同前」と記されているのは、詩番八三の小野岑守（宝龜九（七七八）年—天長七（八三〇）年）「奉和落梅花」と同じ題であることを表わしている¹⁾。ただ、同じ場で同じ題で東宮平城へ唱和した小野岑守は、押韻上では「東韻」を用いており、東宮平城の詩作の「微」韻とは異なっている。換言すれば、その場では唱和への押韻制限が指定されていなかったと考えられるのである。それにも拘らず、和氣広世は、押韻制限の厳しい次韻詩の形式、すなわち東宮平城の「落梅花」韻字をそのまま、その順序どおりに用いて唱和したのである。このように、同じ場における小野と和氣との唱和詩の形式の違いを考えると、和氣広世が次韻詩で詠じたのは、意識的な創作行為であったと考えられる。

では、この二首の創作時期はいつであろうか。平城天皇の詩作の題から、平城天皇の東宮時代すなわち延暦四（七八五）年から延暦二十五（八〇六）年にかけての間に、東宮平城の御殿での詩会で次韻詩を交わしたことがわかる。ここで、この詩宴で唱和詩を奉ったもう一人の詩人である小野岑守と和氣広世との経歴を同時に考慮すると、東宮平城の詩会の開催年代をより限定した時代範囲に絞ることができよう。

延暦四年の時点では、小野岑守は七歳である。幼少時代に漢詩が作れたという記録も見つからないため、小野岑守が詩作を詠じたのは延暦四年、或いはその数年後であるとは到底考えられない。『本朝皇胤紹運録』（洞院満季編。国立国会図書館デジタル化資料）には「父永見、征夷副將軍。岑守、延暦末、為權少外記」とあり、小野岑守が官吏登用の国家試験に合格し、初めて官職に任ぜられたのが延暦年間の末頃であったことがわかる。つまり、小野岑守が一人前の官吏として東宮平城に接することが可能になったのは、延暦年間の末頃であったと認識する方がより妥当である。この「奉和落梅花」は、延暦年間の末頃の詩作であろう。また、広世のこの詩について小島憲之氏は、従五位以前の頃の作ではないかと述べている。『日本後紀』卷八延暦十八（七九九）年二月乙未廿一の条には「長子広世。起家補文章生。延暦四年坐事被禁錮。特降恩詔。除少判事。俄授従五位下」とあり、和氣広世が延暦四年にある事件に連座したとされて禁錮に処せられるが、のちに特赦が下され、従五位下・少判事に叙任されたことが了解される。また、『日本後紀』卷八延暦一八（七九九）年四月癸未九の条に「起従五位下朝臣広世復本官」とあり、確かに小島氏の指摘の通り「従五位以前」は延暦一八年以前である。

こうして平城天皇の東宮時代の年代範囲、小野岑守の経歴、和氣広世の経歴を合わせて考えると、前述した次韻唱和は、恐らく延暦一八（七九九）年前、あるいはそれより少し前の延暦後期に詠じられたものであろう。これは後述する『文華秀麗集』に見える次韻詩の制作年代にかなり近く、大きく外れていることはないだろう。ここで、前節で取り上げた「我所思兮在樂土」と葛井連広成の「奉和藤太政佳野之作。一首。仍用前韻四字」を改めて想起したい。その二首は日本で最も早期の次韻詩だと考えられるが、何れも文献的な問題がある。これに対して、和氣広世の次韻詩には、そうした問題点がない。和氣広世と東宮平城との間に行われた次韻唱和は、日本漢詩文学史上では大きな意味を有するものと言っても過言ではない。

では、勅撰三集におけるほかの五組の次韻唱和もまた意識的に行われたものであろうか。これらはすべて『文華秀麗集』に収録されている。

2)

在辺亭賦得山花。戲寄両箇領客使并滋三。一首。王孝廉

芳樹春色色甚明 初開似咲聴無声

主人每日專攀尽 殘片何時贈客情 《文華秀麗集》 39

春夜宿鴻臚、簡渤海入朝王大使。一首。 滋野貞主

枕上宮鐘伝曉漏 雲間賓雁送春声

辞家里許不勝感 況復他郷客子情 《文華秀麗集》 37

3)

河陽十詠。四首。以三字為題。以終字為韻。 江上船 嵯峨天皇

一道長江通千里 漫漫流水漾行船

風帆遠没虛無里 疑是仙查欲上天 《文華秀麗集》 97

奉和河陽十詠。四首。 河上船 仲雄王

晴初駐蹕馳玄覽 一点孤浮江上船

為虛物情不相怨 乘吹遙度浪中天 《文華秀麗集》 103

4)

河陽十詠。四首。以三字為題。以終字為韻。 山寺鐘 嵯峨天皇

晚到江村高枕臥 夢中遙聽半夜鐘

山寺不知何处在 旅館之東第一峯 《文華秀麗集》 99

山寺鐘 仲雄王

古寺館東山翠下 日暮噉咷響疎鐘

天籟相和幽洞谷 餘音過尽白雲峯 《文華秀麗集》 105

5)

奉和侍中翁主挽歌詞。二首。 菅原清公

鳳掖榮華尽 為書卜兆通 向朝傷薤露 欲暮泣楊風

漢浦星光欠 秦樓月影空 定知雲雨兒 長絕粧台中

《文華秀麗集》 90

奉和侍中翁主挽歌詞。二首。 巨勢識人

曉月銘旌出 春山轅馬通 繁筵悲薤露 尽翬送松風

洛雪迴光罷 巫雲行影空 可嗟桃李兒 長掩重泉中

《文華秀麗集》 92

6)

故関聴鷄。一首。 嵯峨天皇

烽火不伝罷関城 唯餘長短曉鷄声

孟嘗没後年代久 誰客今鳴令人驚『文華秀麗集』117

奉和故関聴鶏。一首。 桑原腹赤

霸道寝来是旧城 人鶏独送司晨声

自分陽精応覚曉 如今不為孟嘗驚『文華秀麗集』118

押韻上の特徴を見ると、各組では、後者の詩は前者と同じ韻字、また同じ順序で押韻をしていることが明らかである。『文華秀麗集』の採詩範圍からわかるように、これらの五組はすべて嵯峨天皇の御世弘仁五（八一五）年から九（八一九）年までの間に誕生した詩作である。

まず、最初の一組、すなわち王孝廉と滋野貞主が交わした二首について。前者は、王孝廉が弘仁五年九月に渤海使として来日し、翌年の春に帰国する途中、「賦得」という方法で詩題を得て創作し、滋野貞主等を送った詩作である。後者は、滋野貞主が同年春に「鴻臚客館」に宿泊した際の王孝廉への詩作である³。殊に、それぞれ題目に「戯れに寄す」、「簡す」とあるように、両者は同じ場で詩を読み上げたわけではなく、場所を隔てて詩を送る形で交わしたわけである。二人は創作場所が異なるものの、滋野貞主は次韻、すなわち王孝廉の詩と同じ韻字を同じ順序で押

韻するという形式を使用することによって、異なる空間にいる王孝廉と文学の空間を共有することに成功している。周知の通り、奈良時代以降、漢詩は外交の場で自国の文学乃至文化水準を誇示するための道具でもあった。そのため、外交の場においては、王孝廉も滋野も詩作の出来栄えや品格を強く意識していると想像される。換言すれば、次韻が唱和の一つの様式であるということは、当時の東アジアの外交の場において、共通認識であるべきとされていたのであろう。少なくとも平安初期弘仁年間の詩人である滋野貞主は、次韻詩に対してある程度の認識を有していたと言えよう。

また、次の二組は、嵯峨天皇を中心とした「河陽十詠」以三字為題、以終字為韻の詩群の中の詩作である。仲雄王は、嵯峨天皇の「江上船」「山寺鐘」に対して、すべて次韻詩の形式で唱和している。無論、「以三字為題、以終字為韻」という押韻の制限があることから、各詩人の同じ題の詩作では必ず少なくとも一つの韻字が一致するものと推測できる。しかし、ほかの韻字の使用においては自由に選択が可能である。「河陽十詠」の詩作を見ると、同じ題ならば、詩人たちは同じように題の最後の文字を用いているが、ほかの脚韻にはそれぞれ異なった韻字を使ってい

るのである。現存する仲雄王の「河陽十詠」の詩作で、二首とも次韻詩の形式を使用しているのは、ただの偶然だとは決して言えないだろう。仲雄王は、意識的に嵯峨天皇と同じ韻を同じ次序で使おうとしたのではないか。

続いて、5)組、菅原清公と巨勢識人の「侍中翁主」(典侍小野石子)の死を悼んだ詩作を見てみよう。この二首はともに、弘仁七(八一六)年に侍中翁主が亡くなった時に嵯峨天皇が彼女の死への沈痛な思いを詠んだ「侍中翁主挽歌詞」への和詩である。嵯峨天皇の「挽歌」は二首あり、従って菅原清公と巨勢識人もそれぞれ二首の唱和詩で応じている。ただ、二人が一首の詩作において、同じ四文字の韻字を同じ順序で使っていることを考えると、二人が同時に唱和詩を詠じたとは到底考えられない。恐らく一人は先に唱和詩を奉り、もう一人はその唱和に従い、試みに次韻詩を一首作り上げたのであろう⁴。また、菅原清公のもう一首「侍中翁主挽歌詞」は、「時、期、轡、悲」という「支」韻を、巨勢識人のもう一首は、「淪、輪、新、春」という「真」韻をそれぞれ用いている。そして嵯峨天皇の二首は、それぞれ「仙、田、年、煙」の「先」韻、「収、秋、愁、流」の「尤」韻で押韻している。以上のことから、二人が唱和

詩を詠じた際には押韻に関する制限がなかったことがわかる。換言すれば、詩人が押韻上で次韻の方法を選んだのは、自主的な創作行為であったのである。

6)組の次韻詩は、桑原腹赤(延暦八(七八九)年—天長二(八二五)年)から嵯峨天皇への唱和である。この一首は絶句であり、脚韻が二箇所のみであるため、次韻詩の形式であっても比較的容易に創作されだろう。あるいは、即興で詠じさせられた詩作である可能性もある。しかし、第一章第一節「流水対」の考察で論及したように、桑原腹赤は旧来の典型的な文学形式に束縛されず、積極的に新たな文学形式を用いようとした詩人である⁵。このことを踏まえて考えると、「奉和故閑聴鶏」で桑原腹赤は、押韻において新たな方法を取ろうとしており、意識的に工夫を施したものだと思われる。

こうして六組の次韻唱和、およびそれらに関連する同じ題の唱和詩を見てみると、九世紀前後の延暦期・弘仁期に至って、次韻詩は、当時の日本詩壇において唱和詩の様式の一つとして自覚されるようになっており、自主的に創作されたものと推定してよいだろう。

なお補足として、『経国集』に春澄善繩(延暦一六(七九七)年—貞観

一二(八七〇)年)「七言奉試賦挑灯杖一首。七言十韻。仍以挑灯杖為韻」にも注目したい。春澄善繩は詩題に「仍ち挑灯杖を以て韻と為す」と書き、改めて「挑灯杖」を韻として用いることを表記している。意図的に相手と同じ韻を踏むという創作形式は、経国集が成立した天長四年までにすでに認識されていたと言えよう。

『経国集』の詩巻は、巻一一と巻一三しか現存していない。また、勅撰集が編纂される時期には、すべて詩人のあらゆる詩作を遺漏なく集めるのは不可能である。このことから考えても、逸失した『経国集』のほかの詩巻や、勅撰集に集録されなかった詩作には、より多くの次韻詩が存在していた可能性がある。

二、菅原道真の詩集における次韻詩

勅撰三集時代と比較すると、九世紀後半においては、次韻詩はより盛んに作られている。菅原道真の詩集を調べると、そこに次韻詩の詩作が四十三首収められていることを確認できた。以下では、それらの詩作の題目と韻字を共に引用し、それらの特徴について検討を加える。

1)

奉和安秀才代無名先生寄矜伐公子。次韻。『菅家文章』15)

【脚韻】仍 膺 昇 乘 懲

2)

和春十一兄老生吟見寄。次韻。『菅家文章』16)

【脚韻】程 生 行 成 兄

3)

奉和王大夫賀对策及第之作。次韻。『菅家文章』50)

【脚韻】聞 分 雲 文 君

4)

長齋畢、聊言懷寄諸才子、酬答頻來、吟詠有感、更因本韻、重以戲之。⁶ 『菅家文章』53)

【脚韻】心 姪 音 吟 尋

5)

近以冬至書懷詩、奉呈田別駕。答中、有恐作冬雷開蟄促之句。吟玩未畢、重寄一封、叙云、詩去須與天南雷鳴一聲、擊睡覺夢、有感更用本韻。予止読驚愕。已悟天人相応、即又以本韻、重以呈之。

⁷ 『菅家文章』59)

【脚韻】疎 舒 餘 初 書

6)

奉和兵部侍郎哭舍弟大夫之作。押韻。『菅家文章』93)

【脚韻】憑 勝 氷 燈 僧

7)

去春詠渤海大使、與賀州善司馬、贈答之數篇。今朝重吟、和典客国子紀十二丞見寄之長句、感而玩之。聊依本韻。『菅家文章』10

4)

【脚韻】霜 光 郎 章 行

8)

重依行字、和裴大使被酬之什。⁸ 『菅家文章』105)

【脚韻】霜 光 郎 章 行

9)

二十八字、謝醉中贈衣。裴少監、酬答之中、似有謝言。更述四韻、重以戲之。⁹ 『菅家文章』109)

【脚韻】言 恩 存 門 温

10)

依言字、重酬裴大使。『菅家文章』110)

【脚韻】言 恩 存 門 温

11)

酬裴大使留別之什。次韻。『菅家文章』112)

【脚韻】深 沈 金 林 心

12)、13)

余近敍詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見。

更依本韻、重答以謝。(一)『菅家文章』119)

【脚韻】詩 滋 媼 緇 疑

同題 (二)

【脚韻】埃 猜 瑰 裁 台

14)、15)

予作詩情怨之後、再得菅著作長句二篇。解釈予憤、安慰予愁。憤
釈愁慰、朗然如醒。予重抒蕪詞、謝其得意。本韻。『菅家文章』1

20)

【脚韻】詩 滋 媼 緇 疑

同題『菅家文章』121)

【脚韻】埃 猜 瑰 裁 台

16)

近日野州安別駕、製一絶寄諸同志。有頻歷外吏、独後倫輩之嘆。

予不勝助憂、聊依本韻酬。『菅家文章』143)

【脚韻】家 花

17) — 26)

寒早十首 同用人、身、貧、頻四字。『菅家文章』200—209)

寒早十首 其一

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其二

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其三

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其四

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其五

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其六

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其七

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其八

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其九

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

寒早十首 其十

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

27)

酬藤十六司馬 对雪見寄之作。次韻。〔菅家文章〕277)

【脚韻】早 人 身 貧 繁 頻

28)

酬藤司馬詠応前櫻花之作。押韻。〔菅家文章〕286)

【脚韻】棠 芳 粮

29)

酬藤六司馬幽閑之作、次本韻。〔菅家文章〕317)

【脚韻】隣 人 春

30)

近以拙詩一首、奉謝源納言移種家竹。前越州巨刺史、忝見酬和。

不勝吟賞、更次本韻。〔菅家文章〕330)

【脚韻】諸 除 虚 余 如

31)

和田大夫感喜勅賜白馬、上呈諸侍中之詩。次韻。〔菅家文章〕33

8)

【脚韻】開 才 来 廻 媒

32)

金吾相公、不棄愚拙、秋日遣懷、適賜相視。聊依本韻、具以奉謝、兼亦言志。『菅家文章』352)

【脚韻】端 寒 漚 蘭

33)

金吾相公、枉賜遣懷、答謝之後、偶有御製、有感更押本韻、事君之道、尽于此篇。某不勝助喜、兼敘私情、有如白日、敬以呈上。『菅家文章』353)

【脚韻】端 寒 漚 蘭

34)

感金吾相公、冬日嵯峨院即事之什、聊押本韻。『菅家文章』358)

【脚韻】肥 稀 微 衣 婦

35)

客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使。自此以後七首、予別奉勅旨、與吏部紀侍郎詣鴻臚館、聊命詩酒。大使思旧日主客、將賦交

字。一席響応、唱和往復。來者宜知之。『菅家文章』419)

【脚韻】膠 拋 交 巢 嘲

36)

答裴大使見酬之作。本韻。『菅家文章』420)

【脚韻】膠 拋 交 巢 嘲

37)

重和大使見酬之詩。本韻。『菅家文章』421)

【脚韻】爻 交 茅 抄 嘲

38)

和大使交字之作。次韻。『菅家文章』422)

【脚韻】茅 交 膠 筍 敲

39)

和副使見酬之作。本韻。『菅家文章』424)

【脚韻】郊 茅 交 蛟 筍

【脚韻】家 沙 花

40)

敬奉和左大將軍扈從太上皇、舟行有感見寄之口号。押韻。

『菅家文章』444)

【脚韻】行 情 清

41)

奉感見猷臣家集之御製、不改韻、兼敘鄙情。一首。¹⁰『菅家後集』

469)

【脚韻】林 金 吟 侵 深

42)、43)

和紀処士題新泉之二絶。次韻。『菅家後集』470)

【脚韻】天 眠

同題『菅家後集』471)

これらの次韻詩および九世紀後半の次韻詩を勅撰三集時代の次韻詩と比較すると、以下のような展開を遂げたことが顕著であったと言える。

第一に、勅撰三集時代においては次韻詩の制作が少なかったのに対して、九世紀後半においては次韻詩の制作は急増した。道真の次韻詩の中で、「奉和安秀才代無名先生寄矜伐公子。次韻。」(『菅家文章』15)は彼の最初の次韻詩であるが、恐らく彼は貞観九(八六七)年、彼が二十三歳の頃からすでに次韻詩の制作を始めていたと考えられる¹¹。また、菅原道真の次韻詩は量的に多いというだけでなく、次韻詩のやり取りをした相手にも様々な人物がいる。例えば、安部興行(詩番143)、春十一兄(春澄氏の誰か。不明¹²。詩番16)、王大夫(中国から渡航してきて京都に滞在した唐の人、王度か¹³。詩番31、34)、菅家廊下に生活する諸生(詩番52、53)、島田忠臣(詩番58、59、338)、渤海使の裴斑(詩番109、110、111、112、419、420、421、422)、典客國子紀十二丞(紀谷長雄。詩番104 664頁参考)、菅野惟肖(詩番119、120)、醍醐天皇(詩番469)、紀処

士（紀氏某。不明。詩番470、471）などの人物が見られる。このように、当時、次韻詩は文人の間で広く知られていたと推測できよう。

第二に、「次韻」つまり相手の詩作通りに押韻するという創作意識は、菅原道真の時代に至って始めて題目において表されるようになった。それは例えば、「更因本韻」、「更用本韻」、「更押本韻」、「聊依本韻」、「更次本韻」、「押韻」、「不改韻」などと記されている。

第三に、同じテーマの唱和では、場合によっては次韻詩の制作は数回にわたって行われた。撰三集では二人の間で次韻詩がかわされたのに対して、菅原道真らの時代には、三人以上で次韻詩をかわした（例えば、菅原道真、島田忠臣、渤海使裴斑の三者）。

第四に、詩の様式をみると、上掲の勅撰三集における六組の次韻詩の内、七言絶句は四首あり、五言律詩は二首に止まっている。それに対し、菅原道真は、多量の律詩の次韻詩も制作している。律詩の場合には、平仄、対語などに配慮しながら、より多くの韻字の使用にも工夫をこらさなければならなかったであろう。これは、言うまでもなく菅原道真の近体詩における創作技術の熟練ぶりを物語っているが、同時に、韻を次ぐという意識が明確になっていることも表わしていると考えられる。

このように、九世紀後半には、次韻詩が明確に一つの創作形式として確立したことがわかる。

三、中国における次韻詩との関係について

前述の通り、平安前期における次韻詩の展開は、九世紀前半と後半においてそれぞれ異なった様相を呈している。特に菅原道真の時代には、勅撰三集時代と比べて次韻詩が急増し、「次韻」などの概念もより明白になった。こうした史的な展開を遂げた理由を考えた時、それは勅撰三集時代から道真らの時代にかけての日本漢詩文学の背景の変化にあると思われる。具体的には、以下の二つの理由が挙げられる。

第一には、九世紀後半、白居易を中心とした中唐文学集団の詩集が日本詩壇に巨大な影響を及ぼしたということが、道真らが盛んに次韻詩を詠じた最も直接的な理由だと考えられる。第二に、日本の次韻詩創作の初期にあたる弘仁期以前には、中国においても次韻詩が極めて少なかったことが挙げられる。このことが、九世紀前半の日本において次韻詩が僅かしかなかったことを説明する要因となる。

この二点について検討を加える前に、中国詩話などの中の記述を踏まえつつ、中唐までの次韻詩の展開について見てみよう。

詩話などの資料を整理すると、中唐から現在に至るまで、多くの学者の間で広く認められた見解が存在している。その見解とは、中唐元和期以前には次韻詩が存在せず、元稹、白居易がそれを誕生させた詩人だというものである。時代を追ってみると、この認識を提唱し始めたのは元稹その人に他ならない。彼は「上令狐相公詩啓」のなかで、白居易の贈詩への唱和に言及した際に、以下のように述べている。

稹與同門生白居易友善。居易雅能為詩，就中愛驅駕文字，究極聲韻，或為千言，或為五百律詩，以相寄。小生自審不能以過之，往々戲排旧韻，別創新詞，名為次韻相酬，蓋欲以難相挑耳。江湖間為詩者，復相仿倣。力或不足，則至於顛倒語言，複重首尾，韻同意等，不異前篇。亦自謂為元和詩体¹⁴。

稹、同門生の白居易と友として善し。居易、雅より能よく詩を作り、……小生自ら審にするに、以て之れに過ぐること能わず。往々戯れ旧韻を排し、別に新詞を創り、名づけて次韻相酬と為す。蓋し難き

を以て相い挑まんと欲するのみ。江湖の間に詩を為る者、復た相ひ仿倣す。力あるいは足らざれば、則ち至於語言を顛倒し、首尾を複重し、韻同じく意等しく、前篇に異ならざるに至る。亦た自ら元和詩体として謂ふ。

この記述の主旨をまとめると、元稹は、白居易の声韻の使い方が巧みであるため、「蓋し難きを以て相い挑まんと欲する」という意欲のもとで「次韻相酬」という唱和詩の形式を作り出し、その形式は当時の詩人たちによつて争うようにして模倣された。そして、元稹がその形式を「元和体」と名付けた、という内容である。また、これと類似した認識を有している文人や研究者が中唐以降にも数多く見られる。時代順にいくつかの記述を引用する。

1) 前人作詩、未始和韻。自唐樂天與元微之為浙觀察、往來置郵簡倡和、始依韻。(北宋末・張表臣『珊瑚鉤詩話』卷一)

前人の作詩、未だ始めより韻を和せず。唐の樂天と元微之、浙觀察たりしより往來し、郵簡を置き倡和し、始めて韻に依る。

2) 古人有唱有和、有雜擬追和之類、而無和韻者。唐始用韻、謂同用此韻。後有依韻、然不以次。後有次韻、自元白至皮陸、其体乃全。(南宋・陸遊『跋呂成未「和東坡尖又韻雪詩」』)

古人、唱あり和あり、雜擬・追和の類あるも、韻を和することなし。唐の始めに韻を用ゐるは、同じくこの韻を用ゐるを謂ふ。後に韻に依ることあり。然るに以て次がず。後に韻を次ぐことあり。元白より皮陸に至りてその体すなわち全し。

3) 古人酬唱不次韻、此風始盛於元白皮陸。(南宋・嚴羽『滄浪詩話』)

古人酬唱するも、韻を次がず。この風、始めて元白皮陸において盛んなり。

4) 古人和意不和韻、故篇什多佳。始於元白作俑、極於蘇黃助瀾、遂成芸林業海。(清・賀裳『載酒園詩話』補遺)

古人、意に和するも、韻に和せず。故に篇什に佳多し。元白作俑において始まり、蘇黃助瀾において極まり、遂に芸林、業海を成す。

5) 古人同作一詩、不必同韻。即同韻、亦在一韻中、不必句句次韻也。自元白創始、而皮陸倡和、又加甚焉。(清・沈德潛『說詩睥話』(続修四庫全書に収録))

古人、同じく一つの詩を作るも、必ずしも韻を同じくせず。すなわち韻を同じくし、また一韻の中にあるも、必ずしも句句韻を次がざるなり。元白より創始し、皮陸倡和し、また甚しきを加ふ。

6) 有次韻、則逐字而和之、始於元白皮陸、盛於宋人。(清・仇兆鰲『杜詩詳註』補註卷下)

次韻有り、則ち字を逐ひて和す。元白皮陸において始まり、宋人において盛んなり。

1) と4) の記述は、「前人」(或は「古人」)が「和意」、すなわち詩の内容を重んじているのに対し、元稹や白居易は「和韻」を重んじていると指摘しており、次韻詩の白居易らとの関係を明言していない。だが、「和韻」の概念を考えれば、1) も4) も白居易以前には次韻詩が存在

しないことを物語っているとわかる。和韻は、『詩体明弁』（明・徐師曾・一五七三年成立）に、

按、和韻有三体。一曰依韻。謂同在一韻中而不必用其字也。二曰次韻、謂和其原韻、而先後次第皆因之也。三曰用韻、謂有其韻而先後不必次也。

按ずるに、和韻に三体有り。一曰く依韻。同じく一韻の中に在りて必ずしも其字を用いざるを謂也。二曰く次韻、其の原韻に和して先後次第皆な之に因るを謂ふ也。三曰く用韻。其韻有りて先後必ずしも次せざるを謂ふ也。

とあるように、相手の詩作の脚韻を強く意識し、韻の部立、脚韻、さらには脚韻の次序までの要素に配慮する唱和の形式であり、脚韻上の拘束の多さ、創作の難易度によって「依韻」「用韻」「次韻」に分けられている。つまり、1)と4)に従い、和韻詩が白居易以前に存在しないといえれば、次韻詩が存在しないという論も自然に成立する。

要するに、白居易らを中心とした中唐文学集団によってはじめて次韻

詩が作られ、流行するようになったということは、旧来より多くの学者や詩人に広く認識されていたのである。平安時代の日本漢詩人たちの次韻詩に関する認識は、中国側のこうした認識と少なからず相似しているであろう。

道真らの次韻詩が勅撰三集時代の詩人より圧倒的に多かったことの理由は、白居易と元稹の次韻詩を調べることでこれを解明できる。その理由とはつまり、第一に、白居易らが多量の次韻詩を制作したこと。第二に、贈詩と和詩を組み合わせた形で同じ詩集に収録されていること。第三に、次韻詩の概念を明確にしていることである。

第一点目についてであるが、白居易の「白氏集後記」（那波古活字本）の記述、「唱和因繼集共十七卷、劉白唱和集五卷、洛下遊賞宴集十卷、其文尽在大集内：会昌五年夏五月一日樂天重記。（唱和因繼集共もに十七卷、劉白唱和集五卷、洛下遊賞宴集十卷、其の文尽く大集の内在り：会昌五年夏五月一日 樂天重て記す）」によると、元和年間には元稹と白居易との間で次韻詩などの唱和が頻繁に行なわれ、最終的に『元白唱和因繼集』全一七巻が結集された。卞孝萱氏は、元稹から白居易への次韻詩が五十五首、白居易から元稹への次韻詩が二十六首ある¹⁵⁾と指摘して

いる。

第二点目については、花房英樹氏がすでに指摘している通りである。

そして、氏の作業により、『元白唱和詩』の全貌が復元されている。

第三点目についてであるが、前述したように、元稹は「上令狐相公詩啓」の中で次韻詩を作ろうとした契機やその流行について述べただけではなく、「往々戲排旧韻、別創新詞、名為次韻相酬」と記しており、次韻詩の作り方についても明言しているのである。これらの白居易らの次韻詩の特徴は、九世紀後半の菅原道真らが次韻詩の文学潮流に達した文学背景であると言えよう。

しかしながら、次韻詩の発生が遠く南北朝時代に遡ることができるのにも関わらず、何故白居易以前に次韻詩がないと言えるのであろうか。言うまでもなく白居易らが次韻詩のブームを興したことが人人に深い印象を付けたのは、一つ大きな理由である。一方、白居易以前においては次韻詩の詩作が極めて少なかったことも、人々の視野に入らなかった理由の一つである。

第二章第一節において、南北朝・六朝には次韻詩の用例が極稀であったと述べたため、ここではそれ以降の初唐・中唐大暦期までの次韻詩の

展開を紹介する。まず、初唐の次韻詩についてであるが、明の謝榛が『四溟詩話』巻二において以下のように記している。

許敬宗擬江令九日三首、皆次韻、初唐殆不多見¹⁶。

許敬宗、江令の「九日」に擬する三首、皆次韻。初唐に殆ど多く見えず。

この記述から、初唐に次韻詩が稀であったことや、許敬宗（五九二―六七二年）が南朝の江総（五一九―五九四年）の「九日」という文字が題に含まれている詩を手本にして、擬詩を三首作ったことがわかる¹⁷。『陳書』『江総伝』に「有集三十卷」とあり、江総は自家詩集が編纂されたことがわかる¹⁸。また、『旧唐書』（列伝第三十二）許敬宗の伝には「咸元三年薨……文集八十卷」と記されており、許敬宗も自家詩文集を有しているのである。つまり、江総の原詩と許敬宗の擬詩がそれぞれの家集に収められているのである。双方の詩作の次韻詩の關係に気付くことが困難であることは想像に難くない。なお、許敬宗の次韻詩が唱和詩として詠じられていないことも、唱和詩の創作形式としては注目されにくい理由

であろう。

中唐前期の大暦年間（七六五―七八〇年）はどうか。明の胡震亨の『唐音癸籤』巻三における次韻詩に関する記述から、それを察することができるかもしれない。以下に引用する。

至大暦中、李端、盧綸野寺病居酬答、始有次韻。後元、白二公次韻益多、皮、陸則更盛矣¹⁹。

大暦中に至り、李端、盧綸野寺病居に酬答し、始めて次韻有り。後に元、白二公次韻益す多く、皮、陸則ち更に盛なり。

「至大暦中：始有次韻。後元、白二公次韻益多」という記述は興味深い。

つまり、胡震亨は調査に基づき、中唐前期の大暦年間までに次韻詩がなく、大暦年間に現れ始めたもののまだ少数であり、白居易らが活躍した中唐後期になって初めて次韻詩が多くなったという認識を示している。この見解は、正確か否かは別の問題としても、次韻詩が中唐以前には極めて稀な存在であったことを暗示している。

また、彼が指摘した次韻詩唱和はそれぞれ李端（七四三―七八二年）

の「野寺病居喜盧綸見訪」と、盧綸の「酬李端公野病居見」²⁰である。李端の生存時期からすると、これが七八二年以前に詠じられたことがわかる。だが、注意すべきなのは、両者は家集があることである。『新唐書』芸文志（巻四）によると、李端に『李端詩』三巻があり、盧綸は、『盧戸部詩集』十巻を有している。つまり、胡震亨が指摘した次韻詩とその唱和した詩作は、各々別の家集に収められているのである。これは、この二首の詩作の「次韻」の関係が気付かれにくい理由であろう。

こうして中国の詩話を見ると、中唐大暦期の次韻詩に関する記述が極めて少ないことがわかる。これは、次韻詩が稀であることや、次韻詩とその贈詩が別々の詩集に収録されていることに理由があると考えられよう。

なお、本研究の調査によると、大暦の詩壇を代表する「大暦十才子」²¹の詩作には他に次韻詩が二組あるが、次韻詩の存在は決して多いとは言えない。その二組とは、李益の「贈内兄盧綸」（贈詩）と盧綸の「酬李益端公夜宴見贈」（次韻詩）、武元衡の「春曉聞鶯」と李益の「奉和武相公春曉聞鶯」である。当時、彼らにはそれぞれ『李君虞詩集』、『盧戸部詩集』、『武元衡集』十巻²²という家集があり、それらの詩作も別々に収録

されていると考えられる。以下の通りである。

贈内兄盧綸 李益

世故中年別 餘生此会同

却將悲與病 來對朗陵翁（『李君虞詩集』下卷）

酬李益端公夜宴見贈 盧綸

戚戚一西東 十年今始同

可憐歌酒夜 相對兩衰翁（『盧戸部詩集』卷三）

春曉聞鶯 武元衡

寥寥蘭台曉夢驚 綠林殘月思孤鶯

猶疑蜀魄千年恨 化作冤禽萬轉聲（『全唐詩』卷三七）

奉和武相公春曉聞鶯 李益

蜀道山川心易驚 綠窓殘夢曉聞鶯

分明似寫文君恨 萬怨千愁弦上聲（『李君虞詩集』）

これらの詩作をもとに南北朝から中唐大暦にかけての次韻詩の展開を総合的に考えてみると、以下のような特徴が挙げられる。

第一に、南北朝から中唐の大暦年間に至るまでの数世紀の間は、次韻詩の用例が極めて少なかったこと。

第二に、詩題に「次韻」あるいは「步韻」などと明記してあるものが稀であること。

第三に、次韻詩とその原詩が組み合わせられた形で詩集に収録されることは少なく、読者が次韻詩であることを察知するのが困難であることである。

こうした次韻詩の展開の特徴は、中唐大暦まで次韻詩がさほど注目されず、その存在が中唐後期の元稹にまでも気付かれなかった理由でもある。日本の場合に置き換えて考えると、中国の詩集を享受する環境（詩集の伝来、書籍の種類など）が決して中国より優れないため、そうした別々に収録された、数少ない次韻詩とその原詩を同時に察知することは、極めて困難であると推測できよう。したがって、延暦期・弘仁期の日本詩人は、次韻詩の創作形式に気が付き、直接それらから影響を受けたのが大きな疑問となる。

四、延暦期・弘仁期における次韻詩確立の背景

第二章第一節において論じたように、次韻詩が成立した背景には、「座」の意識や、押韻法の運用を重要視しようとした文学風潮があった。平安初期の延暦期・弘仁期の日本詩壇を考えると、こうした文学的背景が存在していることがわかる。

まず、「座」の意識を重視する風潮は、延暦期・弘仁期における「君臣唱和」という政治的な色彩を帯びた文学的行為に関係していると指摘できよう。「君臣唱和」の政治的意義についていえば、最高権力者とその臣下とが詩作の唱和を通して、共通した文学的空間を創出することで、君臣の融合した関係や安泰な政治の様態を再確認し、また謳歌することにあると考えられる。上掲の六組の次韻唱和を見てみると、2組以外は、いずれも天皇を囲んだ詩会で詠まれたものであることがわかる。1組は東宮平城を中心とした詩会で詠まれたものであり、3、4、5、6組は、直接的であれ間接的であれ、嵯峨天皇と関係するものである。つまり、天皇を囲んだ場において、臣下は、韻を次ぐことを通して、内容やテーマという側面だけでなく、押韻上においても天皇と共通する文学的空間を作り出しているのである。次韻詩は「君臣唱和」の場に極めて相応しい創作形式だと言えよう。延暦期・弘仁期における「君臣唱和」

については多くの先行研究があるため²³、ここでは贅言を要しないだろう。

次に、次韻詩成立のもう一つの条件、押韻法に対する関心の視座からみて、延暦期・弘仁期の日本詩人はどうであったのだろう。以下では、延暦期・弘仁期における詩人も押韻法の運用に関心を寄せ、多くの工夫を施したことを明らかにする。

勅撰三集には、延暦期の詩作と特定できるものは十首ほどしかないが、その中に当時の詩人の押韻への関心を表わすのにふさわしい用例が三首見られる。

五言。雪。 応詔。 桓武天皇在祚。 一首。 朝原道永

自天零者雪 撲地照而開 春絮繁冬柳 新花發旧梅

王家銀作屋 帝里玉為台 欲載千箱詠 東西一色来 『経国集』 168

五言。詠雪。 一首。 金雄津

如玉如銀雪 自東自北來 園無無絮柳 庭有有花梅

瓊室非殷室 瑤台異夏台 九区千万里 一種色皚皚 『経国集』 169

詠雪。 一首。 大枝永野

散絮因風起 凝鹽任氣來 榭台皆白玉 草樹綵花梅

国有豐年瑞 家無閉戶哀 但傷東鄰履 隨步跡猶開 《經国集》170)

この三首は、桓武天皇を囲んだ詩会で「分韻詩」の形式で作られた詩作である。「分韻詩」は、第二章の第一節で述べたように、詩人たちがあらかじめそれぞれの韻字を当てられ、その韻字を用いて作詩することであり、探韻詩とも呼ばれている。前掲した三首に用いられた韻字を見ると、それぞれ「開、梅、台、来」、「来、梅、台、皚」、「来、梅、哀、開」であり、恐らく在席の詩人たちが皆「灰韻」の韻字を使って作詩することが予め決められたのであろう。こうして同じ韻部の韻字を使うことで、「雪を詠じる」というテーマの一連の詩作は、内容上に止まらず、音の世界においてもハーモニーのように響きあっているのである。現存する延暦期の詩作は数少ないものの、押韻法に対する工夫が施されていることは明らかである。

次に、弘仁期における押韻法の実態について見てみよう。調査によると、「分韻詩」などのように韻を予め決めてから、詩の創作を行うことが数多く見られ、また「依韻詩」(唱和詩の一種)も盛んに行われているこ

とがわかる。特に、押韻法の制限については、「以…為韻」、「題中取韻」は新たな方法である。以下では、一「分韻詩」、二「以…為韻」、「題中取韻」など、三「依韻詩」という順で用例を挙げながら検討を加える。

一 分韻詩

1) 饒右親衛少將軍朝嘉通奉使慰撫關東。探得臣。 嵯峨天皇

《凌雲集》22)

【脚韻】虜 臣 春 人 辛

2) 神泉苑雨中眺瞩。応製。一首。探得初字。 藤原冬嗣

《凌雲集》30)

【脚韻】初 魚 舒 如

3) 春日過友人山莊。探得飛字。 桑原腹赤 《凌雲集》89)

【脚韻】飛 衣 帰 機

4) 重陽節神泉苑。賜宴群臣。勒空通風同。 嵯峨天皇 《凌雲集》4)

【脚韻】空 通 風 同

5) 晩夏神泉苑。同勒深臨陰心。応製。一首。菅野真道

【脚韻】深 臨 陰 心

6) 晩夏神泉苑釣台。同勒深臨陰心。応製。賀陽豐年

〔凌雲集〕40)

【脚韻】勝 深 臨 陰 心

7) 謁海上人。韵勒遇樹住澍句孺務霧芋聚賦趣。仲雄王

〔凌雲集〕35)

【脚韻】遇 樹 住 澍 句 孺 務 霧 芋 聚 賦 趣

分韻詩は、集団的な座において、各々の詩人は一つの韻字あるいはいくつかの韻字があらかじめ与えられ、それを用いて詩を作る形式である。これら七首はみな分韻詩であるが、用例1)、2)、3)より用例4)、5)、6)のほうが押韻の制限においてより厳しいものである。そして、これらの七つの用例は、清の俞樾が、『茶香室叢鈔』四(卷十三)「古人分韻法」の条のなかで分類した、中国南朝の分韻詩の三種類がすべて揃って

いる。「古人分韻法」の条は、第二章の第一節においてすでに引用しているが、ここで念のため改めて引いておく。

又按、即陳後主集考之、頗得古人分韻之法、如『立春日泛舟元圃各賦一字 六韻成篇』則所賦之韻止一字外、五韻任其自用者也。如云『獻歲立春日泛舟元圃各賦六韻』則所賦者有六字、各人以所賦韻作六韻詩一首也。如云『上巳元圃宣猷堂禊飲 同共八韻』則所賦者八字在坐同之、人人以此八字作八韻詩一首也。各賦一字最寬、如今詩限官韻耳、各賦六韻較嚴、六韻外不得更溢一字、然猶一人有一人之韻。同共八韻、則人人用此八字、竟如今之次韻詩矣。

また按ずるに、陳後主集に即してこれを考ふれば、頗ぶる古人の分韻の法を得たり。『立春の日に舟を元圃に泛べ、各々一字を賦し、六韻にて篇を成す』の如く、則ち賦する所の韻一字に止まり、外の五韻その自ら用ゐるものに任ずるなり。『獻歲。立春の日に舟を元圃に泛べ、各々六韻を賦す』に云ふが如く、則ち、賦する所の者六字ありて、各人賦する所の韻を以て六韻の詩一首を作すなり。『上巳に元圃の宣猷堂にて禊飲す。同じく八韻を共にす』に云ふが如く、則

ち賦する所の者八字坐に在りてこれに同じ、人人この八字を以て八韻の詩一首を作すなり。「各々一字を賦す」は最も寛にして、今の詩、官韻を限るが如きのみ。「各々六韻を賦す」は較や厳しく、六韻の外、更に一字も溢るることを得ず。然れども猶一人に一人の韻あり。「同じく八韻を共にす」は、則ち人人此の八字を用ひ、竟に今の次韻詩のごとし。

兪樾の分類に従うと、前掲の用例1)「餞右親衛少將軍朝嘉通奉使慰撫關東 探得臣」、用例2)「神泉苑雨中眺矚 応製一首 探得初字」、用例3)「春日過友人山莊 探得飛字」は、「各々一字を賦す」、つまり韻字一つだけが当てられた場合の分韻詩であるが、詩人はその韻と同じ部立の韻字を使って詩作したことがわかる。用例4)「重陽節神泉苑 賜宴群臣 勒空通風同」、用例7)「謁海上人 韵勒遇樹住澍句孺務霧芋聚賦趣」は、第二種類目の「各々六韻を賦す」の場合の分韻詩であり、詩人は、当てられた幾つかの韻字を用いて作詩し、その韻字の次序は自由であった。用例5)「晚夏神泉苑 同勒深臨陰心 応製一首」、用例6)「晚夏神泉苑 釣台 同勒深臨陰心 応製」は、第三種類目の「同じく八韻を共にす」

の場合の分韻詩であり、詩人たちは、同じ韻字がいくつか与えられ、なおかつ同じ順序で韻字を使わなければならかったのである。殊に、三種類目の「同共八韻」という詩作を照らしあわせてみると、傍線部に「則ち人人此の八字を用ひ、竟に今の次韻詩のごとし」とあるように、結果としては次韻詩とよく似た形式になる。換言すれば、用例5)、6)は、詩人たちが同時点に作詩したことを無視すれば、その二首が次韻詩の関係にあるように見えるのであろう。

二)「以…為韻」、「題中取韻」など

1) 五言。奉試得治荊璞。以天為韻限六十字。紀虎繼

〔経国集〕187)

2) 五言。奉試詠三。以帷為韻。一首。文室真室〔経国集〕189)

3) 同前 〔経国集〕190)

4) 七言。奉試賦得照瞻鏡、各以名字為韻、八韻為限。一首。

小野春郷〔経国集〕198)

5) 七言。奉試賦挑灯杖一首。七言十韻。仍以挑灯杖為韻。

春澄善繩〔経国集〕199)

6) | 9)

河陽十詠。四首。以三字為題、以終字為韻。嵯峨天皇

『文華秀麗集』96—99

10)、11)

奉和河陽十詠。二首。藤原冬嗣『文華秀麗集』100—101

12) 奉和河陽十詠。良岑安世『文華秀麗集』102

13) — 16)

奉和河陽十詠。四首。仲雄王『文華秀麗集』103—106

17)、18)

奉和河陽十詠。二首。朝野鹿取『文華秀麗集』107、108

19)、20)

奉和河陽十詠。滋野貞主『文華秀麗集』109、110

ここで取り上げた「以…為韻」と「題中取韻」などの創作形式は、押韻の視座から言えば、分韻詩と同様、韻字が予め制限された条件のもとで作詩することであるが、前代と比較すると、韻字の決まり方としては新たな試みだと言える。たとえば、用例1)は、天の韻字が、籤などで当てられたのではなく、誰かによって予め決められたものであり、韻字の字

数も明確に制限されている。用例4)は、題目に「各以名字為韻」とあるように、詩人の各自の名前の文字を韻とすることが決められている。

用例5)、6)は、それぞれ「奉試賦挑灯杖 一首 七言十韻 仍以挑灯杖為韻」、「以三字為題、以終字為韻」とあるように、詩のテーマをそのもを使用して韻を踏むことが制限されている。

こうして勅撰三集時代では、押韻の決まり方はいろいろ工夫が施されていると想像される。弘仁期の詩人たちの押韻法に対する相変わらずの濃厚な関心が表われているものと考えられよう。

三) 依韻詩

1)

江亭曉興。嵯峨天皇 『凌雲集』12)

【脚韻】 亭 聽 屏 青

奉和江亭曉興。呈左神策衛藤將軍。淳和天皇『凌雲集』28)

【脚韻】 亭 形 星 汀

2)

春日遊獵。日暮宿江頭亭子。嵯峨天皇 《文華秀麗集》13)

【脚韻】雄風空熊

奉和春日遊獵日暮宿江頭亭子。應製。皇太弟(淳和天皇)

《凌雲集》27)

【脚韻】中空紅風

3)

秋夜途中聞笙。菅原清公 《凌雲集》70)

【脚韻】明笙清驚

和菅祭酒秋夜途中聞笙之什。藤原冬嗣 《凌雲集》31)

【脚韻】京情形城

4)

晚秋述懷。一首。姬大伴氏 《文華秀麗集》50)

【脚韻】寒殫殘看

和伴姬秋夜閨情。一首。巨勢識人 《文華秀麗集》55)

【脚韻】番看難寒殘

5)、6)

王昭君。一首。嵯峨天皇 《文華秀麗集》62)

【脚韻】關還顏山

奉和王昭君。一首。朝野鹿取 《文華秀麗集》65)

【脚韻】干殘寒安

奉和王昭君。一首。藤原是雄 《文華秀麗集》66)

【脚韻】安難殘彈

7)

折楊柳。一首。嵯峨天皇 《文華秀麗集》69)

【脚韻】絲宜吹悲思

奉和折楊柳。一首。《文華秀麗集》70)

【脚韻】序時眉悲誰

8)

賦得隴頭秋月明。一首。御製。嵯峨天皇 《文華秀麗集》134)

【脚韻】团寒端寬

奉和隴頭秋月明。一首。小野岑守 《文華秀麗集》135)

【脚韻】安難寒冠

9)

和滋内史秋月歌。 桑原腹赤 《文華秀麗集》 138)

【脚韻】明 形 徊 胎 栽 倪 啼 練 戦 行 声 情

10)

和澄上人題長宮寺。 二月十五日寂滅会一首。 韻不改 滋野貞主

《経国集》 75)

【脚韻】臨 金 深 林 任 尋 陰 今 琴 沈 襟 心

依韻詩は、和韻詩の一種であり、相手の詩作と同じ韻部の韻字を用いて作詩することである。上掲の用例の脚韻を見てみると、用例1)から用例8)における依韻詩とその唱和した原詩との押韻上の関係が明らかである。特に、用例8)の「奉和隴頭秋月明 一首」(小野岑守)については、『文華秀麗集』の代表的な写本だとされている慶長古写本である来歴志本と、今井似閑系統本である三手文庫本においては、その題目が「奉和先韻」と記されている。用例9)、10)については、唱和した原詩は現存していないものの、詩の題目から依韻詩ではないかと推測できる。

用例9)の題目については、来歴志本、三手文庫本では「和滋内史秋月歌」の後に「同和前韻」とあり、用例10)詩作の題目に「韻不改」とあるため、用例9)、10)は和韻詩の形式に従って創作されたものだと考えられる。

また、ここで注目したいのは、依韻詩と次韻詩との関係である。依韻詩は、押韻上で次韻詩のように相手と同じ脚韻を同じ次序で用いるという制限が課されていないが、逆に考えると、依韻詩の押韻上の制限をさらに厳しくすると、次韻詩へ展開していくのであろう。仮に、韻を踏むことを基本の創作技術に譬えるならば、依韻詩と次韻詩は、基本的な押韻法に基づいた応用的な技術であろう。

上掲したように、延暦期・弘仁期においては「分韻詩」、「以…為韻」、「題中取韻」、「依韻詩」の用例が多く見受けられる。中でも、次韻詩ではないかと思われる分韻詩の一種の創作形式が作られている。つまり、参加者は、同時にいくつかの韻字を当てられ、それらを同次序で押韻するという分韻詩である。それらの用例から当時の詩人が押韻法に対し多くの関心を持っており、さまざまな工夫が施されていることが看取できる。特に脚韻の運用の視座からすれば、それらの創作形式は、いずれ

も予め押韻上の制限が課せられていることが特徴である。

こうした延暦期・弘仁期の日本詩壇における押韻法を重要視しようとした傾向を考えると、当時に次韻詩を創作する文学的背景も十分に完備しているといえよう。

おわりに

以上、平安前期における九世紀前半から九世紀後半にかけての次韻詩の展開、およびその展開の理由について検討してきた。九世紀前半および後半を代表する勅撰三集と菅原道真の詩集を調査した結果、九世紀後半に次韻詩の数が急増し、より盛んに作られるようになったことが顕著である。こうした展開を中国における次韻詩の展開と関連付けて考えてみると、中国の次韻詩の流行を齎した白居易を中心とした中唐の文学集団は、九世紀後半の詩人へ強大な影響を与えていることが明らかである。しかし、中国の次韻詩は中唐前期の大暦年間（七六五―七八〇年）以前には数が少なく、また原詩と次韻詩が別々に収録されているため、その存在を察知するのは極めて困難であった。そのため、九世紀前半の延暦

期・弘仁期に現れてきた次韻詩は、中国の次韻詩の直接的影響の産物であるとは到底考えにくい。次韻詩は、基本的な押韻法に基づいた、脚韻の使用に制限が加えられた創作形式であるため、次韻詩は、日本において押韻法に対する工夫を重ねた上でのチャレンジ的な産物ではないかと考える。そこで、延暦期・弘仁期の日本詩壇では、「座」の意識、押韻法を重視する傾向が著しいことを実証的に確認でき、当時の日本詩壇では、中国の次韻詩の直接影響を受けずに、次韻詩の確立の背景が十分に整っていたことがわかる。平安前期の次韻詩の展開に注目することを通して、中国文学潮流との関係、また日本漢詩の独立性にも光を当てることができると考える。

〔注〕

- 1 『経国集』の編纂時点では小野岑守（従四位下）は官位が和気広世（正五位下）より高かったため、「雑詠一」の詩作の配列において、小野岑守の唱和詩は、「奉和落梅花」という詩題で東宮平城の詩作に次ぎ、和気広世の詩より先に置かれている。

2 小島憲之氏によると、広世の詩は従五位以前の頃の作ではないかと推測されている。『国風暗黒時代の文学』中（上）第二章弘仁期以前（目）平城朝の文学」（塙書房、一九七三年）を参照。

3 『経国集』にこれと同時期の滋野貞主の詩作、すなわち「七言春日奉使入渤海客館一首」（125）が見られる。

4 『文華秀麗集』の編集方針は、部門を立て、詩作の内容の関連性を重んじると同時に、同じ題材の詩作を並ぶ際に、詩人の官職にも配慮しているのである。当時官位より高い菅原清公の唱和詩を、巨勢識人の詩作より前に配置しているのは、不自然ではない。そのため、こうした配列によって、巨勢識人が次韻詩を創作したと直ちに判断できない。

5 『文華秀麗集』の近体詩の対句の全体像を見ると、対照・対立関係にある対句表現が多いのは顕著である一方、流水対は桑原腹赤の詩作からの一例のみである。「地勢風牛雖異域 天文月兔尚同光 地勢風牛域を異にすると雖も、天文月兔尚し光を同じくす」（『文華秀麗集』27「月夜言離」桑原腹赤。首聯）。勅撰三集時代では、流水対はきわめて稀な表現であった。そして、流水対の対句表現史においての意義は、「通」と「変」、すなわち、伝統的な対句表現の規則を正しく保ちながらも、

それに縛られずにあらたな変化を求め、対句表現にバリエーションを齎したことにある。そのため、桑原腹赤は、典型的な表現に束縛されずに、新たな表現を好んで使用しようとする傾向を有する詩人だといえよう。唱和した原詩は「五月、長齋畢、書懷簡諸同舍」（『文華秀麗集』52）である。脚韻は「心 姪 音 吟 尋」である。

7 この詩作より道真が先に詠じたのは「冬至日、書懷奉呈田別駕。」（『菅家文草』58）である。脚韻は、「疎 舒 餘 初 書」である。

8 島田忠臣の唱和した次韻詩は、次の二首である。「繼和渤海裴使頭見酬菅侍郎。紀典客行字詩。」（『田氏家集』108）、「敬和裴大使重題行韻詩。」（『田氏家集』109）

9 元慶七年に渤海使を招待した宴会で、菅原道真は、「醉中脱衣、贈裴大使、敘一絶、寄以謝之。」（『菅家文草』108。【脚韻】成 情 生）を詠じ、同席した島田忠臣はそれに応じて次韻詩で唱和したが、次の二首である。「同菅侍郎醉中脱衣贈裴大使。次韻。」（『田氏家集』112）、「酬裴大使答詩。本韻。」（『田氏家集』113）

10 菅家後集貞享板本首部に「見右丞相献家集 御製 門風自古是儒林 今日文華皆盡金 唯詠一聯知氣味 況連三代飽清吟 琢磨寒玉聲聲麗

裁制餘霞句句侵 更有菅家勝白様 從茲拋却匣塵深」とある。

11 川口久雄注『菅家文草後集』（岩波書店、一九五六年）解説「菅原道真年表」八三頁を参照。

12 前注と同じ、640頁を参照。

13 前注と同じ、644頁を参照。

14 白居易の詩文の引用は、平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』（同朋舎出版、一九八九年）に従う。

15 卞孝萱「唐代次韵詩為元稹首創考」（『晋陽學刊』一九八六年四期）

16 謝榛『四溟詩話』（人民文学出版社、一九六一年）

17 江総「於長安歸還揚州九月九日行薇山亭賦韻 心逐南云遊 形隨北雁來

故鄉籬下菊 今日幾花開」。許敬宗「擬江令 本逐征蓬去 還隨落葉

來 菊花心未滿 許待詩人開」（『全唐詩』卷三五）、「又擬 遊人倦蓬

輒 鄉思逐鴻來 偏想臨潭菊 芳蕊對誰開」

18 原詩集は散逸。明の張溥が編纂した『漢魏六朝百三大家集』に「江令君集」一卷が見える。

19 胡震亨『唐音癸籤』（古典文学出版社、一九五七年）22頁に「至大曆中、李端、盧綸野寺病居酬答、始有次韻。後元、白二公次韻益多、皮、

陸則更盛矣」とある。

20 李端「野寺病居喜盧綸見訪 青青麥壟白雲陰 古寺無人新草深 乳燕拾

泥依古井 鳴鳩拂羽歷花林 千年駁蘚明山履 万尺垂夢入水心 一臥

漳浜今欲老 誰知才子忽相尋」（『全唐詩』卷二八六）、盧綸「酬李端公

野寺病居見寄 野寺鐘昏山正陰 乱藤高竹水声深 田夫就餉還依草

野雉驚飛不過林 齋沐暫思同静室 清羸已覺助禪心 寂寞日長誰問疾

料君惟取古方尋」（『盧戸部詩集』）

21 『容齋隨筆』（四部叢刊電子版）における「李益盧綸詩」の条に「李益

盧綸皆唐大曆十才子之傑者 綸於益為内兄 嘗秋夜同宿 益贈綸詩曰

世故中年別 餘生此会同 却將悲與病 独對朗陵翁 綸和曰 戚戚一

西東 十年今始同 可憐風雨夜 相問兩衰翁 二詩雖絶句 讀之使人

悽然皆竒作也」とある。

22 『臨淮詩集』とも言う。『唐詩百名家全集』（清・席啓寓選）に収録されている。

23 井実充史「平城朝の君臣唱和」（『言文』四六、福島大学、一九九八年）、

鈴木健一『日本漢詩への招待』第三章「平安時代の漢詩―道真への道」第二節「君臣唱和」などを参照。

第三節 分韻詩から次韻詩へ

―奈良、平安前期における日本の新羅、渤海使

との漢詩交流を中心に―

はじめに

漢詩の詩作においては、その押韻法によって創作形式に変化が起こる。

本節では、押韻法に着目しつつ、奈良・平安前期に日本官人と新羅使、渤海使との間で行われた漢詩交流について考察し、その実態と中国の漢詩文学潮流との関係性、並びに日本の新羅および渤海との外交との関わり新たに光を当てることを試みる。

周知のように、東アジア世界の漢詩交流に関しては、すでに数多くの研究成果が蓄積されてきた。諸先行研究の特徴として、第一に、詩作の内容を主要な手掛かりとしていること、第二に、当時の東アジア世界の政治的背景と結び付けながら漢詩交流の性格を検討していることが挙げられる¹⁾。この二点を踏まえつつ、更に次の二つの視点から検討を加える

余地があると考えられる。

一点目は、漢詩の押韻法と創作形式に着目することである。無論、先行研究の多くがそうであるように、漢詩の内容に着目することは、詩の本質などを明らかにするために極めて有効な方法である。しかし、漢詩という文学様式を構成する要素としては、内容上の要素だけではなく、形式上、音韻上の要素もまた非常に重要である。例えば、詩句の字数から見ると、五言詩、七言詩、雜言詩などの形式があるが、中でも五言詩は前漢に至ってはじめて成立したものである。また、平仄について言えば、六朝時代から唐代へ下り、古体詩から近体詩へ展開してゆくといった傾向が顕著に見てとれる一方で、唐代においては、意図的に古体詩を詠じることで古典的作風を追求しようとした詩人も存在した。つまり、漢詩の内容上以外の特徴に注目することは、詩に秘められている時代色や詩人の意図などを看取することに繋がるのである。そして、二点目は、それら漢詩の創作形式と中国の文学潮流との関連性に着目して考察を行うことである。従来の研究では、漢詩と外交との緊密な関わりに言及しているものの、奈良から平安前期にかけての漢詩の創作形式の変化およびその理由については未だに触れられていない。

そのため、本節では、押韻法の視座から、日本官人が新羅使、渤海使との交流の場で用いた創作形式の変化に注目し、その変化の理由を明白にすることを試みる。

一、新羅使の帰国を送った宴会での分韻詩

分韻詩（探韻詩）とは、詩人たちにあらかじめそれぞれの韻字が当てられ、その韻字を用いて作詩するという形式で詠まれた詩を指す。本節では、奈良時代、日本官人が新羅使の帰国を送る目的で催した宴会の場で詠まれた分韻詩を扱う。『懷風藻』には、新羅使と関連する詩作が十首ある。以下に列挙する。

52 「五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首。并序。」 大学頭從五位
下山田史三方

62 「初秋於長王宅宴新羅客」 皇太子学士正六位上 調忌寸古麻呂
60 「五言。秋日於長王宅宴新羅客。賦得風字。」

從五位下大学助背奈王行文

63 「秋日於長王宅宴新羅客。賦得稀字。」 正六位上刀利宣令

65 「秋日於長王宅宴新羅客。并序。賦得前字。」

大学助教從五位下下毛野朝臣虫麻呂

68 「五言。於宝宅宴新羅客。一首。賦得煙字。」

大臣正二位長屋王

71 「秋日於長王宅宴新羅客。賦得流字。」

從三位中納言兼催造長官安倍朝臣広庭

77 「秋日於長王宅宴新羅客。賦得時字。」

正六位上但馬守百濟公和麻呂

79 「秋日於長王宅宴新羅客。賦得秋字。」

正五位下図書頭吉田連宜

86 「秋日於長王宅宴新羅客。賦得難字。」

贈正一位左大臣藤原朝臣総前

以上十首のうち、八首が分韻詩の形式で詠じられたことは明らかである。これらの八首の創作時期については、養老三年、養老七年、神龜三年といった複数の見解が存在している³。ただし、創作時期が養老期、神

亀期のいずれであつたにせよ、当時の日本は、天武朝以来の律令国家としての国家形成が進められ、古代東アジア地域における小帝国としての自己認識を有している時期にあつたといえる³。また養老年間以降、長屋王の政治的地位や権力が上昇していることから、いわゆる長屋王時代であつた⁴。こうした時代の政治的特徴は、後に論じる分韻詩創作の成立と深く関わっているのである。

人を送別する際に詠む詩としては、分韻詩以外にも他の形式が存在する。例えば、唱和詩は、当時或いはそれ以前に、中国漢詩文学においても日本漢詩文学においても存在していた。唱和詩では、「唱える」と「こたえる」という相互的な交流が可能であり、送別する側と送別される側の思いを互いに伝えることができるため、送別の場により相応しい創作形式であると言えよう。しかしながら、新羅使の帰国を送る宴会では、分韻詩の創作形式が使用された。それは何故なのだろうか。本研究では、その理由を、中国六朝・初唐（六一二―七二二年）における分韻詩創作の時代色と性格、並びに、日本と新羅との政治的關係に求めることができるかと考える。

六朝時代の分韻詩の創作を確認できる資料は、極めて少ない。管見の

限り、稀に歴史書に記述が残っている以外には、作詩された分韻詩そのもののしか見当たらない。

まずは、『南史』⁵の列伝（第四十五）曹景宗（四五七―五〇八年）伝からの引用を見てみよう。

景宗振旅凱入、帝于華光殿宴飲連句、令左僕射沈約賦韻。景宗不得韻、意色不平、啓求賦詩。帝曰「卿伎能甚多、人才英拔、何必止在一詩。」景宗已醉、求作不已、詔令約賦韻。時韻已盡、唯余競病二字。景宗便操筆、斯須而成、其辞曰「去時兒女悲、帰来笳鼓競。借問行路人、何如霍去病。」

この記述から、五世紀後半にすでに梁武帝（五〇二―五四九年）を中心とした分韻詩の詩宴が催されたことがわかる。

また、『芸文類聚』には、梁の庾肩吾（四八七―五五一年）の一首が収められている。

庾肩吾「暮遊山水 賦韻得磧應令詩」〔『芸文類聚』遊覽二八〕⁶

この題目から、庾肩吾が当時まだ皇太子であつた蕭綱（後の簡文帝）の山水遊樂に伴つた際に、皇太子の命令に応じて分韻詩を詠進したことが看取できる。

さらに、『陳後主集』⁷には分韻詩の詩作が多数発見された。

「立春日泛舟元圃、各賦一字、六韻成篇」、「獻歲立春日泛舟元圃、各賦六韻」、「上巳元圃宣猷堂禊飲、同共八韻」、「上巳玄圃宣猷嘉辰禊酌、各賦六韻、以次成篇詩」「七夕宴宣猷堂、各賦一韻。詠五物、自足為十。并牛女一首五韻。物次第用、得帳屏風案唾壺履」、「七夕宴重詠牛女、各為五韻」、「七夕宴樂脩殿、各賦六韻」、「七夕宴玄圃、各賦五韻」⁸、「初伏七夕已覺微涼 既引應徐且命燕趙清風朗月以望七襄之駕置酒陳樂、各賦四韻之篇」

これらの詩作の題目から、陳後主が、立春、上巳、七夕などに折々詩宴を開き、多くの官人や文人と共にその場で分韻詩を盛んに詠じたことが窺える。陳後主を中心とした分韻詩の創作に関する記述は、以下の『茶

香室叢鈔』四（卷十三）の「古人分韻法」の条にも見られる。

又按、即陳後主集考之、頗得古人分韻之法、如『立春日泛舟元圃各賦一字、六韻成篇』則所賦之韻止一字外、五韻任其自用者也。如云『獻歲立春日泛舟元圃、各賦六韻』則所賦者有六字、各人以所賦韻作六韻詩一首也。如云『上巳元圃宣猷堂禊飲、同共八韻』則所賦者八字在坐同之、人人以此八字作八韻詩一首也。

また按ずるに、陳後主集に即してこれを考ふれば、頗ぶる古人の分韻の法を得たり。『立春の日に舟を元圃に泛べ、各々一字を賦し、六韻にて篇を成す』の如く、則ち賦する所の韻一字に止まり、外の五韻その自ら用ゐるものに任ずるなり。『獻歲。立春の日に舟を元圃に泛べ、各々六韻を賦す』に云ふが如く、則ち、賦する所の者六字ありて、各人賦する所の韻を以て六韻の詩一首を作すなり。『上巳に元圃の宣猷堂にて禊飲す。同じく八韻を共にす』に云ふが如く、則ち賦する所の者八字坐在在りてこれに同じ、人人この八字を以て八韻の詩一首を作すなり。

以上の資料からわかるように、次韻詩の詩宴の開催者は、梁武帝、陳後主、簡文帝といったいわゆる最高権力者であった。このことから、当時、豪華な詩宴を催すための経済力と、多くの官人や当代一流の文人たちを一堂に集めるための絶対的な権力者の存在が不可欠であったことが窺える。また、そこには、梁武帝、陳後主などの最高権力者を圍繞して多くの官人や文人が集まっており、一つの政治的集団が存在している。特にその参加者にとつては、分韻詩の創作に参加する事は、その集団に属し、服従することをアピールするのに好都合であったのだろう。

一方、初唐における分韻詩の創作も、六朝のそれと同じ傾向を有している。近年発表された張明華氏の「唐代における分韻詩の宴集の変化の特徴」という論考は、初唐の分韻詩について詳しく考察している。

初唐分韻詩的主要場所朝廷或是近臣所設的宴席。以初唐的63次分韻詩題目考察，其中標明“侍宴”的有13次，如許敬宗《五言七夕侍宴得歸衣飛機一首應詔》、虞世南《侍宴應詔賦韻得前字》、許敬宗《五言侍宴莎柵宮應制得情一首》、喬知之《侍宴應制得分字》、宋之問《上陽宮侍宴應制得林字》（一題上有九月晦日四字）等，都是這樣創作的結

果。標明“奉敕”、“應制”的有3次。魏元忠《修書院學士奉敕宴梁王宅 賦得門字》、張說《修書院學士奉敕宴梁王宅 賦得樹字》、宋之問《奉敕從太平公主遊九龍潭尋安平王宴別序》、武三思《奉和宴小山池賦得谿字》就是兩次創作留下的作品。如果就作品而言，則共有四十一首，占初唐分韻詩總數（81首）的一半。

訳文…初唐の分韻詩が行われた場合は、主として朝廷か、或いは近臣が設けた宴席であった。初唐における分韻詩の題目を考察した結果、六十三回の分韻詩の詩宴の中に「侍宴」の場合が十三回あることが明らかとなった。例えば、許敬宗「七夕侍宴 得歸衣飛機 一首 應詔」、「五言 侍宴莎柵宮應制 得情一首」、虞世南「侍宴應詔 賦韻得前字」、喬知之「侍宴應制 得分字」、宋之問「上陽宮侍宴應制 得林字」などはそうした「侍宴」の場で生まれた詩作である。また、「奉勅」「應制」の場合は三回あり、魏元中「修書院學士奉勅宴梁王宅 賦得門字」、張說「修書院學士奉勅宴梁王宅 賦得樹字」、宋之問「奉勅從太平公主遊九龍潭尋安平王宴別序」、武三思「奉和宴小山池 賦得谿字」などがそれにあたる。作品数から言えば、それらの

詩作はのべ四十一首あり、初唐分韻詩の総数（八十一首）の半分を占めている。

氏は、初唐において、分韻詩の詩宴の多くが皇帝或いはその側近が主催したものだと述べている。そして、分韻詩の創作に参加した官人、例えば許敬宗、虞世南、宋之問、魏元中、張説等がいるが、彼らは皆初唐宮廷の高級官吏である。このことから、詩宴の場には、皇帝を中心とした国家最高級の統治集団が形成されていたと考えられる。逆に言えば、官人にとつては、分韻詩の詠進が許されたことは最高権力者からの至高の恩賜であり、その集団の一員として認められた証でもあるのだ。

以上、六朝、初唐の分韻詩の創作については、二つの特徴が挙げられる。第一に、分韻詩は、中国六朝の貴族社会の宴会で生まれ、初唐の宮廷で改めて流行したこと。第二に、六朝、初唐において、権力者による詩宴の開催が分韻詩の創作を成立させる前提となっており、最高権力者を中心とした一つの政治的集団が構成されていたこと。この二つの特徴が、奈良時代に日本官人が新羅使を招待した際、分韻詩の創作形式が選ばれた理由に繋がる。

まず一点目について検討を加える。外交の場では、漢詩文学の創作は、外交官だけではなく、国の体面にも関わる。そのため、日本官人は、初唐の中国で流行っている分韻詩の創作を取り入れることで、自国の文化水準の高さを、新羅使に示そうとしたのではなからうか。小島憲之氏が、養老から天平初年までの後期懷風藻時代を「初唐詩模倣時代」と称することによって初唐文学との緊密な関係を強調しているように、奈良後期の日本漢詩人たちは、六朝時代の影響を受けただけでなく、初唐の文学潮流も敏感に読み取っていたと考えられるのである。

次に、二点目についてであるが、この特徴と併せて、八世紀における日本と新羅との政治的関係についても考察を試みたい。長屋王の邸宅で開かれた詩宴では、天皇大権に属する外交権を有している長屋王と、長屋王を最高権力者と仰ぐ日本官人たち、更には新羅使も同席している。そこで使用されたのは、政治的色彩が極めて濃厚な分韻詩の創作形式であった。すなわち、長屋王を頂点とした政治的な世界に新羅使を取り込んだのである。

現存資料からは、同席の新羅使が分韻詩の創作に参加したか否かは明らかではないものの、いずれの場合においても新羅使は分韻詩の創作が

行われる事に対して決して喜ぶべき立場にあるとはいえない。なぜならば、前述したように、分韻詩の創作形式が行われた場合、そこには絶対的な権威や地位を有する者が存在し、同時に、その権力者も自身が最高地位にあることを自覚しており、ほかの参加者に対して絶対的な優位意識をもっていると考えられるからだ。たとえ新羅使がその分韻詩の創作に参加しなかったとしても、分韻詩の創作が提案された時点で、彼らはすでに宴会に参加した日本官人と同様、日本の官僚システムに属しているものとして日本側に認識されていただろう。また、仮に新羅使が分韻詩の創作に参加していたとすると、それは、新羅使が長屋王を最高権力者として見なしていたことを表わしている。つまり、新羅が日本を宗主国として認めたこととなるのだ。このように考えると、分韻詩創作の場において、長屋王を中心とした政治的集団が新羅使に優位的姿勢を示していることが、より一層明白に窺えてくる。

このことは、八世紀初期における日本と新羅との外交関係や、日本の対新羅観、つまり新羅蕃国視にも裏付けられていると考えられる。八世紀の初葉における日本と新羅の関係は、中国や渤海、百済などが複雑に絡み合った東アジアの政治状況の中で形成された。特に、白村江の戦い

で顕在化した日本と新羅との対立や、その後の新羅と唐との関係の悪化などのさまざまな政治的要素は、新羅と日本の外交関係を複雑にした。養老、神龜年間において、日本と新羅は、互いに警戒しつつも、表面的には友好な関係を保ったのである。その後、天平九（七三七）年の新羅征伐論と天平宝字三（七五七）年の新羅征伐計画は、当時の両国の友好関係が表面的なものに過ぎなかったことを物語るものであろう¹⁰。

また、八世紀初頭における日本は、七世紀後半の律令制国家の形成期を経て、国際意識の基礎である「華夷思想」が対外交渉に大きな影響を及ぼすようになっていた。日本は、新羅を日本の属国と考え、その服従と忠実を確認する儀式を多く行なった。小倉芳彦氏を中心とする歴史学者たちによると、「華夷思想」は、「種族的・異民族的な差別意識を打破し、社会・政治全体のありかた、いわば広義の文化の内容による差別観念である。その基準は「礼」である¹¹」という。「礼」は、「日常の習俗から社会組織・国家体制にまで関わる、聖人が設けた客観的な社会規範に他ならない。行動様式から文物制度に至るまで、実践的・感覚的に表現される。社会の成員を貴賤・長幼・貧富・輕重その他によって分別して序列づけ、そのことによって社会全体の秩序を維持しようとする¹²」。国

家関係の次元でいえば、「礼」は外交上におけるあらゆる儀礼あるいは儀式を含むだろう。こうした儀礼・儀式と「夷華思想」との緊密なかわりについて、石母田正氏は、「儀式が天皇と諸藩との関係を律する重要な側面である。…些細な儀礼をふくめて諸蕃朝貢の一切の儀式の体系は、朝貢国の関係を規制するものが法ではなくて「礼」の秩序であった古代においては、法と同じ意義を担っていた¹³」と明白に指摘している。

こうした「礼」と「華夷思想」との関係性を、長屋王の邸宅の詩宴に置き換えて考えると、漢詩交流の行為もまた、日本と新羅との外交の場においては「礼」を表す実践的なものであったのだろう。その行為および具体的な創作形式は、日本が求めようとした日本と新羅との上下関係を表現できる「礼」に遵わなければならなかったものと想像できる。こうした理由から、その儀礼に相応しい「分韻詩」の創作形式が採用されるようになったのではないかと考えられる。また、それによって、前述したように、分韻詩の形式を通じて日本の新羅に対する宗主的姿勢を示すことも可能になったのである。なお、その後の日本の新羅討伐計画や、七五〇年代に「新羅に対して高圧的な国家的姿勢はピークに達する¹⁴」ことを想起すると、養老・神龜期に、日本が外交の場面で多くの儀礼に

よって新羅の服従と忠誠を確認しようとしたことは、決して不思議ではない¹⁵。要するに、こうした日本と新羅の外交関係、また日本の新羅属国観が、日本官人が分韻詩の創作を行わせた政治的背景だと考えられるのである。

二、渤海使と交わした次韻詩の創作形式

『文華秀麗集』と菅原道真や島田忠臣の詩集を中心に、平安前期における日本官人と渤海使との間に行われた漢詩交流について考察を行い、平安前期においては、次韻詩の創作が盛んに行われていたことが明らかである。次韻詩は、相手の原詩と同じ脚韻をまた同じ順序で用いることが規定されるもので、「歩韻」詩などとも呼ばれている。用例が多数あるため、以下では題目のみを引用する。また、詩作の間に存在する唱和の関係を考慮し、詩作のやり取りを再現するため、詩の組み合わせの形で掲載しておく。

1)

滋野貞主「春夜宿鴻臚。簡渤海入朝王大使。一首」〔《文華秀麗集》37〕

【脚韻】声 情

王孝廉「在辺亭賦得山花。戲寄両箇領客使并滋三。一首」

〔《文華秀麗集》39〕

【脚韻】声 情

2)

菅原「去春詠渤海大使、與賀州善司馬、贈答之數篇。今朝重吟、和典

客国子紀十二丞見寄之長句、感而玩之。聊依本韻。」

〔《菅家文章》104〕

【脚韻】光 郎 章 行

菅原「重依行字、和裴大使被酬之什」〔《菅家文章》105〕

【脚韻】光 郎 章 行

島田「繼和渤海裴使頭見酬菅侍郎紀典客行字詩」〔《田氏家集》108〕

【脚韻】光 郎 章 行

島田「敬和裴大使重題行韻詩」〔《田氏家集》109〕

【脚韻】光 郎 章 行

3)

菅原「醉中脱衣、贈裴大使、敍一絶、寄以謝之。」〔《菅家文章》108〕

【脚韻】情 生

島田「同菅侍郎醉中脱衣贈裴大使。次韻。」〔《田氏家集》112〕

【脚韻】情 生

島田「酬裴大使答詩。本韻。」〔《田氏家集》113〕

【脚韻】情 生

4)

菅原「二十八字、謝醉中贈衣。裴少監、酬答之中、似有謝言。更述四

韻、重以戲之。」〔《菅家文章》109〕

【脚韻】恩 存 門 温

菅原「依言字、重酬裴大使。」〔《菅家文章》110〕

【脚韻】恩 存 門 温

5)

菅原「裴大使留別之什。次韻。」〔菅家文章〕112)

【脚韻】沈 金 林 心

6)

菅原「客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使。自此以後七首、予別奉

勅旨、與吏部紀侍郎詣鴻臚館、聊命詩酒。大使思旧日主客、將賦

交字。一席響心、唱和往復。來者宜知之。」〔菅家文章〕419)

【脚韻】拋 交 巢 嘲

菅原「答裴大使見酬之作。本韻。」〔菅家文章〕420)

【脚韻】拋 交 巢 嘲

7)

菅原「重和大使見酬之詩。本韻。」〔菅家文章〕421)

【脚韻】交 茅 抄 嘲

8)

菅原「和大使交字之作。次韻。」〔菅家文章〕422)

【脚韻】交 膠 筭 敲

9)

菅原「客館書懷、同賦交字、呈渤海副大使。」

【脚韻】茅 交 蛟 筭〔菅家文章〕423)

菅原「和副使見酬之作。本韻。」

【脚韻】茅 交 蛟 筭〔菅家文章〕424)

ただし、当時、分韻詩の創作がすでに消失していたわけでもない。例えば、『菅家文章』における「客館書懷、同賦交字、寄渤海副使大夫」(423)、「夏日餞渤海大使帰、各分一字。探得途」(425)は、分韻詩の形式で創作されたものである。

では、なぜ当時の日本官人は、分韻詩より次韻詩を盛んに作ることので渤海使と唱和したのであろうか。その理由は、一つには中唐における次韻詩の流行に、一つには次韻詩の性格や平安前期における日本と渤海との外交関係にあると考えられる。

まず、一点目について。前掲した詩作からわかるように、次韻詩の創

作は九世紀後半に大幅に増加しはじめた。九世紀後半およびそれ以降は、白居易の漢詩を中心とした中唐文学が日本詩壇へ巨大な影響を与えた時期だとされている。中国の詩話などを見てみると、白居易を中心とした文学集団が、中唐において次韻詩のブームをもたらしたことがわかる。以下に、関連する記述をいくつか引用する。

1) 古人有唱有和、有雜擬追和之類、而無和韻者。唐始用韻、謂同用此韻。後有依韻、然不以次。後有次韻、自元白至皮陸、其体乃全。

(南宋・陸遊『跋呂成公「和東坡尖叉韻雪詩」』)

古人、唱あり和あり、雜擬・追和の類あるも、韻を和することなし。唐の始めに韻を用ゐるは、同じくこの韻を用ゐるを謂ふ。後に韻に依ることあり。然るに以て次がず。後に韻を次ぐことあり。元白より皮陸に至りてその体すなわち全し。

2) 古人酬唱不次韻、此風始盛於元白皮陸。(南宋・嚴羽『滄浪詩話』)
古人の酬唱するも、韻を次がず。この風、始めて元白皮陸において盛んなり。

3) 古人和意不和韻、故篇什多佳。始於元白作俑、極於蘇黃助瀾、遂成芸林業海。(清・賀裳『載酒園詩話』補遺)
古人、意に和するも、韻に和せず。故に篇什に佳多し。元白作俑において始まり、蘇黃助瀾において極まり、遂に芸林、業海を成す。

4) 古人同作一詩、不必同韻。即同韻、亦在一韻中、不必句句次韻也。自元白創始、而皮陸倡和、又加甚焉。(清・沈德潛『說詩晬語』(統修四庫全書に收録))
古人、同じく一つの詩を作るも、必ずしも韻を同じくせず。即ち韻を同じくし、また一韻の中にあるも、必ずしも句句韻を次がざるなり。元白より創始し、皮陸倡和し、また甚しきを加ふ。

これらの記述では、白居易、元稹が次韻詩の創作を盛んに行い、大きく開花させたことが、次の時代に次韻詩の流行を齎したことについては、共通認識を示している。元稹自身も、「上令狐相公詩啓」のなか

で自分と白居易が次韻詩の流行を起こしたことについて言及している。

稹與同門生白居易友善。居易雅能為詩、就中愛驅駕文字、究極聲韻、或為千言、或為五百律詩、以相寄。小生自審不能以過之、往々戲排旧韻、別創新詞、名為次韻相酬、蓋欲以難相挑耳。江湖間為詩者、復相倣。力或不足、則至於顛倒語言、複重首尾、韻同意等、不異前篇。亦自謂為元和詩體。（元稹「上令狐相公詩啓」）

稹、同門生もんせいの白居易と友として善し。居易、雅もとより能く詩を為すより能く詩を為り、なかんづく文字を驅駕するを愛し、声韻を窮極して、或いは千言を作り、或いは五百言律詩を為り、もって投寄せらる。小生自ら審つまびらかにするに、以て之に過ぐる能はず。往々戯れに旧韻を排し、別に新詞を創り、名づけて次韻相酬と為す。蓋し難きを以て相ひ挑いどまんと欲するのみ。江湖こうこの間に詩をする者、復た相ひ倣ほうぎようす。力あるいは足らざれば、則ち語言を顛倒し、首尾を複重ふくちゆうし、韻同じく意等しく、前篇ぜんぺんに異ならざるに至る。亦

た自ら元和詩体として謂ふ。

（元稹「令狐相公に詩を上まつる啓」）

この記述からわかるように、元稹は、白居易の声韻の使い方が巧みであるため、白居易と声韻を駆使する技術を競おうという意欲のもとで「次韻」という唱和詩の形式を作り出した。その形式は当時の詩人たちによって争うようにして模倣され、元稹はそれを「元和詩体」と名づけた。

白居易の「白氏集後記」によると、元和年間に元稹と白居易の間に次韻詩などの唱和が頻繁に行なわれ、最終的に『元白唱和因継集』一七巻が結集されたこともわかる。卞孝萱氏は、元稹から白居易への次韻詩が五十五首、白居易から元稹への次韻詩が二十六首あると指摘している¹⁶。恐らく同詩集では、詩人二人の贈詩（唱詩）と答詩（和詩）が組み合わせられた形で編集されているのであろう¹⁷。

また、白居易自身も「白氏集後記」において「日本新羅諸国及両京人家伝写」と記し、自分の詩集が日本、新羅などの東アジア諸国に流伝していることを述べている。菅原道真、島田忠臣が白居易の詩集を熟知していることは、贅言を要しない。また、裴頴が白居易を愛読しているこ

とは、以下の記述から看取される。

冬、渤海入貢す。使人は即ち裴頌、字は文藉也。是より先、元慶四年、來朝す。諸儒、鴻臚館に往き之を見る。頌、菅公の詩稿を閲し、称し、當世の白樂天と曰ふ。爾後、菅公の詩益々工。是に至て頌、又、之を閲て愈々嘆美を加ふ。『増補点註国史略』（卷第二）¹⁸

白居易を中心とした文学集団による次韻詩の流行は、日本官人が次韻詩を用いて渤海使と唱和したという行為の文学的背景だと考えられる。

次に、日本官人が渤海使と次韻詩の応酬を交わしたもう一つの背景、即ち平安前期における日本と渤海との外交関係と結びつけて検討を試みたい。

白居易と元稹との関係、また次韻詩の創作の目的を考えると、次韻詩が主として友人と喜怒哀楽を共有し、詩の創作技術を互いに競うための一種のコミュニケーションの手段であることは明らかである。白居易と元稹に関しては、彼らの交友関係は古くから知られている。次韻詩は、相手の詩と同じ韻字を用いることが条件であるため、地理的に遠く隔た

っている時でも、相手と共通の文学的空間を創出することを可能にする創作形式として使用されていたのであろう。一方、次韻詩は、創作技術を競う道具でもある。前述のように、元稹が最初に白居易へ次韻詩を送った理由は、創作の技術を競おうとしたためであった。白居易も「和微之詩二十三首 並序」において、そうした競争意識を表わしている。

意欲定覇取威、置僕於窮地耳。…今足下果用所長、過蒙見窘。然敵則氣作、急則計生。…以足下来章惟求相困。（白居易「和微之詩二十三首 並序」）

意ふに覇を定め威を取り、僕を窮地に置かんと欲するのみ。…今ま足下、果して長ぜる所を用ひて、過ちて窘^{くろ}しめらるるを蒙^{かうむ}る。然れども敵するときは則ち氣作り、急なるときは則ち計生ず。…以ふに足下の来章、惟だ相ひ困しめんことを求む。

こうしてみれば、次韻詩の創作を行う詩人たちは、友情を語り、詩の創作技術を向上させるといった目的を有しており、かれらの関係は、政治的な上下関係ではなく、相対的に対等な関係であったと考えられる。

恐らく菅原道真や島田忠臣、裴頌もまた、中唐の文学集団における次韻詩のこうした性格を理解していたのであろう。実際に、菅原道真らと裴頌との次韻詩にも、こうした詩の技を競おうとした側面と、友情を深めようとした側面が共に存在している。

次韻詩によって友情を深めるという側面についてであるが、詩作の内容を読むと、元慶七年に、菅原道真と裴頌との交流の中で、友情が芽生えており、知り合える関係になったことがかわる¹⁹。用例が多いため、そのうちの一つをあげることに止める。以下の一首である。

酬裴大使留別之什。次韻。

菅原道真

| | |
|---------|-----------------------------------|
| 交情不謝北溟深 | 交情は北溟の深きに <small>かたがひ</small> 謝せず |
| 別恨還如在陸沈 | 別恨は還りて陸沈に在るが如し |
| 夜半誰欺顔上玉 | 夜半 誰か欺かむ 顔上の玉 |
| 旬餘自斷契中金 | 旬餘 自らに断つ 契中の金 |
| 高看鶴出新雲路 | 高く看る 鶴の新なる雲路に出でなむことを |
| 遠妬花開旧翰林 | 遠く妬む 花の旧き翰林に開かむことを |
| 珍重歸郷相憶所 | 珍重す 歸郷して相ひ憶はむ処 |

一篇長句惣丹心 一篇の長句 惣べて丹心 『菅家文草』112

一方、詩の技を競おうとした側面については、以下のことから看取されよう。裴頌が日本に到着する以前に、彼が「七歩あるく」ことに詩を一篇賦す」漢詩の名人であるという逸話がすでに日本に伝わっていた。そのため、日本政府は、詩文に長じる菅原道真らを使節団の応接に担当させたのである。裴頌もまた、菅原道真の詩作を読んで白居易の詩文に似ていると評価した。つまり、菅原道真らも裴頌も、詩作の優劣をかなり意識して、詩の応酬を行つたのである。

しかしながら、個人の運命は常に国家と緊密に繋がっているため、外交の場では、個人の言動と国家の外交姿勢との関係を見落とすわけには行かない。菅原道真と島田忠臣、裴頌との間における次韻詩の応酬の成立は、日本と渤海との親密な外交関係という政治的背景のもとに存在している。

日本と渤海との外交関係は、新羅の場合と異なり、対立などといったマイナス要素が見当たらない。八世紀後半からは日本の渤海付庸、属国観にかなり変化が起つたことも指摘されている。

まず、八世紀後半に日本側が渤海に舞姫を送ったことは、日本が単に渤海を属国、付庸国と見なしていないことを思わせる。この時期（延暦期）の渤海観については、保科富士男氏の「古代日本の対外意識―相互関係をしめす用語から―」（田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館、一九九五年）、重松敏彦氏の「平安初期における日本の国際秩序構想の変遷―新羅と渤海の位置づけの相違から―」（『九州史学』一一八・一一九合併号、一九九七年）により、渤海と日本を対等とする意識が窺えたと指摘されている。

また堀井佳代子氏の考察によると、平安前期の弘仁年間における日本の対渤海観の変化は、日本の渤海への国書と儀式書からも看取される。「国書の中で華夷秩序を強調しているのは、宝亀、延暦年間のみであり、弘仁年間以降の国書になるとほとんどそのような強調はなくなる」²⁰という指摘は示唆に富んでいる。

さらに、九世紀後半の日本と渤海との関係については、多くの先行研究によって明らかにされているように、八世紀前半の東アジアの国際緊張関係下で成立した軍事同盟的な関係から、経済的・儀礼的外交へとすでに変化していたのである。「この七二七年に始まった日本国と渤海国と

の関係は、最初は、対唐、对新羅のための軍事同盟的な要素をもっていたとされている。これは一面では六六三年の白村江の戦いの時点の、唐・新羅連合と高句麗・百濟・日本連合のブロック対決の構図の再現のように見えるが、やがて東アジア世界の安定とともに、八世紀の終わり頃から、日本国と渤海国との関係も、経済と通商を中心としたものに変容していく²¹。

こうして考えると、九世紀後半における日本が、渤海をただ属国として見なしているとは決していえない。日本と渤海は、友好的な関係、強いて言えば比較的に対等的な関係にあったと言ってよからう。

こうした両国の関係を背景として、菅原道真、島田忠臣と裴頌との間で対等な関係が成立したわけである。そして、菅原道真、島田忠臣と裴頌は、官位においてもさほど大きな差がなかったため、対等かつ友好的な人間関係はより成立しやすかったのである。さらに、詩宴では、日本官人も渤海使も、自国の文化水準の高さを誇示し、なおかつ相手への友好の意を示すために、それに相応しい漢詩の創作形式を必要とするようになった。こうした状況の中で、最も適切な漢詩の創作形式として使用されたのが次韻詩であったと考えられる。

おわりに

奈良時代、平安前期における日本の新羅・渤海との外交を背景に、漢詩は、意志疎通や感情交流の道具として用いられた。その創作形式は中国の文学潮流の変遷に大きく影響されていると同時に、奈良末期における日本と新羅、平安前期における日本と渤海との関係にも深く関わっているのである。長屋王の邸宅での新羅使を招待した詩宴において、日本官人が長屋王を中心にして分韻詩を詠じた風景は、中国六朝・初唐の宮廷文学の詩宴の雰囲気容易に想起させている。彼らはほぼ同時代の初唐の中国で流行っている分韻詩の創作を取り入れることで、自国の文化水準の高さを新羅使に示そうとしたと考えられる。また「分韻詩」という政治的上下関係を強く意識した創作形式には、当時の華夷思想の下で生じてきた日本の新羅に対する属国観が明白に窺える。一方、平安前期、特に九世紀後半に至り、日本と渤海との外交の場においては、次韻詩による漢詩交流が盛んに行なわれた。このことの直接の理由は、白居易・元稹を中心とした中唐文学集団による次韻詩の流行にあるのだが、日本

と渤海との比較的对等で友好的な関係もまた、次韻詩の創作を可能にした要因であるという事実は見落とすことができない。

奈良、平安前期における外交の場において、日本漢詩は、自国の文化の国際化や高度な水準を誇示した道具でありながら、日本をめぐる外交状況も反映している鏡のような存在でもあった。

〔注〕

- 1 この課題に関しては、小島憲之「奈良・平安初頭文学と渤海文学との交流」『比較文学』日本比較文学会（通号三）一九六〇年九月）、石母田正「詩と蕃客」『日本古代国家論 第一部』『天皇と「諸藩」附論』所収。岩波書店、一九七三年）、村田正博「上代の詩苑―長王宅における新羅使饗応の宴」『人文研究』大阪市立大学大学院文学研究科紀要』三六（八）、大阪市立大学文学部、一九八四年）、遠藤光正「長屋王の詩歌とその創作時期について」『東洋研究』（通号九五）大東文化大学東洋研究所、一九九〇年三月）、太田英比古「菅原道真と渤海使接待」『政治経済史学』（通号三八六）日本政治経済史学研究所、一九九八年十月）、福田俊昭「長屋王の私邸における詩宴詩（上）」『東洋研究』一五六、二〇〇五九月）、

福田俊昭「長屋王の私邸における詩宴詩(下)」、『東洋研究』一六〇、二二〇〇六年七月)、などの論考が挙げられる。中でも、村井章介氏は『東アジア往還 漢詩と外交』において、「漢詩は、東アジアの外交において、面談や漢文外交文書ほど直接的ではないにせよ、意思疎通の重要な媒介でありつづけてきた。詩の宴は、時に外交担当者としての教養のほどが試される場であり、またときに異なる民族が心情を通わせあえる場だった。逆に言えば、漢詩を産みだす母胎の一つが外交だった。これは漢詩と外交の関係の前近代を貫通する相だが、外交のありかたの変化にともなうて変位してゆく相もあつた」と述べており、漢詩と政治との関連を考察する上での代表的な認識を示している。

2 いずれも新羅使の帰国を送った年である。山田三方の詩作の成立時期については、小島憲之氏はそれを神龜三年とし、鈴木靖民氏は「養老期の日羅関係」(『國學院雜誌』六八(四)、國學院大學綜合企画部、一九六七年四月)において養老七年だと指摘している。また、前掲注1福田俊昭「長屋王の私邸における詩宴詩(上)」では、山田三方と調忌寸古麻呂の詩作の成立時期を養老三(七一九)年とし、背奈王行文、刀利宣令、下毛野虫麻呂、長屋王、安倍朝臣広庭、百濟公和麻呂、吉田連宜、藤原総前の詩作の成立時期を養老七年としている。

3 前掲注1石母田正『日本古代国家論 第一部』、『古代の日朝関係』「第三章 律令国家への転換と東アジア」を参照。

4 前掲注2鈴木靖民「養老期の日羅関係」66頁に、「長屋王は『統紀』、『公卿』によると、…養老二年三月には大納言、同五年正月には従二位右大臣に就き、十月元明太上天皇崩御の際には藤原房前(総前)とともに後事を託せられ、名実共に藤原不比等なきあとの政界に大きな発言を有する。いわゆる長屋王時代を出現するのである。その後、聖武天皇の神龜元年二月正三位に進み、左大臣となる。この閱歷を概観すると、別に小島氏のいわゆるごとく左大臣就任後でなくとも、すでに養老五年には右大臣として知太政官事舍人親王に並んで朝廷の第一人者となっていたのであるから…」とある。

5 『南史』李延寿 中華書局、一九七五年

6 『梁詩』(卷二三)に「暮遊山水応令賦得磧字詩」と記している。『文苑英華』(卷一七九)や、『詩紀』(卷八〇)にも見られる。応令詩、皇太子の命令によって作った詩作。

7 張溥輯『漢魏六朝百三名家集』第八四冊『陳後主集』 章經濟堂重刊、光緒十八(一九八二)年

8 『古詩紀』では、「座に顧野王、陸瑒、姚察等四人有りて」と記している。

9 貞凡・顧馨・徐敏霞點校、俞樾『茶香室叢鈔』(中華書局、一九九五年) 四(卷十三)における「古人分韻法」の条。

10 新羅征討計画に関しては、河内春人「詔勅・処分に見る新羅観と新羅征討政策」(『駿台史学』第一〇八号、明治大学史学地理学会、一九九九年

一二月）を参照。

1 1 前掲注1 石母田正『古代の日朝関係』「三章 律令国家への転換と東アジア」477頁。

1 2 小倉芳彦「華夷思想の形成」(『中国古代政治思想史研究』青木書店、一九七〇年)

1 3 前掲注1 石母田正『古代の日朝関係』343頁。

1 4 前掲注1 石母田正『古代の日朝関係』「三章 律令国家への転換と東アジア」479頁「新羅壻国視の実態と意義」を参照。

1 5 前掲注1の『古代の日朝関係』482頁に「六八八、八九年といえ、新羅は朝鮮半島を統一し、地方を政治的・軍事的に編成し、専制王権による官僚制国家の形成を終えた時期である。：新羅と並行して国家形成を進めてきた日本が、この時代から、新羅王との上下関係を 問題視する必然性もある」とある。

1 6 卞孝萱「唐代次韵詩為元稹首創考」(『晋陽学刊』一九八六年四期)

1 7 元稹が越州刺史、白居易が蘇州刺史を務めた九世紀二〇年代に編集した『元白唱酬集』十六卷、『因継集』三卷(太和二(八二九)年)などはずでに逸失してしまったが、花房英樹氏の作業により、『元白唱和詩』の全貌が復元されている。

1 8 岩垣松苗編『増補点註国史略』(巻第二) 甘泉堂、一八七七年六月。

1 9 元慶七年に裴頌が渤海に帰国した後に、菅原道真は、「見渤海裴大使真

図、有感」(123)を作り、海を隔てる渤海にいる裴頌への思いを詠じた。

2 0 堀井佳代子「平安初期における渤海観―国書と儀式書の検討を通して―」(『文化史学』六三、文化史学会、二〇〇七年一月) 20頁。

2 1 上田雄、孫栄健共著『日本渤海交渉史』(六興出版、一九九〇年二月) 20頁。

附節 渤海使関係詩注釈稿

大江朝綱「裴大使重押_二蹤字_一、見_レ賜_二瓊章_一。不_レ任_二諷味_一、敢以酬答。」〔扶桑集〕七二

裴大使重押蹤字、見賜瓊章。不任諷味、敢以酬答。 江相公

裴大使重ねて蹤の字を押して瓊章を賜る。諷味するに任へず敢へて以

て酬答す。 江相公

忽望仙楼十二重 忽ち_{たちま}に望む_{のぞ} 仙楼十二重_{やまとうじゅうにちよう}

馬頭連袂又遭逢 馬頭_{ばとう} 袂_{たもと}を連ねて又遭ひ逢ふ_{またあ}

今日使主並馬詣闕。故云。 今日使主、馬を並べて闕に詣づ。

故に云ふ。

占雲難伴荀鳴鶴 雲_{くも}を占_{うらな}ふに伴_{ともな}ふこと難_{かた}し 荀鳴鶴_{じゆんかくめい}

摘藻多慙范彦龍 藻_{あや}を摘_のぶるに慙_はづること多_{おほ}し 范彦龍_{はんげんりゆう}

詞露瑩珠先点草 詞露_{しろ} 珠_{たま}を瑩_{みが}きて 先_まづ草_{くさ}に点_{てん}す

筆鋒淬劍本藏松 筆鋒_{ひつぽう} 劍_{つるぎ}を淬_{にら}ぎて 本_{もと}より松_{まつ}に藏_{ぞう}す

憐君累代遥輸信 君_{あは}を憐_{いは}れむ 累代_{るいだい} 遥_{しん}かに信_{いた}を輸_す

竹帛応垂不朽蹤 竹帛_{ちくはく} 応_{まさ}に不朽_{ふきゆう}の蹤_{しよう}を垂_たるべし

【平仄】

○●○○○●●◎
○○○●○○●
○○○●○○●
○○○●○○●
○○○●○○◎

【韻字】

重・逢・龍・松・蹤 (上平二 冬)

【詩題】

延喜十九(九一九)年十一月に裴瑋が渤海使として再度来朝し、翌年五月に入京した際、掌客使の大江朝綱が裴瑋のために詠んだ唱和詩の一首である。

裴瑋は延喜八年・同十九年・延長七年の三回にわたり、それぞれ渤海使(前二度)・東丹国使として来朝した(渤海国を滅ぼした東丹国の大使として来着したため、その入京を許されなかった)。大江朝綱の裴瑋との親交は、延喜九年五月に鴻臚館において諸文人や掌客使と共に裴瑋一行

の帰郷を餞別した時から始まったのではないかとされている（『本朝文粹』「夏夜於鴻臚館餞北客序」）。また裴瑋大使の二度目の訪日にあたり、大江朝綱は延喜二十年四月二日に掌客使に任ぜられたため（『貞信公記』〔大日本古記録8〕七二頁）、二人の間で更なる交流が行なわれたのは想像に難くない。これらを当該詩の首聯「忽ちに望む 仙樓十二重。馬頭 袂を連ねて又遭逢す」と、その割注の「今日使主、馬を並べて闕に詣づ」と合わせて考えると、当該詩の創作背景は、延喜二〇年五月に裴瑋を中心とした渤海使たちが大江朝綱に率いられた二度目の入京に求められる。

当該詩と同時期に作られたものには、『扶桑集』の同じ部立の「蕃客贈答」における次の三首があげられる。

六九「書懷呈渤海裴大使」 江相公

煙浪雲山路幾重 十三年裏再相逢 虚声我類羊公鶴 遠操君同馬岌龍

雖喜交情堅似石 更怜使節古於松 両回入覲裴家事 饒趣芳塵歩旧蹤

七十「和裴大使見酬之什。次韻」 江相公

想彼煙霞閑數重 停盃還喜与君逢 夢中艷藻雖吞鳥 筆下彫雲不讓龍
底徹交斟秋岸水 盖傾心指暮山松 江家昔有忘年契 莫怪鴻臚暫比蹤

七一「重依蹤字和裴大使見酬之什」 江相公

冥溟淼淼樹重重 鰲抃応誇促膝逢 華表声高先聴鶴 葛陂鱗化再看龍
遠排波母青山霧 近対東王紫麓松 使範頻伝詩独歩 飛觴還祝後來蹤

この三首は、当該詩（七二番）の前に収録されており、また当該詩と同じ韻字を同じ順序に、即ち一・二・四・六・八句目の結びにそれぞれ「重・逢・龍・松・蹤」という韻字を用いている。詩題から考えると、大江朝綱が六九番「懷こころを書して渤海裴大使に呈しめす」に始まり、裴瑋との詩作の唱和を行なったことがわかる。七十番「裴大使酬いられし什に和す」と、七一番「重ねて蹤字に拠りて、裴大使酬いられし什に和す」は、裴瑋からの一回目の唱和詩への贈答であり、七十二番の当該詩は、裴瑋からの二回目の唱和詩に対しての酬答詩ではないかと考えられる。ただし、当該詩の創作日時についてはまだ詳らかにされていない。

裴瑋一行の滞京中の日程は、『日本紀略』『扶桑略記』に記載されている。前者の主要記事を以下に引用しておく。

延喜二十年五月八日己巳 渤海入覲大使裴瑋等廿人著^二於鴻臚館^一。

同十一日壬申 渤海大使裴瑋於^二八省院^一、進^二啓并信物^一

等^一。

同十二日癸酉 天皇御^二豊楽院^一。賜^二饗宴於渤海客^一。

同十六日丁丑 於^二朝集堂^一、勞饗^二於渤海客徒^一。

同十八日己卯 大使裴瑋帰郷。太政官賜^二返牒^一。

これらの記事から、裴瑋一行が五月八日に入京し、十一日・十二日・十六日に、それぞれ大内裏の「八省院」「豊楽院」「朝集堂」に参上したことがわかる。

当該詩の割注に「今日使主、馬を並べて闕に詣つ」とあり、裴瑋一行が朝綱と共に騎馬で行進し宮城に参上したことが看取できる。しかし、その「闕」は城闕(都の「闕」)であるか、あるいは宮闕(大内裏の「闕」)であるかが問題である。また、それが大内裏の闕であっても、彼らの向かう場所が「八省院」「豊楽院」「朝集堂」の何れなのか、直ちには判断できない。そのため、割注の「今日」が何日に当たるのかを明らかにするためには、なお検討を要する。

【語釈】

裴大使重押蹤字、見賜瓊章。

○裴大使

裴瑋のこと。「菅原淳茂「初めて渤海使裴大使に逢ひて感有りて吟ず」『扶桑集』六十四」(田村航)の注釈における「裴大使」の項目を参照されたい(『早稲田大学日本古典籍研究所年報』第五号、二〇一二年)。

○見賜

「見」は受動を表す助辞、動作の主動者に対する敬意を表す。『経国集』に良岑安世「七言。奉和聖製 聞右軍曹貞忠入道見賜。一首」と見え、「見賜」は「賜はせらる」と訓読されている。しかし、当該詩では、最高敬語「賜はす」+「らる」と読むと、裴大使に対して敬い過ぎると思われるため、「賜る」と読んだほうが妥当であろう。一方、中国の詩作では、題目に「見賜」の表現が用いられたものは見当たらないが、嚴維の「奉和劉祭酒傷白馬」には「棣華恩見賜 伯舅礼仍崇」と見える。

○瓊章

『詩経』・衛風(毛亨伝)に「瓊、玉之美者」と見えるように、瓊章は玉のように美しい文章を意味する。唐代の詩作に「瓊章」の表現が散見

される。

皎然「五言。答裴集、陽伯明二賢各垂贈二十韻。今以一章用酬兩作」

に「何似双瓊章 英英曜吾手」と、王光庭（「奉和聖製送張說巡辺」に「瓊章九霄發 錫宴五衢通」と、宋之問（六五六―七二三）「奉和春日翫雪扈制」に「瓊章定少千人和 銀樹長芳六出花」と、劉禹錫（七七二―八四二）「馬大夫見示浙西王侍御贈應詩、因命同作」に「秣陵從事何年別 一見瓊章如素期」などとある。

一方、日本の詩作では、三宮「翫月」（『本朝無題詩』）に、「心情先動瓊章客 容色半銷錦帳郎」と見える。また、菅原道真「有勅、賜視上巳桜下御製之詩、敬奉謝恩旨」に「暫看桜也惜春 紅粧写得玉章新」とあるように、「瓊章」と相似した「玉章」の表現が見られる。

不任諷味、敢以酬答。

○ 不任

白居易「慈烏夜啼」（『白氏長慶集』）に「応是母慈重 使爾悲不任」とみえるように、耐えられないことを意味する。

滋野貞主の「和澄上人題長宮寺二月十五日寂滅会。一首」（『経国集』七三）に「一子悲難竭 三車感不任」と、都良香の「為尚侍源朝臣議職

第一表」（『都氏文集』）に「妾之本意於是遂焉。不任慙款之至」と見える。

○ 諷味

吟味すること。詩歌などを吟じ、その趣を味わうこと。

『顔氏家訓』・文章篇に「劉孝綽當時既有重名、無所与讓、唯服謝朓、常以謝詩置幾案間、動靜輒諷味」と、『世説新語』に「諷味遺言、不如親承音旨」と、『文心彫龍』・弁騷に「楊雄諷味 亦言体同詩雅」と、殷璠の『河岳英靈集』七一四―七五三年）に「国輔詩、婉孌清楚、深亘諷味」と見える。

田坂順子氏の校訂によると、内閣文庫蔵の林大学頭・昌平坂学問所本、祐徳文庫蔵本、松浦史料博物館蔵本が「諷詠」と表記するのに対して、彰考館・静嘉堂文庫・京都大学附属図書館本は「諷味」とし、板本群書類従では「諷詠」の校異として「諷味」を示す（『扶桑集―校本と索引―』権歌書房、一九八五年五月）。本稿では二つの理由に基づき、「諷味」の方を適当と判断した。

一つは、田坂順子『扶桑集』伝本考」（『中古文学』二十八号、昭和五十六年十一月）で、彰考館蔵の『扶桑集』が古態を残す善本と見なされているからである。

もう一つは、題目「裴大使重押蹤字 見賜瓊章 不任諷味（詠） 敢以酬答」の解釈に関する問題である。題目の主語「裴大使」は「見賜瓊章」までで、「不任諷味（詠）、敢以酬答」以下の主語は「私」つまり大江朝綱に変化する。「裴大使重押蹤字 見賜瓊章」は、裴大使は再び蹤字で押韻して、美しい詩作を贈ってくださったという意味である。もし「裴大使」が「不任諷味」までかかるのならば、「裴大使は詩を詠じることに耐えられない」という意味になり、友好を深める詩作の唱和として相応しくないうえ、次の「敢以酬答」とのつながりが不自然になってしまう。そのため、「不任諷味（詠）」の主語は「私」が妥当だろう。なお、前後の文脈から、「私」は裴大使から美しい詩作を賜ったため、裴大使に詩を酬いる際に、その詩作を「諷味」したと伝えた方が礼に叶い、自然なやり取りでもある。（私は裴大使の詩作を）深く味わうと（感きわまり）耐えられなくなり、僭越ながら唱和させていただく」という意味に理解したい。

忽望仙楼十二重

○ 仙楼 十二重

『史記』（卷二十八）「封禅記」に「黄帝時為五城十二楼。以候神人。」

と、『漢書』・郊祀志・下に「五城十二楼」とあり、その顔師古註に「応劭曰、崑崙玄圃五城十二楼、仙人之所常居」とあるように、神仙の住む十二の楼台のことである。当該詩では、都の宮城を指し、その美しさや荘重さを表わしている。「十二楼」の表現を「十二重」に変えたのは、大江朝綱が次韻詩の規則に従い、一句目の結びに「重」の韻字を使うためであろう。

また、仙楼・十二楼に関する表現はほかにも散見する。葛洪『抱朴子』・祛惑に「又見崑崙山上一面輒有四百四十門、門広四里、内有五城十二楼」と、『芸文類聚』（卷六三）「楼」に「十洲記曰。崑崙山有十二玉楼」と、王勃（六五〇—六七六）「梓州鄆郡兜率寺浮図碑」（『王子安集』卷十五）に「若夫仙楼白玉、窈冥昆閬之墟」と、李白「経乱離後天恩 流夜郎憶旧遊書懷贈江夏韋太守良宰」に「天上白玉京 十二楼五城」と、王昌齡（六九八—七五五）「放歌行」に「南渡洛陽津 西望十二楼」とある。

一方、日本の典籍には次の用例が見られる。『和漢朗詠集』に収められた中国唐代詩人の張翥の「閑賦」に「宮車一去。楼台之十二空長」と、都良香「神仙」（『都氏文集』）に「五城霞峙、十二楼之構挿天」と、藤原茂明の「月下言志」（『本朝無題詩』卷三）に「辺城有雪三千里 仙洞無雲十二楼」と見える。

○ 馬頭 連袂

「連袂」は字義通りだと、袂が触れ合うことである。潘安仁「籍田賦」
〔文選〕に「躡踵側肩、揜裳連袂」と、劉禹錫（七七二―八四二）の
「踏歌行四首」に「春江月出大堤平 堤上女郎連袂行」と見えるように、
大勢の人中で互いに袖が触れ合う状態を表わす。また袖が触れ合うほど
接近するところから転じて、同じ目的で共に行動する意味にも使用され
る。柳宗元（七七三―八一九）「与崔策登西山」に「連袂度危橋 縈廻出
林杪」とあるように、「連袂」は柳宗元が友人の崔策と共に橋を渡る様子
を示している。

延喜八年に渤海の使節たちは掌客使にひきいられて騎馬行進で入京す
る際に、豊楽院に見物するための幕所が設けられたという記述があり、
儀式の盛大さを思わせる（上田雄・孫栄健『日本渤海交渉史』六興出版、
一九九〇年二月）。さらに『貞信公記』の延喜二十年五月五日条に「御覧
左右馬寮御馬」と、同七日条に「御覧陽成院及諸家馬」とあり、延喜二
十年にも同様の儀式が行なわれたことがわかる。

そのため、当該詩の「馬頭に袂を連ぬ」は、渤海使節と彼らを迎える
日本の官人が共に騎乗して宮城に参上する儀式が盛大に行なわれた様を
想像させる。

○ 又遭逢

再び会うこと。延喜八年に次ぐ裴瑋の二度目の来朝で再会したことを
言う。不意に会うという意味の「遭」に重きを置くと、渡海の危険を顧
みずに再び来朝した裴大使と再会した時の感歎を表わしていると解釈す
ることもできよう。実際、同時期の詩作「書懷呈渤海裴大使」において、
朝綱は「煙浪雲山路幾重 十三年裏再相逢」と詠じているのだから、不
自然ではない。

今日使主並馬詣闕。故云。

○ 闕

中国で宮城門外に二つの台を立て、上に楼観（見物の高殿）を乗せた
門。『史記』高祖本紀に「蕭丞相、宮作未央宮、立東闕・北闕・前殿・武
庫・太倉。高祖還、見宮闕状甚」とある。

また、『詩経』鄭風「子衿」に「挑兮達兮、在城闕兮」とあり、その孔
穎達の疏に「謂城上之別有高闕。非宮闕也」とあるように、初唐では「闕」
は城闕より宮闕を指すのが通常である。だが、王勃「送杜少府之任蜀州」
に「城闕輔三秦 風煙望五津」と見えるように、都の長安を指す場合も
ある。

菅原道真「八月十五日夜、思旧有感」(『菅家文章』二九八)に「如何露溢思親処 況復潮寒望闕時」と、「紋意一百韻。五言」(『菅家後集』四八四)に「臨岐腸易斷 望闕眼將穿」と見える。

占雲難伴荀鳴鶴

○ 占雲

『周礼』の「春官・保章氏」に「以五雲之物、弁吉凶、水旱降豐荒之祲象」と、梁元帝『職貢図序』に「占雲望日、重詎至焉」(『藝文類聚』卷五五)と見えるように、雲氣によって吉凶を占うことを意味する。

『日本後記』延暦十八(七九九)年四月己丑条の記事によると、渤海国におくった国書にもこの表現が使用され、「占雲之詎交肩。驟水之貢繼踵」とある。また、日本の詩作では、桑原腹赤「和渤海入覲副使公賜對龍顔之作一首」(『文華秀麗集』三八)に「占雲遙驟水、就日遠朝天」とこの表現が見られる。

次の詩語の「荀鳴鶴」と合わせて考えると、当該詩での「占雲」は、「雲氣を見て吉凶を占う」より転じて、事態の展開・変化に対応して、物事を決定する能力を意味するのではないか。

○ 荀鳴鶴

西晋の荀隱。字は鳴鶴。潁川(現在の河南省の平野部)の人。陸雲(二六一—三〇三。字は士龍)との詩文応酬の逸話は有名である。『世說新語』排調(二十五)などにその逸話が以下のように記されている。

荀鳴鶴、陸士龍二人未相識、俱会張茂先坐、張令共語、以其並有才、可勿作常語。陸举手曰、雲間陸士龍。荀曰、日下荀鳴鶴。陸曰、既開青雲睹白雉、何不張爾弓、布爾矢。荀答曰、本謂雲龍駢駢、定是山鹿野麋。猷弱弩彊、是以發遲。張乃撫掌大笑。

荀鳴鶴、陸士龍の二人、未だ相識らず、俱に張茂先の坐に会す。張共に語らしめ、其の並びに才有るを以て、常語を作すこと無かる可からしむ。陸手を挙げて曰く、雲間の陸士龍。荀曰く、日下の荀鳴鶴。陸曰く、既に青雲を開きて白雉を睹る、何ぞ爾が弓を張り、爾が矢を布せざる。荀答へて曰く、本より雲龍は駢駢たりを謂ひしに、定めてこれ山鹿野麋。猷は弱くして弩は彊し、是を以て発すること遅し。張は乃ち掌を撫して大いに笑ふ。

荀隱・陸雲は張茂先の席で初めて会う時に、張茂先にありきたりの言葉で話してはいけないといわれたため、二人は機智に富んだ会話を交わした。陸雲は字が士龍であり、また出身地の華亭は雲間とも称されるため、「雲間の陸士龍」と先に自己紹介した。その「陸士龍」の発音は「露世

龍」と同じであるため、「雲間に世の龍は露はる」という意味にも掛けて
いる。荀隱はこれらを読み取り、「日下の荀鳴鶴」と詠じた。彼の出身地
は、現在の河南省の平野部に位置し、都の洛陽（現在の河南省）に近い
ため、「日の下」と言った。「鳴鶴」は彼の字であり、「荀鳴鶴」は「尋名
鶴（名鶴を尋ぬ）」に掛けている。こうして荀隱は自分より年長で名高い
陸雲に見事に応酬した。さらに、陸雲の「青雲を開いて白い雉を目にし
たからには、どうして君の弓を引き絞り、君の矢をつがえようと思ない
のか」という揶揄に対して、「これまで雲間の龍は強く盛んなものと思っ
ていたのに、なんとまあ山野の鹿であったとは。獲物は弱く、いし弓は
強い。だから、矢を発することをためらったのです」と陸雲の話を受け
ながら、陸雲をやりこめた。

この逸話から荀鳴鶴が文学の才に富み、柔軟な対応に長じていたこと
が窺い知れる。当該詩では、こうした荀鳴鶴の典故を背景にし、機知に
溢れた裴大使が、臨機応変に詩文唱和を行なったことを表わしているの
だろう。

摘藻多慙范彦龍

○ 摘藻

『廣韻』に「摘 舒也」とあり、『類聚名義抄』観智院本では「摘」の
訓として「ノフ」と見えるため（仏下、二十八ウ）、「摘」は「のべる」
という意味になる。「摘藻」は文藻をのべ敷くことで、『文選』に散見す
る。左思「蜀都賦」に「幽思綯道德 摘藻挾天庭」と、班固「答賓戲」
に「雖馳弁如濤波 摘藻如春華」と、潘尼「贈河陽」に「流声馥秋蘭 摘
藻豔春華」と、「答魏太子牋」に「發言抗論 窮理盡微 摘藻下筆」と、
潘安仁「夏侯常侍誄 並序」（『文選』卷五七）に「飛弁摘藻 華繁玉振」
とある。『文選』以外では、初唐の虞世南の樂府詩「門有車馬客行」に「高
談弁飛兔 摘藻握靈蛇」と見える。

日本の漢詩文では、滋野貞主の『経国集』序に「雅操飛文、似両龍之
分燭。興寄摘藻。疑双曦之齊暉」とあり、日本における「摘藻」の初例
とおぼしい。また、藤原忠通の「早春即事」（『法性寺関白御集』）に「貪
毫摘藻今為導。材幹是疎少齒郎」と見える。

さらに、賦では、嵯峨天皇「重陽節菊花賦」（『経国集』）に「摘賞心於
翰墨 聴糸竹之清商」と、和氣真綱『経国集』「重陽節神泉苑賦秋可哀 応
制」に「君王發言以形惆悵。揆摘叡作以挺天章」とある。

○ 茫彦龍

范雲（四五―五〇三年）。南朝の梁を代表する文人。字は彦龍^{げんりゅう}。元

嘉八年（四五二）、南郷舞陰（現在の河南省沁陽）で生まれる。幼児より文才をもって知られ、永明期（四八三―四九三）、竟陵王蕭子良八友のひとりに数えられた。永明十年（四九二）、蕭琛と共に北魏に派遣された際に孝文帝の称賛を受けている。さらに、八友の一人蕭衍が帝位（武帝）につくと、吏部尚書から尚書右僕射に任ぜられた。その清麗な風格の詩風は当時から高い評価を受けた。約四〇首の詩が現存する。

詞露瑩珠先点草

○ 詞露 瑩珠

「詞露」は、慶滋為政「旧遊安在哉」（『類聚句題抄』三七四）に「詞露遺縁詩草惜 悲風吹対暮松催」とあるように、詩語の美しさを露に譬える表現である。紀貫之「新撰和歌集序」（『新撰朗詠』卷下）にも「花色鳥声、鮮浮藻於詞露」と見える。また、菅原道真「夏日餞渤海大使帰、各分一字。探得途」（『菅家文草』四二五）に「去留相贈皆名貨 君是詞珠我涙珠」とあり、「詞珠」という表現が見られる。

さらに「露」「珠」「瑩」という三つの言葉を共に使っている詩句としては、「重陽侍宴、賦景美秋稼。応製」における「吹金風冷簾 滴玉露清瑩」（『菅家文草』一〇）が挙げられる。「瑩」は、『廣韻』に「瑩 説文

曰玉色」とあり、『經典釈文』に「瑩 瑩磨之瑩 琇瑩美石也」とあり、『類聚名義抄』観智院本に「ミカク」（法中、一一オ・仏下末、二三ウ）とある。したがって「瑩珠」は磨かれることによって、一層輝く玉のことである。

当該詩では、一つ一つ詩語を円やかな露に譬えたうえに、さらにその露をまるで輝いている玉のように表現している。

○ 点草

用例未見。菅原道真「臘月独興」に「雪点林頭見有花」と、「花下餞諸同門出外吏、各分一字。探得轅」に「送客何先点涙痕」と見えるように、「点」は、少量のものが何かの表面に付着していることを意味する。また、藤堂明保氏の解釈によると、「点」《名》筆法の一つ。筆先をちゃんと紙につけてすぐ離す書き方（『学研漢和大辞典』）。ここでの「点草」は、筆先を紙に下す時に、詩語は露のように草の葉についているさまを表現しているのであろう。「露」「珠」「点草」は意味上、縁がある言葉で、この一句に縁語的な修辞法が使用されているようである。

筆鋒淬劍本蔵松

○ 筆鋒 淬劍

「筆鋒」は、筆の先。転じて文章や詩作の勢い。鮑照（四一四—四六六）の「擬古」（『文選』雜擬・『芸文類聚』卷二六「言志」に「兩說窮舌端 五車摧筆鋒」とみえ、都良香の「文武材用」（『都氏文集』卷五）に「筆鋒時用、則兵刃徒銛」と見える。

『説文解字』に「淬、滅火器也」と、その注（北宋の徐鉉か徐鍇による）に「淬、劍燒而入水也」とあるように、「淬」は、熱した劍を水に入れて鍛えることである。また『類聚名義抄』觀智院本に「ニラク」とある（法上、六ウ）。――

北宋の黃庭堅（一〇四五—一一〇五）「以团扇、洮州綠石硯贈無咎文潛」における「贈君綠石含風漪 能淬筆鋒利如錐」は、「筆鋒 淬劍」と類似的趣を有している。

○ 藏松

用例未見。同じ頸聯の出句「詞露瑩珠先点草」では「露」「珠」「草」に点ず」という縁語的な詩語が使用されているため、「筆鋒淬劍本藏松」もその対句として同じ発想、つまり縁語的な手法が用いられているはずである。「鋒」と「劍を淬ぐ」とは、縁語的な繋がりを有するのが明らかであるが、「劍」（「鋒」は劍の一部）と「藏松」との関連がこの一句を解く鍵となる。『史記』「吳太伯世家」における「劍」と「松」双方に関す

る記述は、その「劍松に藏す」という表現と深く関連するのではないかと考えられる。本文を引用しておく。

季札之初使、北過徐。徐君好季札劍、口弗敢言。季札心知之、為使上国、未献。還至徐、徐君已死、於是乃解其宝劍、繫之徐君冢樹而去。從者曰、徐君已死。尚誰予乎。季子曰、不然。始吾心已許之、豈以死倍吾心哉。

季札の初め使用するや、北のかた徐に過る。徐君、季札の劍を好む。口、敢て言はず。季札、心に之を知る。上国に使用する為に、未だ献ぜざりき。還りて徐に至る。徐君已に死せり、是に於て乃ちその宝劍を解き、これを徐君の冢樹に繫けて去る。從者曰く、徐君已に死せり。尚ほ誰に予ふるか。季子曰く、然らず。始め吾が心、已にこれを許せり。豈に死を以て吾が心に倍かんや、と。

この記述は『芸文類聚』（卷四十）札部下「松」の部立にも収められている。「冢樹」は墓の木で、松の木と関わりがありそうである。例えば『芸文類聚』の同じ「松」の部立に次の詩句が見える。

古墓型為田 松柏摧為薪（「古墟墓」）

徂謝易永久 松柏森已行（謝靈運「廬陵王墓下作」）

前者の「古墟墓」は古詩十九首の第十四首であり、『文選』にも収録され

ている。また、古詩十九首の第十三首に「白楊何蕭蕭 松柏夾広路」とあり、その仲長統『昌言』の注に「古之葬者、松柏梧桐以識墳也」とある。これらの用例から、「冢樹」が松の木である可能性は高い。

さらに、元稹「説劍」(『元氏長慶集』卷二)に「鑄時近山破 藏在松桂朽」と見え、その対句に前述した「季札挂劍」の典故が用いられたと考えられる。当該詩の「劍」「松に蔵す」も「季札挂劍」をふまえた表現であろう。

憐君累代遙輸信

○ 憐

憐の右側の部分は「炎(ひ) + 舛(足)」の会意文字で、よろよろとしているが、絶えず続いて燃える鬼火(憐)を指す。憐は、それを音符とし、心を加えた字で、心がある対象に引かれて、つらつらと思いが絶えないことをいう。通常は気の毒に思うこと、可愛らしく思うこと、いじらしく思うことを意味するが、白居易「長恨歌」に「可憐光彩生門戸」と見えるように、「ああ」と感じ入って心が引かれる意味にも使われる。当該詩の「憐」はこの意味である。

○ 累代

代々。代を重ねること。裴瑋の父親、裴頌は元慶六年(八八二)、寛平六年(八九四)に渤海使として来朝し、裴瑋は父の後を継ぎ、延喜年間に二回来朝したためである。

○ 遙輸信

用例未見。遙は『説文解字』に「遠也」と、『礼』・王制「千里而遙」とあり、『左伝』昭二十五年に「遠哉遙遙」とあるように、距離の遠さを表わす。ここでは二つの意味をもつ。一つは、信を「信物」に理解し、渤海国から日本へ、また日本から渤海国への「信物をはこぶ」という意味である。二つは、信を「まこと」と読み、渤海国から日本へ、また日本から渤海国へのまことの情を伝える意味である。

竹帛応垂不朽蹤

○ 竹帛応垂

『説文解字』に「字者…著於竹帛謂之書」とある。古く中国で紙が発明される以前、竹簡や布帛に文字を記したところから、竹帛は書物を意味する。『三国志』魏書・鄧艾伝に「艾功名已成 当書之竹帛 伝祚万世」と、高適「三君詠・狄梁公」(七〇二―七六五)に「梁公乃貞固 勲烈垂竹帛」と見えるように、「竹帛に垂る」は、功名や手柄が書きのせられて

後世にまで伝わること、歴史にのこることである。

『続日本紀』天平宝字二年（七五八）三月辛巳条に「詔曰 朕聞、孝子思親、終身罔極、言編竹帛、千古不刊」と、島田忠臣「奉傷致仕藤御史」（『田氏家集』一五五）に「眼前恩少蒲輪喚 身後功多竹帛書」と、藤原明衡「閏三月尽日 慈恩寺即事」（『本朝無題詩』）に「丹心初会伝青竹【此寺初会序。垂竹帛長存】」と、紀在昌「北堂漢書竟宴。詠史得蘇武。并序」（『扶桑集』卷九）に「非只英名垂竹帛。麒麟閣上記勲功」と見える。

○ 不朽

朽ちないこと。

『春秋左氏伝』襄公二十四年に「太上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽」と、『後漢書』李固伝に「明公踵伯成之高、全不朽之譽。豈与此外戚凡輩耽榮好位者同日而論哉」とある。

「不朽」という表現は、平安時代の日本漢詩文にも散見する。小野岑守『凌雲集』序に「魏文帝有曰、文章者経国之大業、不朽之盛事」と、桑原腹赤「奉和傷野女侍中一首」（『文華秀麗集』）に「何崇盜葉求仙台。不朽哀榮降聖篇」と、大日奉首名「対策」に「有前事不朽、足以准的」

おおいまつりのおびとな

『経国集』卷二〇）と、蔵伎美麻呂「対策」（『経国集』卷二〇）に「踰千祀而永存。経百代而不朽」と、都良香「神仙」（『都氏文集』）に「手理累人、太極之青文不朽」と、紀在昌「北堂漢書竟宴詠史得蘇武。并序」（『扶桑集』『本朝文粹』）に「十二世之撫運 糸綸載而不朽」と、大江匡衡「七言。初冬於左親衛藤亜将亭同賦煖寒飲酒。以盃為韻。并序」（『江吏部集』）に「微言不朽于今而存」と見える。

【通訳】

裴大使は再び蹤の字で押韻して玉のように美しい詩作を贈ってくださいました。それを深く味わい感きわまり耐えられなくて、憚りながら敢えて唱和させていただきます。

神仙の住む十二楼のように素晴らしい宮城が見えてきました。私たちが騎乗で袖を触れ合わせながら進むのは、今回で二度目になります【本日、渤海使節と掌客使の私が共に馬を並べて宮城に参上したので、このように言います】。

（裴大使と詩文の唱和をさせていただきますが）雲気を占うように流れに応じる柔軟さと言ったら、あの荀鳴鶴のように優れた応答をする裴

大使に対し、私は肩を並べるのも難しい。あやを述べ敷くことと言ったら、あの范彦龍のように美文を綴る裴大使に対し、私はひどく恥ずかしい。

（裴大使が筆を紙に下ろす際に生じる）円やかな露のような詩語は、玉を磨いたように、一つひとつ草の葉に垂れています。

その筆鋒は鍛えられた剣のようで、元より季札が松に掛けたあの名剣ではないでしょうか。

ああ、なんと素晴らしいことでしょう。あなたが父親の後を継ぎ、裴家での二代目の渤海使として遙々信物と氣持を伝えていることは。この不朽の事跡はきつと歴史に記憶され、後世にまで語り継がれるでしょう。

第三章

主題内容に関する考察

— 詠史、歴史講書を中心に —

第一節 平安前期の竟宴詠史詩の一考察

はじめに

平安前期、日本朝廷では、アジア文明の中心である中国への関心が高まり、政治の運営にも中国正史の知識が必要とされていた。これらを背景として、中国三史¹、即ち『史記』・『漢書』・『後漢書』の講書は、官吏養成の過程において不可欠なものとして認識され、国家教育の最高機関である大学寮の紀伝道において行われていた²。また、『類聚国史』などには、天皇に対して中国正史の講書を行ったという記録もあり、中国正史の知識が、天皇の教養の一部として考えられていたことが分かる³。一方で、九世紀に漢文学が隆盛したことを受け、三史の知識は、実務的な公文書の作成などに止まらず、漢詩の世界においても開花していった。その中でも特筆すべきであるのは、三史の講書が終了した後に開催された竟宴⁴の場で、詩人たちが歴史上の人物の題目を予め与えられ、いわゆる題詠の形式で製作した詠史詩である。『凌雲集』(弘仁五年。一首)、『文

華秀麗集』(弘仁九年。四首)、『菅家文章・後集』(昌泰三年・延喜三年。六首)、『田氏家集』(寛平三年。四首)、『扶桑集』⁵(長徳年間。一〇首)には、弘仁期・貞観期・寛平期・延喜期の竟宴詠史詩の一部が収められており、その一端を垣間見ることができる⁶。

近年、菅原道真の詠史詩を中心に考察したものとしては、佐藤真一氏の「菅原道真と父是善―巻一、九「八月十五夜、嚴闇尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲。並序。」を中心に―」と、堀誠氏の「菅原詠懷人士考」が挙げられる⁷。しかし、日本漢詩文学研究において、その他の竟宴詠史詩に注目した研究はいまだ不十分で、様々な視点からの検討が期待されている。本節では、これらの詩集における竟宴詠史詩を考察対象にし、詩作の題材の視座から、『史記』・『漢書』・『後漢書』との関わり、題材の詠法、及び題材と在席の詩人の経歴との関連を検討することで、これらの竟宴詠史詩と「文章は経国の大業なり」という平安初頭の文学上のスローガンとの関連に光を当てたいと思う。

一、題材の特徴

周知の通り、『史記』は、伝説上の五帝から前漢の武帝までの歴史を綴った、「本紀」十二巻、「表」十巻、「書」八巻、「世家」三十巻、「列伝」七十巻から成る紀伝体の史書である。『漢書』は、『史記』と記述時期が一部重なる前漢の成立から王莽政権までを記録したもので、「本紀」十二巻、「列伝」七十巻⁸、「表」八巻、「志」十巻の計百巻から成る紀伝体の史書である。また、『後漢書』は、後漢の歴史について記し、「本紀」十巻、「列伝」八十巻、「志」三十巻の全百二十巻からなる紀伝体の史書である。これら三史の何れも、「本紀」、「列伝」などの部門を立て、多数の人物の事跡を記録した膨大な歴史書である。大学寮での三史の修業時間は、『弘仁式』では「準中経」（四六〇日）、『延喜式』では「準大経」（七七〇日）であった⁹。竟宴の場では、史書に書かれた多くの人物から誰が詩作の題材に選ばれるのか¹⁰、興味深い問題であるといえよう。

前述した日本漢詩詩集に見られる竟宴の詠史詩をそれぞれ『史記』・『漢書』・『後漢書』と照らしてみると、それらの詩作は、「表」・「書」・「志」とは直接の関わりを持たず、国家の存亡に関わり、歴史の展開に影響を与えた人物を描いた部門である「本紀」・「世家」・「列伝」から取材していることが一目瞭然である（附表一・二・三を参考）。こうした傾向を促

した一つの原因として、「表」・「書」・「志」部門の、個人の伝記を語る上での叙事的性格が乏しいことが挙げられよう¹¹。しかしながら、こうした表面的な原因の他に、より内面的な原因は、題材の特徴、また題材と詩人との関係から看取することができる。それは「文章は経国の大業なり」という平安初期の文学的スローガンと緊密に関わっているものだと考えられる。

このスローガンは、先学が既に指摘しているように、元来中国魏文帝が「典論・論文」において唱えた主張であり、「国家経営と文章（文学）」との関係に於いて、その文章の意義を経国という行為に結び、文書を正面に押し立てた嚆矢といはれる¹²。つまり文章（文学）が国を治める上で大きな役割を果たす、という文学と国家経営との繋がりを意識しながら、文学の独立性を強調する文学評論である。

これは、日本においては、嵯峨朝の文化事業のスローガンとして提唱されており、『凌雲集』の序に「魏文帝有曰く、文章は経国の大業なり、不朽の盛事¹³」と、はじめて引用された。この引用については、「嵯峨の弘仁三年以来の文治政策を古代帝王の故実によって強化するための引用¹⁴」という指摘もある。『日本後紀』弘仁三年五月二十一条に記され

ている詔勅にある一部の記述を見てみよう。

經^メ國^ヲ治^ル家^ヲ、莫^ク善^キ於^レ文^{ヨリ}、立^テ身^ヲ揚^{グル}名^ヲ、
莫^シ尚^キ於^レ學^{ヨリ}。

国を経め家を治むるに、文より善きはなく。身を立て名を揚ぐるに、学より尚きはなし。

この記述から、嵯峨朝では詩文制作が奨励されており、立身経国に繋がることを国家の政治理念として積極的に提唱していたのは、弘仁三年のことだとわかる。つまり、二年後に完成した『凌雲集』と異なり、文理論としてではなく、政治理念として強調されていたのである。また、「文章経国」は、天長四（八二七）年に編纂された詩集『経国集』の名前としても明示されており、淳和朝に至って、文人の共有する理念として定着したと考えられる。こうした時代背景の下で、宮廷、公家の邸宅、大学寮の学曹などで行われる詩宴は、「文学」と「経国」が直接に連なる場所だと認識されていた。

中国三史の竟宴の場にも、詠史詩を通じて国家経営に裨益しようとする

る「文章経国」の理念が存在する可能性があると思われる。

まず、帝王の事跡を叙述した「本紀」から取材した四首の詠史詩について考えてみたい。附表一〇三に掲載しているように、「賦得漢高祖」〔文華秀麗集〕仲雄王）・「於右丞相省中直廬讀史記竟、詠史得高祖、応制」〔田氏家集〕島田忠臣）、「北堂漢書竟宴、詠史得高祖」〔扶桑集〕菅原淳茂）、「後漢書竟宴、各詠史、得光武」〔菅家文草〕菅原道真）は、それぞれ『史記』の「本紀高祖」（二首）、『漢書』の「高帝紀」、『後漢書』の「光武帝紀」を踏まえたものである。ここで、何故この二人の帝王が「本紀」の人物の中から選択されたのかという問題を考えた時、以下の二つの共通する特徴が見出せる。

一つは、両者とも天下の混乱を収めた初代皇帝であることだ。即ち、高祖（劉邦）は秦時代の暴政を終わらせ、その後項羽との戦いを経て天下を統一した前漢の初代皇帝であり、光武帝（劉秀）は王莽による篡奪後の混乱を統一し、後漢の初代皇帝となった人物である。

もう一つは、高祖も光武帝も、寛大な器量と人徳を有し、優秀な人材を集め、儒教的な国家政治の基礎を築いたことである。

高祖の人徳は、張良、蕭何、韓信のいわゆる三傑との逸話によく表わ

れている。殊に、『史記』に記されている「此の三者は皆人傑なり。吾能く之を用ゐる。此れ吾の天下を取りし所以なり¹⁵」という高祖自身の言葉からは、彼の、人材を大事にすることではじめて覇者となれたという自覚が窺える。また、「天下と利を同じくするなり」と評価されたように、彼は、天下の人々と利益を分かち合う寛大な人物でもあった。さらに、天下統一後、儒者の叔孫通の助言を採用し、朝廷の礼儀を整え、儒教的国家政治の基礎をなしたのである。

一方、光武帝についてであるが、彼の兄・劉縯が更始帝に殺害された後、薊（北京）で孤立した時期に、名將の馮異と軍師の鄧禹との協力を得たことで困難を乗り越えたという逸話は、部下との信頼関係を表わすものである。また、天下統一後、彼は、国民に負担を掛けないように政治の上でも儉約を目標とし、功臣に適切な褒賞を与え、儒教を国教として定着させることを試み、二百年の泰平の礎を築いた理想の君主とされている¹⁶。

これらを嵯峨天皇の事跡、殊に平城上皇との間に起った薬子の変¹⁷及び嵯峨天皇の仁徳と合わせて考えると、そこに高祖と光武帝の題材を選択した理由を窺うことができよう。

薬子の変に簡単に触れておきたい。大同四（八〇九）年、平城天皇は病弱であることを理由に嵯峨天皇に譲位し、弘仁元（八一〇）年に旧都平城京へ移った。だが、嵯峨天皇が、平城上皇が在位中に設置した観察使の制度を改めようとしたために平城上皇が怒り、二所朝廷といわれる対立が起こった。その後も、嵯峨天皇による一連の新たな政策や、平城上皇の復位を企む藤原薬子と藤原仲成の助長により、二所朝廷の対立が深まっていた。同年九月六日、平城上皇は平安京を廃して平城京へ遷都する詔勅を出した。こうして国は分裂の危機に瀕し、最終的に武力の手段によつて問題は解決を見えることになった。結果的には、嵯峨天皇は、武官の坂上田村麻呂などを用いて勝利を得、国の混乱を治めた。事件後、嵯峨天皇は関係者に寛大な処置をとり、天長元（八二四）年の平城上皇の崩御の際にも、嵯峨上皇の要望で淳和天皇の名によつて関係者の赦免が行われているのである¹⁸。

こうした国家存亡に関わる事件に際する嵯峨天皇の対応は、高祖、光武帝がそれぞれに成し遂げた天下統一と、彼らの寛大な器量を彷彿とさせるものである。

弘仁期に行われた『史記』竟宴が、「薬子の変」による混乱を背景にし

たことを考えると、高祖を詩題に選んだのは、政治的な色彩が濃い。これから儒教的な文治政策に傾斜する嵯峨天皇を中心として、平穏な治世が続くようにという念願が竟宴にこめられているのであろう。

なお、嵯峨天皇は、即位後に父・桓武天皇の遺志を継承し、政治面においても、文化面においても意欲的な治績を残した。政治面では、例えば、弘仁元年三月に藏人所（令下官司。天皇に近侍し、機密文書の保管、詔勅の伝宣などを司る役所）を設置し、六月には觀察使を廃止して参議（奈良時代に設けられた令外の官。太政官に置かれ、大中納言に次ぐ重職）を復活させた。また、太政官筆頭だった藤原園人を重用し、律令の背景思想である儒教に基づいた百姓撫民や権門抑制の政策をとった。藤原冬嗣には律令の修正・補足を命じ、『弘仁格式』（弘仁十）年を編集させ、律令国家の基礎を固めるために努めていた。文化面では、嵯峨天皇は、前述した藤原氏以外にも、巨勢野足、菅原清公、空海、小野篁などの人材を登用し、積極的に当時の先進的な中国文化を取り入れ、文化事業をより一層発展させていたのである。嵯峨朝が平穏な治世、豊かな弘仁文化をつくったと認識している研究者は少なくない。

このように、高祖と光武帝は、平安前期の人々の心に理想的統治者を

形作るためにも、また、君臣一体の雍容平和の気風を招来するためにも、竟宴の場に相応しい題材だと考えられていたのであろう。

一方、附表一〇三に掲載したように、「世家」、「列伝」から取材した個人などの題材としては、司馬遷、叔孫通、公孫弘、董仲舒、張子房、季札、司馬相如、毛遂、楊雄、淮南王劉安、路温舒、李廣、蘇武、黄憲、蔡邕、龐公が見られる。

歴史的人物の評価基準などの問題にも関わるが、平安前期の官人の立場からみれば、これらの人物は、国家経営に影響を及ぼした有能な官吏や忠臣、文化史上に不朽の作品を残した文化人、高德で名声を博した儒者などである。これらの人物を題材にしたことは、「文章経国」の理念に繋がり、官吏涵養という政教的な意図がこめられているという点では軌を一にしていると思われる。こうした人物に反して、例えば『史記』の「佞幸列伝」、「魏其武安侯列伝」や、『漢書』の「佞幸伝」には、国の繁栄を妨害したり、悪影響を及ぼしたりした個人も書かれているが、詩作の題材の範囲からは除外されているのである。この原因は、竟宴の主旨が君臣一体の雍容平和の気風を齎すこと、また「文章経国」の理念に影響されたことにあるであろう。

二、題材の詠法

前述した人物の題材は如何に詩作において詠じられているのか、その「文章経国」の理念との繋がりや幾つかの作品に即しつつ説明しておきたい。

まず、『漢書』竟宴と『史記』竟宴において共に詠まれた「叔孫通」の題材を例に挙げたい。叔孫通は秦から前漢にかけての儒者である。前漢が成立した初期において、「儒者は進取には役立たないが、守成には役立つ」と高祖に自薦し、朝廷の儀式を制定し、また漢惠帝の時に宗廟の儀式を整え、漢王朝の文治の基礎を築くことに大きな役割を果たした人物である。だが、儒者の模範として尊敬される一面に反し、叔孫通は秦の二世皇帝・項梁・項羽・高祖に仕えたため、彼のことを一人の主人に忠実でなく、阿諛の言動を持つて保身を測つたとして軽視する見方もある。元慶八（八八四）年の『漢書』竟宴で、菅原道真が彼のことをどのよう

勸学院、漢書竟宴。詠^{ズルニ}史得^ニ叔孫通^一ヲ。菅原道真

游魚得^レタリ水ヲ幾^{バクノ}波濤。命矣 孫通遇^ニヒシコト^一漢高^ニ。

暗^ニ記ス龍顔ノ奇ナルコト在^{ルヲ}骨^ニ。先^ニ知ル虎口ノ利^{キコト}如^{キヲ}刀ノ。

諛言不^ズ謝^レ加^ニフルヲ新印^一ヲ。降見無^レ嫌^{フコト}變^ニヘルヲ舊袍^一ヲ。

太史公雖^レ稱^ニスト大直^一ト。猶^ホ慙^ツラクハ去就ノ甚^ニダシキヲ鴻毛^一ヨリ。

勸学院、漢書竟宴。史を詠ずるに叔孫通を得たり。

游魚水を得たり幾はくの波濤。命なるかな 孫通の漢高に遇ひしこと。

暗に龍顔の奇なること骨にあることを記す。先ず虎口の利きこと刀の如きを知る。

諛言謝せず 新しき印を加ふるを。降見嫌ふことなし、旧袍を変ふこと。

太史公 大直と稱すと雖も。猶ほ慙づらくは 去就の鴻毛より甚しきことを。

首聯では、叔孫通が高祖の知遇を得たことを「魚が水を得た」と例え、

高祖とは運命的な絆で結ばれていることを語っている。頷聯では、叔孫通が予てから、高祖が天下を取ると思われる異相、即ち龍顔をしていることを見抜き、秦の二世皇帝に仕える危険を予見していると詠じ、叔孫通の鋭い政治見識を表わしている。ここまでの二聯からすれば、菅原道真は、叔孫通と高祖との巡り合いについてかなり肯定的な見方をとっていることがわかる。だが、律詩の「起承転合」の「転」に位置する頷聯では、叔孫通が諂いの言動で秦の二世皇帝に博士に拝せられて印綬を受けたが、謝意を述べずにすぐさま秦から逃げたこと、また漢王（劉邦）に降った後、儒服が嫌いな漢王に迎合するために、儒服を楚製の短衣に変えたことを述べている。さらに、尾聯では頷聯を受け、「司馬遷が叔孫通のことを「大直」と讃えたが、わたしはその処世進退を甚だしく軽いと恥ずかしく思う」と強調している。この一首からすれば、道真は天子を助ける儒者官吏の基準に即しながら叔孫通の事跡を両面的に考えていたことがわかる。

しかし、『史記』では、司馬遷は叔孫通のことを「世にも希に務めを度り、礼を制し進退し、時と共に変化し、卒に漢家の儒宗と為る。」と高く評価した。菅原道真の門弟である紀長谷雄（八四五―九一二）年は恐

らくこの見解の影響を受け入れたため、叔孫通の事跡を肯定的に詠じている。

北堂、史記竟宴。各々詠^{ズルニ}史^ヲ得^ニタリ叔孫通^ヲ。紀長谷雄
懷^キ明^ヲ難^シ照^スコト世ノ多艱^ヲ。直道如^シ諛^ヲ十主ノ間。

他日遂^ニ逃^レ秦ノ虎口^ヲ。暮年初^メ謁^{ニス}漢ノ龍顔^ニ。

光^ニ加^ヘ粉澤^ヲ洪基ハ貴シ。道^ニ拂^ヒ風波^ヲ少^シク海ハ閑ナリ。

一代ノ儒宗君^ヲ第一トス。于今^ニ吾輩ハ仰^ニ高山^ヲ。

北堂、史記竟宴。各々詠史を詠ずるに、叔孫通を得たり。

明を懷き世の多艱を照すこと難し。直道諛らふが如し 十主の間。

他日 遂に秦の虎口を逃れ、暮年 初めて漢の龍顔に謁す。

光に粉澤を加へ洪基は貴し。道に風波を拂ひ 少^{しばら}く海は閑なり。

一代の儒宗 君を第一とす。今に 吾輩は高山を仰ぐ。

首聯では、彼が「明を懷」く賢人であることをまず明言し、乱世のために多数の主人に仕え、その間に阿諛の言動を取っていると難詰されたが、

実は「直道」を歩んでいたのだ、と叔孫通の立場に立つてその処世の道を肯定している。頷聯では、叔孫通が秦にいる危険を察し、そこから逃げ、転々としてから漸く高祖に拝謁できたことを踏まえ、叔孫通の時世に対する判断の正確性や、また賢明な皇帝への羨望を表わしている。頷聯の上句では、彼が高祖の大業に仕えることを「光に粉澤を加へ」たと例え、君と臣との調和が齎した前漢の国家大業を「洪基貴」という美辞で表現している。当聯の下句では、叔孫通が人生の前半に波乱に満ちた道を歩んでいたが、その苦難を暫くのこととして乗り越え、最後に高祖の知遇を得たことを詠んでおり、その青年期と晩年とをそれぞれ「風波」と閑かな海のイメージを通じて表現している。さらに、尾聯では、紀長谷雄は、叔孫通の儒教の歴史における地位を肯定し、「高山」のような存在であると敬意を込めて一首を終えている。

菅原道真と紀長谷雄の詩作においては、叔孫通に対する認識は若干異なっているところがあるが、高祖と叔孫通との関係について、それぞれ「魚」と「水」、また「光」と「粉澤」のように準えており、「君」と「臣」との調和を讀んでいるという点では、軌を一にしている。こうして考えれば、高祖に仕えた時期の叔孫通の儒者として国家事業に努める姿勢は、

日本の儒者系の官吏としての菅原道真と紀長谷雄にとっても大きな意味を持つていえると言えよう。なお、菅原道真の叔孫通の「大直」への疑惑は、道真がどのような政治姿勢を取るべきかという問題を考える際に生じたものであろう。詠史詩の創作は、ただ文学的行為に止まらず、政治的行為にも繋がってきたように思われる。

続いて、島田忠臣の一首を見てみよう¹⁹⁾。

史記竟宴、詠^{ズルニ}史ヲ、得^ニタリ毛遂^一ヲ。島田忠臣

趙勝知^{ルコト}士ヲ早ク。毛遂出^{ヅルコト}群ヲ遅シ。

客舎^{ニシテ}三年黙シ。荊庭^{ニシテ}一旦威ス。

既^ニ揮^{ヘリ}昇殿ノ劍。終^ニ脱^ケタリ処囊ノ錐。

寄^{セケル}語^ヲ他ノ同輩。如何ナラム目撃シケム時。

史記竟宴、史を詠ずるに、毛遂を得たり。

趙勝 士を知ること早く、毛遂 群を出づること遅し。

客舎にして三年黙し。荊庭にして一旦威す。

既に揮へり 昇殿の劍、終に脱けたり 処囊の錐。

語を寄せける 他と同輩、如何ならむ目撃しけむ時。

戦国時代の平原君（趙勝。恵文王の弟）の食客の毛遂の事跡を題材とした一首である。首聯は、「平原君（趙勝）が早々に有能な人材を見抜いたが、毛遂はいつでも食客の中からぬきんでることがなかった」ことを述べている。頷聯と頸聯は、首聯を受け、食客の部屋に三年間沈黙した毛遂が、楚王との会談に行く士に自薦し、楚の朝廷で会談が難航した際、劍に手をかけて楚王を脅し、趙との合従を受容させた事跡を踏まえている。尾聯には、島田忠臣の毛遂への直接の評価こそ見られないが、「他の同輩たちよ、この毛遂の活躍を目のあたりに見たときの心情はいつたいどのようなものであったか」という疑問文を用いることで、忠臣や同席の詩人、さらには読み手にもより深い思考を迫ったのであろう。毛遂の食客としての責任感、そして主人のために命を賭する姿勢は、臣下としての忠義という美德を巧みに賛美していると言えよう。換言すれば、島田忠臣自身もまたこの詩作を通じて、主人に忠義を尽くそうとする臣下としての意欲と忠誠をより深める事ができたのであろう。

これらの作品からみれば、詩人たちは、詠史詩において歴史的人物の

事跡を評価することを通じ、自分の政治姿勢や、臣としての処世の信念をアピールしていることがわかる。こうした創作の行為は、国家経営への思いと繋がり、「文章経国」の理念に影響されていると考えられよう。

三、九世紀前半の竟宴詠史詩における題材の配分

竟宴の場では「賦得」という題詠の形式で創作する。従って、史書から題材を決めた後に、種々の題材が如何なる基準で各々の詩人に与えられるのか、もう一つの問題点となる。『日本書紀』の竟宴の儀式を参照すれば、三史のそれを垣間見ることができよう。『日本書紀』は、三史と共に紀伝道の教科書であり、その竟宴の儀式は三史の竟宴と相似しているとされている。その竟宴和歌の題が如何に決められるかについて、木田章義氏は、「誰にどの題を配分するか、予め決定されていた場合が多いようである…詠み手の業績や官位に合わせて、題を与えていた形跡がある²⁰。」と指摘した。また、上田設夫氏は、「歌題は『三代実録』の記事からみて、あらかじめ文章博士と都講が中心になって選定されており、これが六位以上の竟宴歌人に分け当てられ、そのほかの博士、都講、召

人などは、漢詩の探題と同様に当座探題であつたと思われる²¹」と明確に指摘した。三史の竟宴の場合はどうか。『三代実録』などの歴史書や竟宴詠史詩の詩序には、これについての詳細な記述は見当たらないが、筆者が題材の配分に着目し、題材とそれを得た詩人の経歴との関係から考察を行ったところ、五位および五位以上の詩人の場合、その身分と経歴が考慮された上で題材が与えられる傾向があることが分かった。そこには政治的色彩を看取することができる。

九世紀前半、中国文学に強い憧憬をもつ嵯峨天皇、淳和天皇らを中心にして、漢詩詩宴は多く開催されていた。三史の竟宴もこうした中国的な文化行事の一つであつた。その場で創作された作品の一部は『文華秀麗集』の「詠史」の部門に収録されており、嵯峨天皇の「史記講竟。賦得張子房」²²、良岑安世の「賦得李札」、仲雄王の「賦得漢高祖」、菅原清公の「賦得司馬遷」という四首の詠史詩がそれに当たる。以下では、これらの詩作に即しつつ論を進めてゆきたい。

まず目に付くのは、嵯峨天皇と仲雄王、及び彼らの詠史詩である。『文華秀麗集』の序文によれば、当時、仲雄王の官位と官職は「従五位上大舍人頭兼信濃守」であつた。「大舍人」とは、中務省大舍人寮に属し、天

皇に供奉して宿直²³や供奉などに従事する職である。大舍人頭の職は、嵯峨天皇から厚く信頼をおかれた人物でなければ勤まらないものだと思われる。

ここで、嵯峨天皇と仲雄王との君臣関係および「張子房」と「漢高祖」との関わりに着目したい。つまり、張子房が漢高祖の人徳に魅了され、その大業に資する有能な良吏であつたと同時に、漢高祖もまた彼の才能を認め、その才能を最大限に発揮させる賢明な帝王であつたことを合わせて考える必要があるのだ。なお、重ねて述べるが、『文華秀麗集』の詠史詩の創作時期は薬子の変が鎮まった数年後のことであり、賢明な天皇と有能な臣下との出現、また君臣一体により安定した政治が齎されることが大いに期待されていた時期であつたと考える。こうした背景の下にある竟宴の場で、天皇とその臣下にそれぞれ張子房と漢高祖を詠出させることが、国家経営に資するという「文章経国」の理念と繋がっている、不自然ではなからう。では、実際の作品はどうであろうか。まず嵯峨天皇の一首を見てみよう²⁴。

史記ノ講竟^ル。賦^{シテ}得^ニタリ張子房^一ヲ。嵯峨天皇

受命師^二トナリ漢祖^一ニ。英風萬古ニ傳フ。

沙中ノ義初^メテ發リ。山中ノ感彌^ニ玄^シ。

形容類^二テ處女^一ニ。計画撓^ム強權^ヲ。

封^レジテハ敵ヲ反謀散^セ。招^レキ翁ヲ儲貳全^{セシム}。

都ヲ定ムルニ是^二トシ劉ガ説^一ヲ。違^サリテ宰^リ蕭ガ賢ヲ勸^ム。

追從ス赤松子。避^レケテ世ヲ獨リ超然^{タリ}。

史記の講竟る。賦して張子房を得たり。

受命 漢祖に師となり。英風 萬古に傳ふ。

沙中の義 初めて発り、山中の感 彌^{いよいよ}玄^{おく}し。

形容 処女に類て、計画 強權を撓む。

敵を封じてば 反謀散せ、翁を招き 儲貳全せしむ

都を定むるに劉が説を是とし、宰^さを違^さりて蕭が賢を勸む。

追從す 赤松子、世を避けて独り超然たり。

首聯では「張子房は」天命を受けて漢の高祖の師範となり、その優れた

風儀は永遠に伝わる」と詠じ、臣下の身である張子房が帝王の「師」で

あることを説き、「英風」、「萬古に傳ふ」の美辞を極めて張子房の歴史的

不朽性を讃えている。第二聯では、張子房が秦の始皇帝を暗殺したこと

を「義（義理、義拳）」として強調し、また暗殺の計画が失敗し、山中に

逃げた際の彼の感慨を、「玄（奥深い）」という肯定的な言い回しで表わ

している。第三聯では、張子房の容姿を処女に準えながらも、「その計画

が周到で強い権力をたわめ、くじいた」と詠み、「鴻門の宴」で張子房が

高祖を項羽の害から救ったことについて、感嘆の声をあげている。第四

聯では、張子房が如何に計画を立てて「敵」の謀反を防ぎ、皇太子（儲

貳）立位をめぐる紛争を鎮め、国の安定を守ることができたということ

を語っている。第五聯では、張子房が、人臣同士の「劉敬の説をよしと

して採用し長安に都を移し」、また、蕭何を賢いと高祖に勧め、自ら宰相

の位を蕭何に譲った故事を引き、私欲を無にして常に国と帝王のために

行動する忠臣の姿を描いた。尾聯では、神農時代の仙人の「赤松子」の

跡を追おうとする、張子房の超然たる風姿をさらに浮き彫りにしている。

要するに、この詩作では、嵯峨天皇は帝王の大業に懸命に努める良吏

への肯定の意を惜しまずに表わしているのである。なお、竟宴の場が天

皇と臣下の共有する空間であることも考慮すれば、竟宴の場を借りて詩作することを通じて、嵯峨天皇は、張子房のような臣下の出現への期待を在席の臣下に伝えようとしていたのではないだろうか。

続いて、仲雄王の一首を見てみよう。

賦^{シテ}得^ニタリ漢高祖^一ヲ。 仲雄王

漢祖承^ニケ堯緒^一ヲ。 龍顏應^ニフ晦冥^一ニ。

豁^ニ如有^リ大度^一。 生事未^ニダ曾^テ營^{マズ}。

住^{マヒテ}在^ニリ中陽ノ里^一ニ。 微^クシテ班^ニタル泗上ノ亭^一ニ。

呂公驚^ニキ貴相^一ニ。 王媼感^ニズ奇靈^一ニ。

望^{ミテ}氣^ヲ秦皇厭^{サヘ}。 尋^{ネテ}雲^ヲ呂后停^ム。

徑關創^ニメ漢統^一ヲ。 軍旅入^ニル咸京^一ニ。

揆^{メテ}亂^ヲ三傑資^ケ。 膺^{レリテ}天^ニ五星聚^ツ。

烏江窮^ニワメ楚項^一ヲ。 軹道降^ニス秦嬰^一ヲ。

命^{あらた}革^{マリテ}登^ニリ乾極^一ニ。 時平^{ラカニ}シテ戡^{セム}甲兵^ヲ。

絳侯ハ重厚ナル者ニシテ。 劉氏遂ニ安寧タリ。

賦して漢高祖を得たり。

漢祖 堯緒を承け、龍顏 晦冥に応ふ。

豁如 大度有り、生事未だ曾て營まず。

住まひて中陽の里に在り、微くして泗上の亭に班たる。

呂公貴相に驚き、王媼奇靈に感ず。

氣を望みて秦皇厭さえ、雲を尋ねて呂后停む

徑關 漢統を創め。軍旅 咸京に入る。

亂を揆めて 三傑資け、天に膺りて 五星聚ふ。

烏江 楚項を窮わめ、軹道 秦嬰を降す。

命^{あらた}革まりて 乾極に登り。時平らかにして 甲兵^をを戡む。

絳侯は重厚なる者にして、劉氏遂に安寧たり。

詩語だけを見ても、「堯緒」、「龍顏」、「貴相」、「奇靈」、「聚五星」、「登乾極」のように縁起の良い美辞が鏤められており、技巧と工夫が凝らされた一首である。そこに仲雄王の高祖への敬意を読み取ることができよう。さらに、それに続く部分で、彼は、明確に高祖の人徳や功業を讃えている。第二聯の上句ではその人徳的な魅力、即ち寛大な度量を、第七聯で

は、彼が三傑の助けを得て自身の才能を發揮させることによって、世の混乱を収めたことを、第八聯では、高祖が「烏江の戦い」で項羽の軍隊を破り、咸陽に入り秦の暴政を終らせたことを、第九聯では、高祖が天下を取ってから、時世が平和になったことを口を極めて賛美しているのである。これらの詩句には、賢明な帝王への期待、治世への願望が込められていると考えられよう。

また、嵯峨天皇の作品の次に置かれた「賦得季札」の詩作と、その作者である良岑安世にも注目してみたい。

良岑安世は、平城天皇や嵯峨天皇と同じく、桓武天皇の皇子である。延暦二十一（八〇二）年、良岑朝臣の姓を賜つて臣籍に下り、天皇の位とは無縁となったが、平城天皇の宮廷で臣下として仕えた。嵯峨天皇が即位した後、弘仁二（八一）年には蔵人頭に任じられ、その後、右大弁などを兼任し、弘仁七（八一六）年に参議、弘仁十二（八二一）年に従三位中納言に任じられた。彼と嵯峨天皇との間には並々ならぬ信頼関係が築かれており、腹心として重用されたことが明らかとなっている。良岑の没後、嵯峨上皇は、彼のため挽歌二篇を作り、深い悲しみを表わしていた²⁵。しかし、天皇と異母兄弟のすべてがこうしたよい関係を築

いたわけではない。反対に、平安初期には、皇位継承を巡る宮廷内部の紛争が起こったこともある。例えば、平城天皇が即位した翌年に、異母弟の伊予親王が謀反の罪を着せられたこと²⁶や、前述した菓子の変がそのうであった。こうしてみれば、良岑安世は、皇位継承の面でも、国家経営の面でも、嵯峨朝の政治の安定に一役を担った人物であつたといえよう。

一方、良岑安世が与えられた「季札」という人物は、春秋時代の呉の初代王寿夢の四男である。清廉の賢哲であり、節義を守るため、父の寿夢、兄の諸樊と余祭に三回も王位を譲つたという儒教的な理想人物である²⁷。また、彼は臣下としても尽力し、国家経営の面でも業績を挙げたのである。

これらを総合的に考えると、嵯峨天皇も在席した宴の場で、良岑安世に「季札」の題材を詠ませることには、一種の政治的意図が強く感じられる。なお、良岑安世が季札を詠じるにあたり、季札が王位を拒むことについて、

所謂呉ノ季札。芳命冠^ひニ古今^一ニ。

交^レハルニ賢ニ情若^レク舊^{キガ}。當^レリテ讓ニ義逾深シ。(「賦^{シテ}得^ニタリ季札^ヲ」)

所謂吳の季札、芳命古今に冠^ひづ。

賢に交はるに情旧きが若く、讓に當りて義いよいよ深し。

と讃えている。このことは、良岑安世が如何なる理由で自分に季札の題材を配られたのかを承知していることを物語っている。

更に、「詠史」の最後の一首である菅原清公の詩作を考えてみたい。『文華秀麗集』の序文によれば、当時彼の官位と官職は「從五位上行式部少輔²⁸兼阿波守」であった。

菅原清公は、「幼少より苦学して經史を学び、文章生とな」²⁹つたという史学に長じた秀才であった。延暦二十三(八〇四)年に遣唐使判官に任じられ、弘仁九(八一八)年頃、中国の朝儀に基づいて日本朝儀の改善に努めたことは、彼の中国史、殊に故実における学殖が早くから朝廷に認められていたことを物語っている。また、弘仁十年に、歴史の学問と研究を本業とする文章博士となったことから³⁰、彼の歴史学における造詣の深さが当時の朝廷でよく知られていたと考えられる。

一方、司馬遷は、中国正史の第一に数えられる『史記』を完成させた

中国屈指の歴史家である。歴史の知識と学問に優れている菅原清公に、司馬遷の題材を詠ませるのは、かなりの配慮の上と察する事ができよう。実際の作品を見てみよう。

賦^{シテ}得^ニタリ司馬遷^ヲ。菅原清公

漢史惟^レ司馬。高才為^レニ代ノ生マル。

龍門ニ初メテ降化シ。禹穴ニ漸クニ研精ス。

続^レギテ孔ニ春秋ヲ発シ。基^レツキテ軒ニ得失ヲ明^{ラカ}ニス。

三千猶シ存^レリ眼ニ。五百但シ嫌^レハムヤ情ヲ。

実録伝^{ヘテ}無^レク墮ツルコト。洪漪逝^{キテ}不^レ停マラス。

終^ニ令^ニ萬祀ノ下^一。長^ニ作^ニ百王ガ楨^ト。

賦して司馬遷を得たり。

漢史惟れ司馬、高才 代の生まるために。

龍門に初めて降化し、禹穴に漸くに研精す。

孔に續ぎて春秋を^{おこ}発し、軒に基づきて得失を明らかにす。

三千猶し眼に存り。五百但し情を嫌はむや。

実録伝へて墮^おつることなく、洪漪逝きて停まらず。

終に萬祀の下、長^{なが}に百王が楨と作らしむ。

「高才」、「龍門」、「洪漪」、「萬祀」、「百王楨」等の華麗な詩語が詩中に鏤められており、美辞を極めて綴られている一首である。また、菅原清公は、首聯では「司馬遷の優れている文才は漢代のために生まれた」、第三聯の下句では「歴史上の得失を明らかにした」、尾聯では「遂に万年のもとにおいて、この史記が数多くの帝王の基礎となった」という歴史的な視座から、司馬遷とその著作を位置づけようとしたのである。そこには、菅原清公の司馬遷への賛美の意だけでなく、政治家の立場からの歴史観が微かに表われている。つまり、歴史を記し、歴史上の「得失」を知ることにより、帝王の大業に資することが望まれるという見解である。

以上のように、『文華秀麗集』の詠史部の作品とその作者との関わり、また詩人達の間係を考察すると、嵯峨天皇を中心とした平安初期の竟宴では、史書の講書に関係する者を除外し、五位及び五位以上の在席の詩人に題材を配分する際に、その身分や経歴などを考慮しながら行われる傾向があると了解される。また、そこに込められた意図は、「文章経国」

の理念と関わっているものだといえよう。

四、菅原道真の竟宴詠史詩における題材の配分

前項では九世紀前半に見られた題材の配分と文章経国との関係を考察してきた。本項においては九世紀後半の漢詩文学を代表とする菅原道真の詩集を考察の手がかりにし、彼の経歴と題材との繋がりに焦点を当てることで、当時の竟宴においても、題材を配るという行為には政治的配慮がなされていたことを明らかにしたい。

『菅家文章・後集』に、竟宴の場で詠じた詠史詩は六首あり、即ち「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲」（貞觀六（八六四）年）、「史記竟宴、詠史得司馬相如」（貞觀十（八六八）年）、「漢書竟宴、詠史得司馬遷」（貞觀二三（八七一）年）、「後漢書竟宴、各詠史、得光武」（元慶六（八八二）年）、「漢書竟宴。詠史得叔孫通」（元慶八（八八四）年）、「文章院、漢書竟宴、各詠史、得公孫弘」（寛平五（八九三）年）である³¹。その中で、貞觀六年、貞觀十年、貞觀一三年の詩作は、それぞれ道真が文章生、文章特業生、少内記の時のもの、即ち五位以下の官位

にあった時代のものであった。また、元慶六年の「後漢書竟宴」は、史書の講書の担当者が道真であった。なお、元慶八年は、彼が文章博士を勤めながら、菅家廊下で多くの進士を養成した時期であった。重ねて述べるが、竟宴では、五位以下の官吏或いは大学寮の歴史書の講書の関係者は、探題という形式で詩題を得るという決まりがあるため、これらの詩作の題材が「探題」で決められる可能性を否定できない。

しかし、寛平五年の道真の経歴を考慮すると、公孫弘という題材は、探題という方法で決めたのではなく、当時彼の官職に合わせて与えられたものだと考えられる。寛平五年の年頭に、道真は参議の職を拝した。参議は令外の官で、大中納言に次ぐ重職であり、中国の漢の官職では、天子を補佐して大政を総理する丞相に相当する。

題材である公孫弘は、武帝が即位した頃、賢良の文学の士として徴用されて博士となり、後に武帝に重用され丞相となった（公孫弘以前は、列侯が丞相になるのが通例であった）。道真と公孫弘の経歴を考え合わせると、まさに川口久雄氏が指摘したように、「漢武帝の総理大臣に出世した文士あがりの公孫弘を詠じた。（略）文章博士から今や参議になった道真にとって、公孫弘はまさしくその理想像であった³²」。以下では、道

真が詩作において如何に公孫弘のことを詠じているのかを見てみよう
33。

文章院、漢書竟宴、各詠^{ズルニ}史ヲ、得^一タリ公孫弘^ニ。菅原道真

六十^{ニシテ}初メテ徴サレ八十^{ニシテ}終フ。官班ハ博士ヨリ遂ニ三公タル。

太常ノ対策科ハ為^レス一ト。丞相招^レキ賢ヲ 閣ハ在^レリ東ニ。

何ゾ忌マン 牧童ノ疲^レテ望^レマンコトヲ海ヲ。愁ヘズ布被ノ耐^ニフルコトヲ寒風^一ニ。

後生欲^レセバ識^ニラント才名ノ貴^一キコトヲ。請フ見ヨ孫公我ガ道ニ通ジタラムコトヲ。

文章院、漢書竟宴。各々史を詠ずるに、公孫弘を得たり。

六十にして初めて徴され 八十にして終ふ。官班は博士より遂に三公たる。

太常の対策科は一となす。丞相賢を招き 閣は東に在り。

何ぞ 忌まん 牧童の疲れて海を望まんことを。愁へず 布被の寒風に耐ふることを。

後生識らんと欲せば 才名の貴きことを、請ふ見よ 孫公我が道に通じたらむことを。

首聯では、六十歳の公孫弘がその文学才能で登用され博士となり、八十歳で丞相（丞相・太尉・御史大夫は「三公」と称される）の職に就いたことを踏まえて、文学の才能を持つ賢良の士の晩年の栄達を詠じている。頷聯では、首聯を受けて、公孫弘の対策の成績が武帝の拔擢によってこそ第一等になったこと、また彼が丞相となった後、「東閣を開きて以て賢人を延き、ともに謀議に参ぜしむ」という事跡に基づいて、帝王の知遇を得た文士としての喜び、及び賢人を育てる儒者の姿勢を描いている。頸聯は、彼が貧しい時期に海岸地帯で豚を放牧し、海を望んで疲れを癒すという前向きなイメージ、また、栄達した後も「布の布団で寒風をしのぐ生活を憂えない」という物欲に淡泊な美德を表出している。公孫弘の事跡を述べた前の三聯に対して、尾聯の「我が道に通じたらむ」という情熱にあふれる感嘆は、参議としての自分が公孫弘と同様に「治道」の理念をもっていることを力強くアピールしている。尾聯を考慮すれば、この一首の趣旨は、公孫弘への道真の肯定と賛美に止まらず、公孫弘のような国の棟梁となろうとする政治的意志を表現することにあると言えるよう。

こうしてみれば、宇多朝の寛平期の竟宴においても、五位以上の詩人に題材を配る際に、詩人の経歴に配慮しようとする意識が存在していることがわかる。

更に、当時の政治局面について言えば、宇多天皇は即位後に諸制刷新を企図しており、積極的な親政の姿勢を示していたのである。藤原氏の権力の拡大を抑えるために、大学寮の出身者を拔擢する行為や、自ら政治を行う主導性は、当時の文人に精神上の安定と、政治に身を投じていこうとする意欲を強く齎したのである。宇多朝の政治と文人の関わりについて、川口久雄氏も「律令制が生き、太政官体制が自主的な力を發揮していた社会では、学儒・文人はその学問文才を通して政治的实践に結びつく希望を持ちえた」と指摘している。こうした宇多天皇の親政による「寛平の治」を背景にして、九世紀後半の三史竟宴は、嵯峨朝の遺風が見え、文学的行為を通じて国家経営に裨益しようとする「文章経国」の理念が表れていることが了解されよう。

おわりに

以上、平安前期における竟宴詠史詩について、その題材の特徴、題材の詠法、題材の配分という三つの問題を分析することにより、そこに一種の政治的な色彩が見られ、文学を政治の場に押し出す「文章経国」というスローガンに影響されていたことを明らかにした。それは、嵯峨天皇を中心とした九世紀初頭の日本朝廷が中国的政治に憧れを持っていることに背景があると考えられる。中国の賢明な帝王と有能な良吏、儒者、学者などを詠むことを通じて、理想的な政治の構図、理想の人物像を当時の日本官人に彷彿とさせることを一つの目的にしていたのであろう。

殊に、「あや」を重視するとされている『文華秀麗集』であっても、その詠史詩の題材、およびその題材と作者との関わりから、皇位継承をめぐる紛争が漸く鎮まっていた嵯峨朝においての君臣一体による安定した政治、国家経営への切実な祈願を窺うことができる。儒教的な国家政治に根を下ろした「文章経国」の文学理念は、嵯峨朝においてその頂点を極めていたのではないかと感じさせる。さらに、菅原道真の詠史詩を検討することを通じて、九世紀後半の竟宴での詩作の題材の選択や配分、詠法は、嵯峨朝の伝統を継ぎ、儒教主義的論理への関心をなおも有しているということが了解できる。それらの詠史詩に看取された詩人らの政治

への抱負は、宇多天皇の親政姿勢と緊密に関わっているのであろう。

このように総合的に考えると、「文章経国」の理念は、勅撰三集の竟宴詠史詩の場において華やかな様相に現れ、九世紀後半に至り菅原道真らの詠史詩において再び光彩を放ったのである。これは、平安前期の日本漢詩文学が当時の政治的背景のもとで独自の展開を歩んだことを物語っているといつてよからう。

附表一、『史記』の竟宴詠史詩の題材

| 『書』 | 『表』 | 『列伝』 | | | | | 『世家』 | | 『本紀』 | 『史記』 | |
|-----|-----|---------------------|--------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------|---------------------|---------------------------|-------------------------------------|---------------------|---------------|
| | | 漢濱老父 | 毛遂 | 司馬相如 | 叔孫通 | 司馬遷 | 季札 | 張子房 | 高祖 | 高祖 | 題材(人物) |
| なし | なし | 「詠史得漢濱父老」(『扶桑集』都良香) | 「史記竟宴詠史、得毛遂」(『田氏家集』島田忠臣) | 「史記竟宴、詠史得司馬相如」(『菅家文草』菅原道真) | 「北堂史記竟宴、各詠史得叔孫通」(『扶桑集』紀納言) | 「賦得司馬遷」(『文華秀麗集』菅原清公) | 「賦得季札」(『文華秀麗集』良岑安世) | 「史記講竟、賦得張子房」(『文華秀麗集』嵯峨天皇) | 「於右丞相省中直廬讀史記竟、詠史得高祖、応制」(『田氏家集』島田忠臣) | 「賦得漢高祖」(『文華秀麗集』仲雄王) | 『史記』の竟宴詠史詩の詩題 |

附表二、『漢書』の竟宴詠史詩の題材

| 『漢書』 | 『本紀』 | 『列伝』 | | | | | | | | | 『表』 | 『志』 |
|---------------|---------------------------|---------------------------|-------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------------|------------------------------|------------------------|----------------------|-----------------------|-----|-----|
| 題材(人物) | 高祖 | 司馬遷 | 叔孫通 | 公孫弘 | 董仲舒 | 揚雄 | 淮南王劉安 | 路温舒 | 李廣 | 蘇武 | | |
| 『漢書』竟宴の詠史詩の詩題 | 「北堂漢書竟宴、詠史得高祖」(『扶桑集』菅原淳茂) | 「漢書竟宴、詠史得司馬遷」(『菅家文章』菅原道真) | 「勸學院、漢書竟宴。詠史得叔孫通」(『菅家文章』菅原道真) | 「文章院、漢書竟宴、各詠史、得公孫弘」(『菅家文章』菅原道真) | 「菅著作講漢書、門人会而成禮、各詠史」(『田氏家集』島田忠臣) | 「漢書竟宴。詠史得揚雄」(『扶桑集』江相公) | 「北堂漢書竟宴、各詠史得淮南王劉安」(『扶桑集』橘在列) | 「北堂漢書詠史得路温舒」(『扶桑集』菅三品) | 「北堂漢書詠史得李廣」(『扶桑集』源訪) | 「北堂漢書詠史得蘇武」(『扶桑集』紀在昌) | なし | なし |

附表三、『後漢書』の竟宴詠史詩の題材

| 『後漢書』 | 「本紀」 | 「列伝」 | | | 「志」 |
|----------------|---------------------------|-------------------------------------|---------------------------|------------------------|-----|
| 題材（人物） | 光武帝 | 黄憲 | 蔡邕 | 龐公 | |
| 『後漢書』竟宴の詠史詩の詩題 | 「後漢書竟宴、各詠史、得光武」〔菅家文章〕菅原道真 | 「八月十五夜、嚴闇尚書授後漢書畢。各詠史、得黄憲」〔菅家文章〕菅原道真 | 「後漢書竟宴、各詠史、得蔡邕」〔田氏家集〕島田忠臣 | 「後漢書竟宴、各詠史得龐公」〔扶桑集〕紀納言 | なし |

〔注〕

- 1 奈良時代の天平七（七三五）に吉備真備が唐より中国三史、即ち『史記』・『漢書』・『後漢書』を持ち帰った。おな、三史の伝来については、太田鼎二郎「吉備真備の漢籍将来」（太田鼎二郎著作集第一冊、吉川弘文館。一九九一年）、池田昌広『後漢書』の伝来と『日本書紀』（『日本文学研究』第三号。二〇〇八年）、池田昌広「古代日本における『史記』の受容をめぐって」（『古代文化』61巻第3号。二〇〇九年十二月）を参照されたい。
 - 2 池田昌広「古代日本における『史記』の受容をめぐって」（『古代文化』61巻第3号。平成21年12月）62頁に、「大学寮の教科に三史が採用されたのは天平年間（七二九―七四九）ごろとされる」とある。
 - 3 『類聚国史』前編（国史大系5）158頁。「天皇読書」に嵯峨天皇弘仁七年六月己酉：皇帝受史記於文継、至是而畢、「仁明天皇承和二年七月丁巳。天皇御紫宸殿。正四位下菅原朝臣清公侍讀後漢書」、「（承和）十四年…文章博士春澄宿祢善於清涼殿始講漢書」とある。
 - 4 「竟宴」は^{おわ}りに催す宴会の意味で、宮中で『日本書紀』や漢籍などの講義が終わったときなどに、宴を設け諸臣にその書にちなむ詩歌を詠ませ、禄を与えるもの。
 - 5 平安中期の漢詩集。長徳年間（九九五―九九九年）に成立。紀齊名撰。
- 一六巻。巻七・巻九のみ現存。「詠史」の部門に収録された竟宴詠史詩の中において、平安前期の延喜二十二年の作品が最も新しいものであると考えられるが、醍醐朝以降、一条朝までの竟宴詠史詩が見当たらない。なお、嵯峨朝から一条朝までの詩文を収めた『本朝文粹』にも平安中期の竟宴詠史詩が見当たらない。
 - 6 前掲注2、池田昌広「古代日本における『史記』の受容をめぐって」62頁。
 - 7 佐藤真一「菅原道真と父是善―巻一、九「八月十五夜、嚴閑尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲。並序。」を中心に―」（『北陸古典研究』北陸古典研究会編、二〇〇三年一〇月）。堀誠「菅原詠懷人士考」（『早稲田教育評論』第二十四巻第一号。二〇一〇年三月）
 - 8 『漢書』では「世家」を「列伝」に入れている。
 - 9 前掲注2、池田昌広「古代日本における『史記』の受容をめぐって」62頁。実際には、その膨大な量ゆえにより多くの時間を用いた場合もある。例えば、菅原是善が担当した『後漢書』の講読は、天安元（八五七）から貞観六（八六四）にかけて七年間を用いて漸く完了した。
 - 10 竟宴の詩題が誰によって決められるのか、また詩の題材と講書の内容との関係についての記述は見出せない。だが、大学寮においては三史の講書は『日本書紀』と平行して行われており、『日本書紀』の竟宴の儀式は、三史の竟宴から影響を受けているとされている。従って、『日本書

『紀』の竟宴と同じように、史書の講義を担当する博士が講書の内容に照らして詩題を決定する可能性があると考えられる。

11 『史記』は年表である「表」を有する。「書」は、文化・制度の歴史を記述するものであり、『漢書』では「志」と表わす。

12 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中(上)(塙書房、一九八六年) 75 8頁。

13 大塚英子「『文章経国』の比較文学的一考察―勅撰三漢詩集の編纂をめぐって―」(『国文学解釈と鑑賞』志文堂。一九九〇年一〇月) 105頁。

14 前掲注13、103頁。

15 訓読は、吉田賢抗『新釈漢文大系第39巻・史記(本紀下)』(明治書院。一九八五年)に従う。なお、「夫れ籌策を帷帳の中に運らし、勝ちを千里の外に決するは、吾子房に如かず。国家を鎮め、百姓を撫し、饋饗を給し糧道を絶たざるは、吾蕭何に如かず。百万の軍を連ね、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るは、吾韓信に如かず」から、高祖の三傑に対する具体的な評価が見られる。

16 光武帝の儉約と文治との政策については、狩野直禎「光武帝の政治指針」(『史窓』48号。京都女子大学氏史学会。一九九一年)を参照されたい。おな、渡辺義浩氏は、『特集ワイド中国歴代皇帝の覇業と実像』(『歴史読本』844号。新人物往来社。二〇〇九年一〇月)の「光武帝」において「ひとたび滅びた漢を復興し、後世にまで語り継がれる儒教国家

と太平の世を築き上げる」と評価した。

17 『平安時代史事典本篇上』(古代学協会・古代学研究会)の「菓子の変」と「嵯峨天皇」の条を参考。704頁に「この変の性格について、皇位継承争い、藤原式家と北家との対立、貴族官人社会の分裂が指摘され…」とある。

18 嵯峨天皇の事跡については、目崎徳衛『政治史上の嵯峨上皇』(『日本歴史』二八四、昭和49年)笹山晴生『平安初期の政治改革』(『日本歴史』古代三所収。一九七六年)などを参照。

19 詩文の訓読は、中村璋八・島田信一郎『田氏家集全釈』(汲古書院、一九九三年)に従う。また、現代語訳も同書を参照した。

20 木田章義「弁官と放還―『日本紀竟宴和歌』(『文学』1(4)、岩波書店、一九九〇年十月) 130頁。

21 上田設夫「天慶六年日本紀竟宴和歌の世界」(『文学・語学』全国国語国文学会。一九八〇年一〇月)なお、『三代実録』に「天慶六年 親王已下五位已上畢りて至て日本紀の仲聖徳の帝王名有る諸臣を抄出して分け宛つ。太政大臣已下講席に預かる。六位已上各倭歌を作る。自余は当日史を探りて之を作る」とある。

22 小島憲之氏は、詩体・脚韻の視点からすれば、『凌雲集』にある「史記竟宴、賦得大使自序傳」と同じであるため、『凌雲集』結集以前の作品であると指摘した。しかしながら、氏の説、即ち、同じ場で読まれた詠

史詩が、かならず同じ韻、同じ詩体をとるという説に従うと、矛盾が生じるようになった。『文華秀麗集』の詠史詩の詩群は、統一様式、同じ韻をとっていないためである。また、題目からみれば、嵯峨天皇の詩作は、『文華秀麗集』の詠史の部門に収録された他の詠史詩、例えば「賦得季札」と同様に、「賦得十人物名」という形をとっている。だが、「賦得大使自序傳」は、人物名の代りに、史記の列伝の名称をありのままに詩題に入れたのである。なお、題詠とは、各詩人が異なる詩題を採るため、文華秀麗集には、菅原清公が司馬遷の詩題を読んでいることがわかった。こうすれば、嵯峨天皇の作品は、「史記竟宴、賦得大使自序傳」と別の時期に創作された可能性が高いと考えられる。

23 宮中に交替で宿泊して夜の番をすること。

24 『文華秀麗集』の詩文の訓読は、小島憲之『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（岩波書店。一九六四年）に従う。現代語訳も同書を参考にした。

25 角田文衛監修『平安時代史事典本篇下』（古代学協会・古代学研究会。角川書店）266頁。なお、良岑安世の人物について、「優れた人材であった。異母兄弟平城・嵯峨・淳和三代の宮廷に臣下として仕え、順調な昇進ぶちであった」と記している。

26 八〇六年、桓武天皇が崩御して、安殿親王（平城天皇）が即位した。翌年には天皇の異母弟伊予親王が突然謀反の罪を着せられて死に追い込まれること。橋本義彦「『葉子の變』私考」（『奈良平安時代史論集』下

巻。吉川弘文館。一九八四年）11頁-12頁。

27 季札の人物像については、吉田賢抗『新釈漢文大系第85巻・史記五（世家上）』（明治書院。一九七七年）に従う。青木五郎・中村佳弘編著『史記の事典』（大修館書店。二〇〇二年七月）の「季札」の条を参照されたい。

28 式部少輔は、式部省に属する要職であり、式部省は、文官の人事、教育などを司り、大学寮を管轄したという。

29 角田文衛監修『平安時代史事典本篇上』（古代学協会・古代学研究会。角川書店。）「菅原清公」の条を参照。

30 なお、菅原清公が文章博士であった弘仁十二年に、文章博士の官位相当を従五位下に引き上げられ、本来大学寮の博士の筆頭とされてきた明経博士より官位が高くなった。

31 菅原道真の経歴は、川口久雄『菅家文章・後集』（岩波書店。一九六六年）解説を参照。

32 川口久雄校注『菅家文章・後集』（岩波書店。一九六六年五月）補説706頁。

33 菅原道真の詩文の訓読と現代語訳は、川口久雄校注『菅家文章・後集』（岩波書店。一九六六年）、及び堀誠「菅原竟宴詠詠懷人士考」（『早稲田教育評論』第二十四巻第一号。二〇一〇年三月）を参考にした。

第二節 平安前期における日本紀講書

―中国三史の講書との関わりから―

はじめに

上代における日本紀講書は、弘仁・承和・元慶・延喜・承平・康保度の六回に亘って行なわれた¹⁾。この六回の講書の諸問題については、訓詁学や歴史学の分野ですでに多くの研究が蓄積されている²⁾。しかし、平安前期の姓氏問題、官学の変遷、皇統の交代を背景にした歴史学の視座から行われた考察や、日本書紀の訓詁を中心とした訓詁学の視座から行われた考察が中心であり、大学寮で平素より開催されていた中国三史（史記・漢書・後漢書）の講書と日本紀講書との関わりを詳細に検討した上で、日本紀講書の位相を捉える論考は未だに少ない。

近年、梅村玲美氏が『西宮記』における日本紀講書に関する記述と、天皇「御読書」などの漢籍講書に関する記述を比較し、「尚復唱文」・「詠詩之冊」という側面における両者の共通点を指摘し、日本紀講書の儀式

が漢籍の講書のそれに影響された側面を浮彫りにしている³⁾。本節では、このように漢籍の講書との共通点を検討することを通じて日本紀講書の位相の一端を明らかにした梅村氏の研究方法を手がかりとして、中国三史の講書との相違点に視線を向け、双方の独自性を見出すことにより、日本紀講書の位相に新たな光を当てることを企図する。そこで、中国三史及び日本書紀の講書の性格や意義を反映する様々な要素の中でも、殊に相違が顕著である講書の受講者、講書の場所、講書の終了を祝う竟宴の状況に着目し⁴⁾、両者の特徴を対照することにより、双方の平安前期における展開の様相を明らかにし、特に大きな変貌を遂げた元慶度の日本紀講書の意義について再検討したい。

一、講書の受講者

講書の目的や意義は、講書の対象、即ち受講者の特徴を考察することにより、その一端を窺い知ることが可能である。つまり、講書が如何なる人のために行なわれていたのかという問題は、中国三史と日本書紀との講書の意義を明らかにする作業と直接的に繋がっているものだと言え

るのである。本節において、六国史を始めとした史書や、平安前期の詩文集における関連資料を調査したところ、中国三史と日本書紀との講書が、その受講者の構成において顕著な相違を示していることが判明した。中国三史の講書が、奈良時代以降、天皇及び国家官吏の候補生たちを第一義的な受講者としていたのに対して、日本紀講書は、前者において第一義的な受講者であった天皇を除外し、一部の国家官吏を主な講書の対象にしていたのである。さらに、日本紀講書自体は、弘仁・承和度に対し、元慶度以降は、その受講者としての国家官吏の構成上で大きな変貌を見せている。以下では、中国三史と日本書紀との講書の受講者をそれぞれ明らかにし、両者の特質を総合的に考えてみる。

中国三史の講書の受講者

中国三史の講書についてであるが、『続日本紀』宝亀六年（七七五）十月二日条の吉備真備の薨伝には、以下のような記述がある。

天平五年帰朝。授正六位下、拜大学助。高野天皇師之、受礼記及漢

書。

天平五年に帰朝して、正六位の下を授けられ、大学の助に拜す。高野の天皇之を師として、礼記及び漢書を受け給ふ⁵。

つまり、日本の天皇への中国史の最古の講書は、遣唐留学生の吉備真備が帰朝した後、高野（孝謙）天皇の在位期間、即ち天平勝宝元（七四九）年から天平宝字二（七五八）年までの間に遡ることができる。また、三善清行の「意見十二箇条」からは、天平頃に吉備真備が大学寮の学生に三史を学ばせたことが看取される。

至于天平之代、右大臣吉備朝臣、恢弘道藝、親自伝授。即令学生四百人、習五經三史、明法・算術・音韻・籀篆等六道。（『本朝文粹』卷二「意見十二箇条」）

天平の代に至り、右大臣吉備朝臣、道藝を恢弘し、親ら伝授す。即ち学生四百人をして、五經三史・明法・算術・音韻・籀篆等六道を習わしむ⁶。

なお、『続日本紀』天平宝字元年（七五七）十一月九日条に、

勅曰。如聞。頃年、諸国博士医師。多非其才。託請得選。非唯損政。亦無益民。自今已後。不得更然。其須講經生者、三經。伝生者、三史…

勅して曰はく、如聞。^{きくなつく}頃年諸国の博士医師は、多くの其の才に非ず、託請して選を得たり。唯政を損なふのみに非ず、亦民に益すること無し、と。自今已後、^{いまよりのち}更に然るを得ざれ。其經を講ずべき生は三經を、伝生は三史を…

とあるように、高野天皇の退位の前年に、三史を読めることが諸国の伝生（博士）の任命条件として、勅旨によって定められるようになったのである。

要するに、中国三史については、天平期の朝廷による唐の文化や政治制度を受容しようとする趨勢の中で、中国から渡来して間もなく、天皇と官吏の候補者を対象とした講書の伝統が形成されていったと考えられる。

平安朝に至るまで、こうした中国三史の講書の伝統は継承された。

まず、天皇への三史講書についてであるが、正史を紐解くと、『類聚国史』弘仁七（八一七）年六月十五日条に嵯峨天皇が史記を、『続日本後紀』承和二（八三五）年七月十四日条と同書承和十四（八四七）年五月二十七日条に仁明天皇が後漢書と漢書を、『三代実録』貞観十七（八七五）年四月二十八日条に清和天皇が史記を、『日本紀略』寛平三（八九一）年四月九日条に宇多天皇が史記を、同書延喜六年（九〇六）五月十六日条に醍醐天皇が史記をそれぞれ受講したという記事が見られる。

これら天皇が講書を受けた時点の年齢を見ると、嵯峨天皇が四十歳、仁明天皇が二十五歳と三十七歳、清和天皇が二十五歳、宇多天皇が二十四歳、醍醐天皇が二十一歳であるため、天皇が成人後自ら三史の講書を行なわせたのではないかと思われる。また、清和天皇については検討する余地があるが、その他の天皇、つまり嵯峨天皇、仁明天皇、宇多天皇、醍醐天皇は何れも積極的に親政の姿勢を取った天皇であるとされている。彼らは、国政を自ら行なうために、中国三史の学習が必要なものであると自覚したのではなかろうか。

一方、平安朝に入ると、国家官吏の候補生たちは中国三史の講書を受

けることが制度的に規定されていた。天長元年（八二四）八月二十日の太政官符には、

緬尋古典、歴覽前王、勞於求賢、逸於経国。伏望、諸氏子孫、咸下
大学寮、令習読経史。学業足用、量才授職者。宜五位已上子孫、年
廿以下者、咸下大学寮。『本朝文粹』卷二〇五 「意見封事 公卿
意見六箇條」

古典を緬尋し、前王を歴覽し、求賢に勞し、経国に逸る。伏して望
むらくは、諸氏の子孫、みな大学寮に下して経史を習読せしめ、学
業用うるに足れば、才を量りて職を授けんことを、よろしく五位以
上の子孫にして年二十より以下のもの、みな大学寮に下すべし。

とある。つまり、五位以上の貴族たちの子孫は大学寮に入り、経書と共
に史書を勉強し、卒業後は才能に応じて官吏に登用する国家の政策がこ
こで取り上げられているのだ。殊にその根本的な目的については、「求賢」
「経国」にあるとも明言されており、きわめて政教的なものである。

また、『延喜式』における「大学式」に関する定めには、以下のように

ある。

凡擬文章生、以廿人為限、補其闕者。待博士挙、即寮博士共試一史
文五条。以通三以上者補之。
凡そ擬文章生、廿人を以て限りと為せ、其の闕を補せんには、博士
の挙を待ちて、即ち寮・博士共もに一史文五条を試し、三以上に通
ずる者を以て之れに補せ⁷。

このように、大学寮の寮試では史記・漢書・後漢書のうち、一史の五条
を読ませ、三条以上に通じた者を合格とすると定められている⁸。なお、
久木幸男氏が『日本古代学校の研究』において、「紀伝道入学者は明経道
などに比べて若年で入内している上に、極位（最高到達位階）も高く大
半が四位に達している。その中でも、史学を学んだ人は五十歳代後半に
従四位上に達しているが、文学を学んだ人は平均五年位遅れている。」と
述べているように、三史に通じた者は、朝廷において相当重んじられた
ようである。

さらに、三史の知識は、以上で見てきたように、官吏候補生が官吏に

なる上で重んじられると同時に、その生涯を終えた後も、彼を評価する基準の一つとして重視されているのである。事例が多いため、二三例を挙げることに留めるが、例えば、『続日本後紀』承和七（八四〇）年四月二十三日の条の藤原常嗣の薨伝には「少遊大学、涉獵史漢（少して大学に遊び、史漢を涉獵す）」とある。また、『続日本後紀』承和十（八四三）年六月十一日の条の朝野鹿取の薨伝には「少遊大学。頗涉史漢（少して大学に遊び、頗る史漢に涉り）」と、『三代実録』貞観三（八六一）年九月二十四日の条の豊階安人の薨伝には「涉読史伝。最精漢書（史伝を涉読す。最も漢書に精ずる）」という記述があるように、史記・漢書・後漢書に精通することが、聡明な官吏の素質として大いに評価されていたことが分かる。

こう考えると、天平期から平安初期までの中国三史の講書は、中国的な律令国家の政治をより円滑に運営するための、天皇から官吏にわたるまでの広範囲の受講者を有する国家的事業であると言っても過言ではなからう。

日本紀講書の受講者

一方、日本書紀は、天皇の教養の書物の範囲から除外され、国家官吏の養成機関である大学寮の教科書にも採用されていない。その講書は、ただ一部の官人のみを受講者の対象としていたのである。中国三史の講書の対象との相違から考えると、日本書紀の講書が、天皇、国家官吏が国家政治を運営するにあたり不可欠であると考えられた上で行なわれた行事ではないとは言えよう。

まず、初回の講書と考えられる弘仁度の日本紀講書についてであるが、『日本後紀』弘仁三（八一二）年六月二日条に、以下のような記述がある。

是日、始令参議從四位下紀朝臣広浜・陰陽頭正五位下阿倍朝臣真勝等十余人讀日本紀。散位從五位下多朝臣人長執講。

是の日、始めて参議從四位下紀朝臣広浜・陰陽頭正五位下阿倍朝臣真勝等十余人をして日本紀を讀ましむ。散位從五位下多朝臣人長執講す。

また、『日本書紀私記』（甲本）（『弘仁私記』とも）には以下のようにある。

冷然聖主、弘仁四年在祚之日、愍旧説將滅、本紀合訛。詔刑部少輔從五位下多朝臣人長、使講日本紀。即課大外記正六位上大春日朝臣穎雄、民部少丞正六位上藤原朝臣菊地麻呂、兵部少丞正六位上安倍朝臣藏繼、文章生從八位上滋野朝臣貞主、無位嶋田臣清田、無位美努清庭等受業、就外記曹局而開講席。

冷然聖主弘仁四年在祚の日、旧説の將さに滅びむとし、本紀の訛りを合めるを愍ふ。詔して刑部少輔從五位下多朝臣人長をして日本紀を講ぜしむ。即ち課大外記正六位上大春日朝臣穎雄、民部少丞正六位上藤原朝臣菊地麻呂、兵部少丞正六位上安倍朝臣藏繼、文章生從八位上滋野朝臣貞主、無位嶋田臣清田、無位美努清庭等受業し、外記曹局に就きて講席を開く¹⁰。

受講者の構成は、『日本後記』と『日本書紀私記』では一致しない箇所があるが¹¹、それぞれ記した受講者の官位を見ると、公卿と言えるの

は参議の紀広浜一人しか見当たらない。陰陽頭正五位下の安部真勝以外、六位及び六位以下という下級官人が殆どである。

また、承和度の受講者に関する史料が見当たらないが、「承和度の開講は中務省の実務官僚に故事を知らしめるため」と関晃氏に指摘されるように¹²、承和度も実務官僚たる下級官吏が受講者の中心であることがわかる。

先行研究によりすでに指摘されてきたように、弘仁度、承和度の講書は、平安初期に起こった氏姓問題にその開催の背景がある。なお、薬子の変や承和の変といった皇統交代の歴史的イベントと緊密に関連しているという見解もある¹³。これらの論考の、特別な時代背景のもとで、各時期に行われた講書が何等かの目的を有するという指摘は、日本紀講書が一部の特別な受講者に対しての講書であることを裏付けられるものであろう。

さらに、元慶期を境として、受講者の身分構成には大きな変化が生じてくる。『三代実録』における三つの記述を見てみよう。それぞれ開催・再開・終了後の記述である。

元慶二年（八七八）二月二十五日条

於宜陽殿東廂、令從五位下行助教善淵朝臣愛成、始讀日本紀、從五位下行大外記嶋田朝臣良臣為都講、右大臣已下參議已上、聽受其說。宜陽殿東廂に於て、從五位下行助教善淵朝臣愛成をして、始めて日本紀を読ましめ、從五位下行大外記嶋田朝臣良臣を都講と為しき。右大臣已下參議已上その説を聽受しき。

元慶三年（八七九）五月七日条

令從五位下守図書頭善淵朝臣愛成、於宜陽殿東廂、讀日本紀。喚明經紀伝生三四人為都講。大臣已下毎日便開讀。前年始讀、中間停廢、故更讀焉。

從五位下守図書頭 善淵朝臣愛成をして、宜陽殿の東廂に於て日本紀を読ましめ、明經紀伝生三四人をめして都講となし、大臣已下毎日開讀しき。前年始讀み、中間にして停廢す。故に更に始め讀みき。

元慶六年（八八二）八月二十九日条

於侍從局南右大臣曹司、設日本紀竟宴。先是、元慶二年二月廿五日、於宜陽殿東廂、令從五位下助教善淵朝臣愛成、讀日本紀。從五位下

大外記嶋田朝臣良臣及文章明經得業生學生通都講。太政大臣右大臣及諸公卿並聽之。

侍從局の南右大臣の曹司に於いて日本紀の竟宴を設けき。是より先、元慶二年二月二十五日、宜陽殿の東廂、從五位下助教善淵朝臣愛成をして、始めて日本紀を読ましめ、從五位下大外記嶋田朝臣良臣、

及び文章明經得業生學生^{たが}数人通ひに都講となり、太政大臣右大臣及諸公卿並びに之を聽き、五年二月二十五日講竟りき。

傍線部から、元慶度の日本紀講書では、大臣以下、參議以上、所謂公卿が受講者であり、下級官吏が講書の受講者であつた弘仁・承和度と異なっていることが分かる。

ここで二つのことに注目したい。一つは、幼帝の陽成天皇の参加が確認できないことに加え、延喜講書のように宣旨が出された形跡もない点である。そのため、日本紀講書を開催させることを決めたのは、政治運営の実権を握っている摂政の藤原基経である可能性が高いと考えられる。これに関しては、玉井力氏が、幼帝の儀式における役割について、「幼帝であっても主宰せねばならない事柄は、神事・儀式を中心として少なく

ない。それは権威の部分、つまり支配者層統一の思想的なよりどころとなる行為は、摂関の設置とは関わりなく天皇に残されていたからである¹⁴」と述べている。このように考えると、元慶年間、陽成天皇が日本紀講書という儀式から疎外されたことは、かなり興味深い。摂政の基経は王権代行者の立場、ひいては自分を天皇の立場に引き換えて講書の儀式を主催しているのではないかと考えられる。

もう一つは、元慶度の講書に参加する者、即ち、受講者、講書者、傍聴者らが一つの政治の世界を構成していることである。その中で、最も身分の高い人物は基経である。彼は、講書の勅が下った元慶二年の時点では摂政右大臣であり¹⁵、講書が再開された元慶三年の翌年十一月に関白に補任され、同年十二月には太政大臣に任ぜられている。また、受講者には、源多をはじめとした公卿たちがいると同時に、太政官の中で実務を扱う下級官人は陪席の立場に、官吏の予備軍である大学寮の学生は講書の助手の立場にある¹⁶。基経、及び彼を擁護する者たちは、講書の場において基経を頂点とした世界を形成したと考えられる。

これらは、基経が自邸で文人を招き、文事を開催したことを思わせる。滝川幸司氏は「藤原基経と詩人たち」の論考において、「宮廷詩宴は、天

皇を賛美する詩が詠まれることで、天皇を頂点とする社会の秩序を認識させ、君臣の紐帯を再確認させる機能をもっていた」と述べており、「基経は自らを主とし奉仕する官人達が参集する極めて政治的な場を作りあげようとしたことになろうか¹⁷」と指摘している。この説に依拠し、元慶六年における基経を中心とした日本紀講書の政治的な意義を認めることができるだろう。

すなわち、受講者に着目すれば、元慶度の日本紀講書は、藤原基経が最高官位者として受講しており、また彼を囲む官人たちが共に参加することで、基経を頂点とした政治的世界が形成されていると言えよう。これが、天皇・官吏の候補者（大学寮の学生など）をそれぞれ対象としている中国三史の講書、或は下級官吏が殆どの受講者であった弘仁・承和度の日本紀講書には窺えない特質であると言ってもよからう。

二、講書の場合

平安京の都市構造は、天皇を頂点とした律令国家の秩序に基づく空間的秩序を有するものである。そのために、講書対象の身分によって、講

書が行われる場所は異なる。これは、公卿を講書の主要な受講者とした内裏における日本紀講書を検討する際に、念頭に置くべき重要なポイントである。

中国三史の講書の場所

天皇を対象とした中国三史の講書は、内裏で行われる。以下は、それを明記した史料である。

『続日本後紀』承和二年（八三五）七月十四日条

天皇御紫宸殿、正四位下菅原朝臣清公侍読後漢書。数日之後不遂而輟。

天皇、紫宸殿に御して、正四位下の菅原朝臣清公、後漢書を侍読す。数日之後、遂げずして輟む。

『続日本後紀』（卷七十七）承和十四年（八四七）五月二十七日条

皇帝引文章博士春澄宿祢善繩於清涼殿。始読漢書。

皇帝、文章博士春澄宿祢善繩をして清涼殿に於て、始めて漢書を読ましむ。

紫宸殿は、内裏内郭の南部にある正殿であり、国家儀式などが行われる公的な空間を構成した殿舎で、当時の国政の中心の場であった¹⁾。そして、『三代実録』の貞観十三年二月十四の条に、

承和以往、皇帝毎日御紫宸殿、視政事。仁寿以降、絶無此儀。

承和以往、皇帝毎日に紫宸殿に御して政事を視給ふ。仁寿以降、絶えて此の儀が無し。

とあるように、仁明天皇から文徳天皇までは、天皇は毎日紫宸殿に御して聴政を行っていた。これと同時期に後漢書の講書が行なわれたのである。即ち、中国史の講書が国政と深く関わっていたことが窺えるのだ。

清涼殿は、紫宸殿の西北側に位置しており、嵯峨朝・淳和朝からそこで仏教の行事・内宴・曲宴が開催されたという記事がみられる¹⁾。ただ、『日本後紀』弘仁十四年（八二三）十一月十三日条に、

右大臣正二位藤原朝臣冬嗣・大納言従二位藤原緒嗣等、於清涼殿口
奏言…天皇勅答…

右大臣正二位藤原朝臣冬嗣・大納言従二位藤原緒嗣等、清涼殿に於
て、口奏して言さく…天皇勅答すらく…²⁰

とあるように、弘仁年間には、嵯峨天皇が大嘗祭についての公卿の口頭
奏上を清涼殿において聞いていたこともある。清涼殿は、紫宸殿に比べ
私的な空間と見なされるが、弘仁年間には政治的な場として用いられる
ようになったことは否定できない。

要するに、九世紀前期における天皇への中国三史の講書は、内裏の公
的な空間で行なわれていた。これは、天皇自身が三史の講書を国家政事
の運営と繋がる重要な行事として考えていたことを物語っている。

また、中国三史は、平安時代では大学寮の紀伝道の教科書であった。
そのため、大学寮の北堂で教授されると同時に、私学の発達により、大
学寮教育の補助的性格を有した大学別曹の勸学院や、菅家の私塾などに
おいてもその講書が行われるようになった²¹。

大学寮は、朱雀大路の東、二条大路の南、壬生大路の西、三条坊門小
路の北に当たる四町の区域を占めており、大内裏の南側に位置している。
勸学院は、坊城小路の東、壬生大路の西、姉小路の南、三条大路の北に
位置しており、大学寮の南側にあたる。なお、菅家の私塾は、道真の「書
斎記」(『菅家後集』)に「東京宣風坊に一家あり」とあるため、左京五条
に位置するとされている²²。つまり、国家官吏の候補者としての学生を
対象とする講書は、国家政治の場である大内裏の外側で行われているこ
とが明らかである。

最後に、九世紀に公卿が内裏において中国三史を受講した事例も確認
してみよう。島田忠臣の詩作「右丞相の省中の直廬に於て史記を読み竟
りぬ。史を詠じて「高祖」を得たり」(『田氏家集』37)から、貞観三
(八六一)年から六(八六四)年までの間のある時期に、当時の右大臣
の藤原良相の「省中直廬」、即ち内裏の中において、史記の講書が行われ
たことを推測することができる。『三代実録』貞観九(八六七)年十月十
日条の藤原良相の薨伝によると、

及於弱冠。始遊大学。雅有才弁…愛好文学之士。挾大学中貧寒之生。

時賜綿絹。冬天慘烈。多縫造被。遍賜四学堂夜宿者。時節喚学生能文者。賦詞賚物数矣。

弱冠に及びて、始めて大学に遊び、雅より才弁有り…文学の士を愛好し、大学の中の貧寒の生を忤びて、時に綿絹を賜ひ、冬天慘烈なれば、多く被を縫ひ造りて、遍く四学堂に夜宿する者に賜ひ。時節学生の文を能くする者を喚して、詞を賦せしめ、物を賚くこと数ありき。

とあり、藤原良相が若くて大学寮に入学し、学業に優れており、文学および文学者を愛好する人物であることが分かる。「省中直廬」における史記講書は、恐らく藤原良相、およびその近習のために行われたものであり、私的な性格を有していると思われるが、右大臣の内裏において直廬が設置されたこと、また内裏において史記の講書がされたのは、清和天皇の政治的立場と、前期摂関政治の展開に起因するだろう。これについては、鈴木琢郎氏が、良相の娘の多美子が清和天皇の最初の女御であるという要因を指摘し、「藤原良房の内裏直廬を清和の代りに内裏で政務を執るための施設と捉えたが、良相の中重の曹司もこれと関連して理解す

べきである。良相は幼帝清和の政務代行を行なっている良房のもとで、右大臣としての政務を執るのである、すなわち良房・良相の兄弟間での政務とは、「天皇―大臣」間の政務処理に相当する²³」と述べている。この説に従えば、内裏の場における公卿を対象とした講書の開催が可能となったことは、前期摂関政治の展開と緊密な関連を有するといつてもよからう²⁴。

平安前期における中国三史の講書の場所の特徴は、以下のように纏められる。まず、天皇への講書が内裏で行なわれるのに対して、国家官吏の予備軍と考えられる者達を対象とする講書は、内裏から遠く離れた場所、即ち大内裏の東南側にある大学寮・勸学院・菅家私邸で行なわれていたことが明らかである。なお、公卿を受講者とする講書は極めて稀であり、特別の事情があるものとして認識すべきだと考えられる。

天皇を頂点とした律令制の国家秩序は、三史講書の空間秩序にも現れていると言つて過言ではない。換言すれば、内裏を国政の中心とした九世紀の平安京の都市構成の空間秩序に基づき、三史講書の場所を確認することで、受講者の政治的地位を窺うことができるのだ。

日本紀講書の場所

こうした中国三史の講書と比較して、日本紀講書の場所についてはどうであつたろうか。結論から言えば、弘仁・承和度と元慶度との間には大きな変遷が認められる。殊に、藤原基経を中心とした元慶度の講書については、新たな視座からの考察が可能である。

弘仁度は、前述の『日本書紀私記』にあるように、講書の場所が「外記曹局」となっている。外記曹局は、内裏外郭の東門にあたる建春門の東側に位置している。また、承和度は、『続日本後紀』承和十年（八四三）六月一日条に、

令知古事者散位正六位上菅野朝臣高年、於内史局。始読日本紀。

古事を知る者の散位正六位上菅野朝臣高年をして内史局に於て、始めて日本紀を読ましむ。

とあるように、内史局²⁵であつたことが分かる。ただし、内史局の場所については、未だに一致した見解が見出せない。関晃氏は内史局を「釈

紀講例の建春門南腋曹局と同所であろう²⁶」と指摘し、その場所が内裏外郭の外側に位置することを示唆している。一方、橋本不美男氏は、内史局が内記局の唐名であり、「宜陽殿の東にあつた内記局の詰所²⁷」と述べ、内裏内郭の東門にあたる宜陽門の南側にある内記局と同所であると指摘している。両者の説は異なりながらも、内史局が内裏内郭の外側にあるという点では一致している。

だが、元慶度を画期として、日本紀講書の場所は内裏内郭の外側から、内裏内郭にある宜陽殿に移され、それ以降も宜陽殿東廂で行なわれるのが慣例となった。ここで以下の三点に注目したい。

一つは、内裏内郭は本来男性官人が入ることのできない空間であることだ。吉川真司氏の考察によると、飛鳥時代には、内郭に男性官人が立ち入る場合、闈司により天皇の許可を得るべきであるとされていた。しかし、八世紀末の延暦年間に、内裏内郭は公卿が日常的に詰める場所となったのである²⁸。また、『養老令』の「宮衛令」によれば、そうした特権を持つ男性官吏は、五位以上の貴族に限られている。なお、飯淵康一氏らによる論考「平安宮内裏承明門・日華門の儀式時に於ける性格」が言及しているように、内裏内郭における儀式には、「立太子」「立后」

「任官式」「讓位」「天皇元服・拝賀」のみに限られており、六位以下の官人の参加が許されている。しかし、たとえその参加が許可されていたとしても、「五位以上は承明門内・南庭、六位以下は承明門外に列立する²⁹」とあるように、六位以下の官人は内裏内郭に立ち入れないことが分かる。しかしながら、元慶度の講書は、「喚明經紀伝生、三四人為都講（明經紀伝生三四人を喚して都講と為し）」とあるように、無官位の大学寮の学生も参加しており、毎日内裏で開催されている。その際は、彼ら在内裏に入るために天皇の許可を得るなど、ある程度の手続きを要したのであろう。このように考えると、基経がわざわざ内裏の外側に位置している場所、例えば弘仁・承和度の講書が用いた外記庁・内史局ではなく、決して出入りが自由とは言えない内裏内郭において講書を行なわせたことは、彼にとって何らかの特別な意義を有しているといえるのではなかろうか。

もう一つは、宜陽殿の政治的な空間としての性格である。宜陽殿は、紫宸殿の東にある殿舎である。その母屋には累代の御物が収められ、また母屋の三面に廂がある。北廂の西半は次将座、東半は脇陣である。西廂の南部は上古の左近陣、北部は公卿座である。この公卿座は、天皇不

出御の場合の、公卿の控所である³⁰。日本書紀の講書が行われた東廂には、北に大臣の宿、その南に上官侍、南東隅には議所があり、叙位と除目の儀が行なわれる。叙位と除目の儀は、何れも親王や国家官吏の関心事であり、国家政治機構の人的構成、ひいては国家政治の行方を左右する重大な政事である。

さらにもう一つは、宜陽殿でこそないものの、宣仁門を通じて宜陽殿と連絡している紫宸殿の東廊が、弘仁年間（或いは元慶年間）以降、公卿の議定である陣定が行なわれる場となったことである³¹。元慶年間の宜陽殿は、国家政治の中心の場にきわめて近隣している空間である。これは、前述した天皇への史記の講書の行なわれた紫宸殿が、九世紀の初葉における国政の中心であったことを思わせる。

要するに、中国三史の講書においては、講書の場所は、受講者の身分の相違によってそれぞれ内裏の内郭と大内裏の外側とに峻別される。これは、天皇を最高権力者とした律令国家の秩序を厳守したものである。また、弘仁年間には内裏内郭の外側で開催された日本紀講書の場所は、元慶期には宜陽殿という国政上の重要な場所に移された。これは、基経が、摂政、後に関白の位に就き、天皇の権力と匹敵するところか、それ

を超越するほどの政治力を有したために実現したことであろう。朝廷の権力紛争や政治変動は、かなりの程度国家の文事に投影されているものと思われる。

こうして中国三史と日本書紀との講書の場所の特徴を検討することにより、元慶度の日本紀講書が、藤原氏の政治支配力の増強という時代の趨勢を忠実に反映しているものであることがより一層明白になろう。

三、竟宴の状況

竟宴は、講書の終了後に行なわれる宴会である。その開催の有無と、開催された際の様子の記述からは、講書が重要視されていたことが窺える。中国三史と日本書紀との講書は、竟宴の有無、竟宴の場所、竟宴での文学様式などの側面でそれぞれ特徴を有する。殊に、元慶度講書の終了を祝う日本紀竟宴の初回の開催は、同時代の中国三史のそれと比較すると、革新的な性格が顕著に見られる。

中国三史竟宴

まず、日本紀竟宴より先に行なわれてきた中国三史の竟宴の状況を見てみよう。

『凌雲集』（弘仁五（八一四）年）に「史記竟宴、賦して大使自序傳を得たり」の竟宴詠史詩が収められていることから、史記の竟宴は、『凌雲集』成立の弘仁五年以前にすでに開催されていることが分かる。『文華秀麗集』（弘仁九（八一八）年）「詠史」の部門には、嵯峨天皇の作品を始めとした四首の竟宴詠史詩が見られる。ただし、弘仁期における中国三史の竟宴の場景に関する具体的な記述が見当たらないため、史記の竟宴に嵯峨天皇が参加していたといっても、竟宴の場所が内裏における公的な場であったとは断定できない。弘仁以降は、貞観三年から六年までの間に、藤原良相の「省中直廬」における史記竟宴が挙げられるが、それはやはり前述したように、藤原良相のために開催された私的文事と見なすべきであろう³²。

中国三史の竟宴の様子が初めて詳述されているのは、貞観六（八六四）年に行われた後漢書竟宴である。菅原道真の「八月十五日嚴閑尚書授後漢書畢。各詠詩得黃憲」の詩序には、以下の様な記述がある。

嚴君知斯文之直筆、謂斯文之良吏、遂引諸生、校授芸閣。…遊宴之盛、亦復如是。子墨客卿、翰林主人、請各各分史、以詠風流云爾
嚴君斯の文の直筆なるを知り、斯の文の良吏たるを謂ひ、遂に諸生を引き、芸閣に校授す。…遊宴の盛なること、亦復是の如し。子墨客卿、翰林主人、請ふ各々史を分ち、以て風流を詠ぜんと云ふこと
しかり³³⁰。

以上の記述から、公卿が竟宴に参加したことが確認でき、また、これが芸閣即ち菅家廊下という私的な場所で行なわれたことも分かる。

また、元慶六年の春に開催された後漢書の竟宴を見てみよう。これは同年に行われた日本紀竟宴より数か月ほど早いものであった。当時の竟宴の経緯などは、紀谷長雄の手によって綴られた「後漢書竟宴、各史を詠じて龐公を得たり」の詩序と、菅原道真の「北堂にて澆章の宴の後、聊かに所懷を書して、兵部田侍郎に呈し奉る」という記述から伺うことができる。前者は竟宴の場所を明記していないため、後者を引用する。

北堂澆章宴後、聊書所懷、奉呈兵部田侍郎。

誇著槐林來客尊 祇迎宰相到黃昏

伶人枕鼓池頭臥 胄子懷詩壁下蹲

何更先談聞宿老 自然後幾發雲孫

公卿乍會初遊宴 幸甚生涯不測恩 『菅家文章』90)

北堂にて澆章の宴の後、聊かに所懷を書して、兵部田侍郎に呈

槐林に誇著して來客尊し。祇みて宰相を迎へて黃昏に到る。

伶人は鼓に枕して池の頭に臥す。胄子は詩を懷にして壁の下に蹲る。

何ぞ更めて宿老に先談を聞かむ。自然の後幾 雲孫を發かむ。

公卿乍ちに會ひて初めて遊宴す。幸甚なり 生涯測らざる恩。

題目が示すように、この竟宴は大学寮の北堂で催されている。また、「祇みて宰相を迎へて黃昏に到る」、「公卿乍ちに會ひて初めて遊宴す」とあるように、宰相（参議の唐名）をはじめとした公卿たちも参加しているのである。川口久雄氏の考察によると、そのうち、参加者のうちで官位

の最も高いのは民部卿藤原冬緒と治部卿在原行平である³⁴。

さらに、元慶以降の中国三史の竟宴については、菅原道真の「勸学院、漢書竟宴。史を詠じて叔孫を得たり」、「扶桑集」の「詠史」の部に収められた、菅原淳茂の「北堂、漢書竟宴、史を詠じて高祖を得たり」、橘在列の「北堂、漢書竟宴、各史を詠じて淮南王劉安を得たり」、紀長谷雄の「北堂、史記竟宴、各史を詠じて孫通を得たり」、菅原文時の「北堂漢書、史を詠じて路溫舒を得たり」、源訪の「北堂漢書、史を詠じて李廣を得たり」、紀有昌の「北堂、漢書竟宴、史を詠じて蘇武を得たり」の詠史詩の題目から分かるように、勸学院や大学寮の北堂において開催されていたのである。

つまり、弘仁期以降は、中国三史の講書の終了後に竟宴を行うことが伝統であった。また、場所から考えると、貞観以降は、公卿の参加は見られるものの、大学寮にある北堂、菅家の私邸という政治とは直接関係のない場所において行なわれることが殆どであった。

日本紀竟宴

日本紀竟宴はどうか。まず、竟宴の有無の側面を見てみよう。九世紀前半においては、中国三史の講書が竟宴を伴って行われたのに対して、弘仁・承和度の日本紀講書の終了後は竟宴が開かれなかったことが明らかである。元慶度に至り、初めて侍従局の南にある右大臣の曹司において盛大な竟宴を開催することになり、それ以降の延喜度・天慶度も侍従所において竟宴を行なっていたことがわかる。以下では、日本紀竟宴に関する史料を幾つかあげながら検討を加えてみる。

元慶度については、『三代実録』元慶六年（八八二）八月二十九日条に、

於侍従局南右大臣曹司、設日本紀竟宴。

侍従局の南の右大臣の曹司に於て日本紀の竟宴を設けき。

との記述がある。侍従局は、外記庁（建春門の東側に位置する）の南に位置している³⁵。右大臣の曹司は、この侍従局の南に位置しており、右大臣の源多が外記庁の政務を迅速に扱うために設置された曹司であると考えられる。ここで、注意すべきなのは、平安初期より、本来公卿の会議が行われるはずの太政官庁では会議が行われず、実際には外記庁で実

施されていたため、外記庁は、太政官庁の機能を有していたといえる点である³⁶。

延喜度については、『日本紀略』延喜六（九〇六）年閏十二月十七日条に、

於侍従所、日本紀竟宴、每人分史詠歌。

侍従所に於て、日本紀竟宴、每人史を分かち歌を詠じき。

とある。また、天慶度の記述と考えられる『西宮記』「臨時二」の中の「始読日本紀事」には、

二三年間、講読竟。定日、設宴座侍従所。

二三年の間に、講じて読み竟りぬ。日を定め、宴の座を侍従所に設く。

とある³⁷。この侍従所は、前述した侍従局（南舎とも）のことであり、外記庁と渡廊を通して繋がっている³⁸。

要するに、九世紀後半において、中国三史の竟宴が政治と直接関係のない場所で行われたのに対し、日本紀講書の終了後は、その竟宴を政治の場において開催させたのである。

さらに、文学的要素から考えると、日本紀竟宴は、同時代の中国三史のそれを意識しながらも、新たな性格を示している。

竟宴の詩序の執筆者の身分から考えれば、貞観六年の漢書竟宴の詩序を書いた菅原道真は、得業文章生であった。また、元慶六年の漢書竟宴の詩序を書いた紀長谷雄は、その一年前まで文章得業生であり、当時は讃岐権少目に任じられたばかりであった。これに反して、三回の日本紀竟宴の序文は、それぞれ正六位上の大内記の菅野惟肖、三統理平、橘直幹が書いたものである。つまり、序文を書く者の資格を考えると、後者のほうがより儀式を重視しているのではないかと考えられる。

竟宴の文学様式については、中国三史の竟宴では漢詩を創作するのに対し、日本紀竟宴では、和歌を通じて、日本書紀に登場した神や天皇などを詠じるのである。これについて、講書の目的が日本書紀の訓読にあるという前提を強調し、訓読の効果を確認するために、竟宴において日本語で綴る和歌の文学様式を採用したと論じている研究者は少なくない

39。しかしながら、平安時代に、毛詩などの経書の講書は、訓読が行わ

れているにもかかわらず、その竟宴の場では漢詩の文学様式を採用しているのである。そのため、訓読という講書の目的が、竟宴の場で和歌の文学様式を採用させた決定的な原因であるとは言い難いのである。本節では、この原因を、元慶度の日本紀講書で、天皇親政の弘仁・承和期における文学行事とは全く異なる世界を構築しようとした基経の意図に求めたい。なぜかという、文学様式上での革新のみに止まらず、元慶度の日本紀講書は、講書の受講者と開催場所、竟宴の開催の有無とその場所など多くの要素において、すべて中国三史の竟宴の先例に従わない、革新的な様相を呈しているためである。

これらのことは、基経が摂関政治を進行させ、自分を頂点とした新たな秩序を作り出そうとする意欲を物語るものだと考えられる。殊に、『西宮記』「臨時二」の中の「講日本紀博士等例」に、

元慶六年。…式部卿親王・太政大臣等、皆被出詠哥也。

元慶六年。…式部卿親王・太政大臣等、皆な詠める哥を出さるるなり。^{いた}

とあるように、太政大臣の基経は親王や官人と共に参加し、また共に和歌を詠んでいる⁴⁰。これは、弘仁年間に行われた史記竟宴で嵯峨天皇を中心とした「君唱臣和」の世界と相似した色彩を帯びている。基経は、

日本紀竟宴において、天皇が主催する詩宴と同じ構造で、天皇の部分に自分を置き換えようとしたのであろう。陽成天皇が元慶六年の春にすでに元服を迎えたにもかかわらず、朝廷の中堅の政治集団から除外されたことを考えあわせると、元慶度の竟宴は、やはり基経の天皇権力への対抗意識を表しているものだと考えられよう。基経は、養父の藤原良房の遺志を継ぎ、藤原北家を中心とした新たな政治形態の形成に大きな役割を果たし、摂関政治史における極めて重要な人物であった。元慶六年よりさほど遠くない元慶七年に起こった陽成天皇の廃位事件は、彼が従来の中央集権的律令国家の秩序を破壊し、新たな摂関政治の秩序を創出するための一つの決定的な政治行為であろう。

要するに、中国三史の竟宴の状況と比べてみると、日本紀竟宴が中国三史のそれを模倣するというより、むしろ革新を求めようとした傾向が大きかったことが窺い知れる。この傾向が基経の政治的野心を反映して

いると言える。

おわりに

以上、中国三史・日本書紀の講書との関わりに注目しつつ、両者のそれぞれの特徴を総合的に考察し、平安前期、特に弘仁度・承和度・元慶度の日本紀講書の位相を再検討してきた。ここで改めて要点をまとめる。

中国三史の講書は、中国的律令国家を円滑に運営させようとする政治上の必要に応じて重んじられていたため、その講書は、嵯峨天皇、仁明天皇などのような親政姿勢を示した天皇、及び国家官吏の予備軍という広範囲の人々を中心的な受講者とするものになっている。それぞれの講書の場所は、平安京の都市構造の空間的秩序に厳格に即しており、天皇を頂点とした律令国家の社会秩序を反映していることが了解される。そのうち、貞観年間に右大臣の藤原良相が内裏にある曹司において史記の講書を行ったという事例も存在しているが、それは、前期摂関政治の進行に原因があると考えられ、講書の場所の空間秩序が各権力の消長による社会秩序の変化を表わす、という原理には背いていないと考えられる。

他方、九世紀の日本紀講書は、ある特定の時代背景のもとで、一部の国家官吏のみを対象としている。殊に、摂関政治が進んでいる元慶年間における日本紀講書は、弘仁度・承和度の先例を破り、その講書の場所を内裏外郭から、内裏における重要な政治の場である宜陽殿に移行させ、その場で天皇の存在を排除し、基経を中心とした、高級官吏（公卿）、下級官吏（弁・少納言・外記・史・内記など）、及び官吏の予備軍（大学寮の学生）から構成される政治の世界を形成している。また、中国三史講書の終了を祝うための竟宴が政治の場と直接に関連していない私的な場で開催されているのに対して、日本紀講書は、元慶度を境にし、侍従所の南の右大臣曹司という政治的な場所において初めて初めて竟宴を開催し、文様式の選択などの面においても、中国三史の竟宴の先例に従うことなく革新性を打ち出しているのである。こうした斬新さを求める傾向は、基経が朝廷の従来の秩序を破り、自分を頂点とした新たな世界を作り出すとする野心と関連しているのであろう。元慶度の日本紀講書は、当時の政治状況が色濃く投影されており、きわめて特別な意義を有するものだと考えられる。

本節では、中国三史の講書との関わりという視座から、日本紀講書の

位相に新たな光を当てることを試みた。講書の性格を反映する様々な視座から、双方の平安前期におけるそれぞれの展開の様相を同時に浮彫りにした。概観するに、中国的律令制を抛り所としている中国三史の講書は、律令制国家の政治の構築のためのオーソドックスな道を歩んできたが、前期摂関政治が進展するにつれ、日本紀の講書は、藤原氏を中心とした政治集団においてより強い関心が寄せられている。こうした中国三史の講書と日本紀講書との九世紀におけるそれぞれの展開から、それらと緊密に関わる漢詩文学と日本国風文学との行方を展望できると考えられる。

〔注〕

- 1 『日本後紀』（弘仁三年六月二日の条）、『続日本後紀』（承和十年六月一日の条）、『三代実録』（元慶二年二月二十五日の条）、『日本紀略』（延喜四年八月二十一日、承平六年十二月八日、康保二年八月十三日の各条）にそれぞれ日本紀講書の記事が見える。養老度の日本紀講書については、『日本紀』以外の正史にそれに関する記述がない。長谷部将司『続

2

日本紀』成立以降の『日本書記』―『日本書紀』講書をめぐって―（『歴史学研究』、二〇〇七年四月、八二六号、青木書店）27頁に「養老度の講書は『続紀』に記載がなく、『新日本紀』のみに見えるものだが、ただ「養老五年」と弘仁度以降の事例と異なり具体的な記載が見えない。そのため、戦前から宇佐神正康氏をはじめその存在を疑う意見が出されていた」とある。なお、清水潔「上代における毎朝御拝の伝統と神国思想」（『神道史研究』四十四巻二号、一九九六年四月、神道史学会）19頁に「日本紀講書は養老に一度認められるものの、それは、養老四年（七二〇）に書紀が撰修された翌年のことであり、おそらく撰進を記念した披露の意味合いが強いものであり、講書の講師も、日本書紀の選者の一人であった太田麻呂であったから、撰述行為の延長線上にあるものと考えられてゐる」とある。しかし、最近、水口幹記氏が「奈良時代の日本書紀講書―養老講書をめぐって―」（『史料としての日本書紀―津田左右吉を読みなおす』所収、勉誠出版、二〇一一年一〇月）において、養老度の講書の存在を認めている。

太田晶二郎氏が「上代に於ける日本書紀講究、（二）イ（ろ）」（史学会編『本邦史学史論叢』上、富山房、一九三五年）において、九世紀初葉の日本社会の現実視線を向け、弘仁・承和度の日本紀講書の目的が当時の氏姓問題の解決に資することにあると指摘し、関晃氏が「上代に於ける日本書紀講読の研究」（『日本古代の政治と文化』吉川弘文館一九

九七年十月)において講書の精神を七世紀の大化改新の真精神に関連させ、その官学の変遷上における意義を論じ、日本紀講書の論考は広い視野で展開されてきた。また、「日本書紀私記」等の講書に関する覚書、或いは講書の終了後に開催された竟宴においての和歌の表記に注目した諸論考により、講書の第一義の目的が日本書紀の訓読にあることは、すでに実証されており、共通の認識を得る所である。

- 3 梅村玲美『日本紀竟宴和歌の研究―日本語史の資料として』(風間書房、二〇一〇年六月)を参照されたい。

- 4 講書を担当する執講の要素も考えられるが、弘仁・承和度の執講について不明な点が多い。弘仁度の執講の多人長は、太安万呂の子孫かと推測されているが、明確な根拠がない。なお承和度の執講の菅野高年は、当時散位正六位上だったとしか知られていない。それ以降の講書の執講については、大学寮の明経道・紀伝道の関係者が執講となっていることは、橋本不美男「日本紀竟宴和歌」(『王朝和歌史の研究』所収、笠間書院、一九六二年一月)(一七頁)によりすでに指摘されている。

- 5 『続日本紀』における原文とその訓読は、『国史大系』・今泉忠義『訓読続日本紀』(臨川書店、一九八六年五月)に従う。

- 6 『本朝文粹』における原文とその訓読は、新日本古典文学大系『本朝文粹』(岩波書店、一九九二年五月)を参照。

- 7 『延喜式』における原文とその訓読は、『国史大系』・虎尾俊哉『延喜式』

(吉川弘文館、一九六四年六月)に従う。

- 8 擬文章生になって初めて式部省の文章生の試に参加する資格を有するようになる。また、擬文章生より文章生になった人達の中で二名が文章得業者に選ばれ、七年以上の勉学を経てから、博士の推薦により、最高国家試験である対策を受ける。この試験で合格し秀才となり、漸く官吏に登用される。『養老令』の「選叙令三十」に「秀才出身条。凡秀才出身、上上第正八位上。上中正八位下(秀才出身の条。凡そ秀才の出身、上上第を正八位上、上中を正八位下にせよ)」と記されている。

- 9 久木幸男『日本古代学校の研究』(玉川大学出版部、一九九〇年六月)三七四頁。

- 10 原文の訓読は、前掲注1長谷部将司氏の論考を参照した。

- 11 大春日頼雄は小内記(大内記は誤記)、滋野貞主は小内記(文章生は誤記)である。

- 12 前掲注2関晃氏の論考。十五頁。

- 13 前掲注1長谷部将司氏前掲論考を参照されたい。

- 14 玉井力「二〇〇―二一世紀の日本―撰関政治」(『岩波講座日本通史』第六巻古代5所収、岩波書店、一九九五年)11―12頁。

- 15 左大臣の源融は基経が摂政に任ぜられた貞観十八(八七六)年に上書し自宅に引き籠もった。

- 16 工藤重矩「延喜六年日本紀竟宴和歌の歌人たち」(『国語と国文学』五六・

四、一九七九年四月）に「講書の性格は座の位置に端的に現れている。講書の直接の対象は大臣以下参議以上の公卿であり、弁・少納言などは、「聴衆」である。聴衆とは陪席を許された傍聴者の謂であろう。これらは講書の第一義的受講者ではあるまい。外記は博士を召したりなど、行事の雑役に預かっているが、弁・少納言・外記・史はみな太政官の下部組織である」とある。

17 滝川幸司「藤原基経と詩人たち」『語文』第八十四・八十五号、二〇〇六年二月）35頁。

18 内裏及び大内裏の構造については、裏松光世『大内裏図考証』（新訂増補故実叢書）、陽明文庫所蔵の「平安京大内裏古図」（京都市編『京都の歴史―平安の新京』、学芸書院、一九七〇年）などを参照した。

19 仏教の行事については、『日本後紀』逸文（八二三）十二月二十四日条「請大僧都長恵、少僧都勤操、大法師空海等於清涼殿、行大通方広之法。終夜而畢也」と、『続日本後紀』承和十五年（八四八年・嘉祥元年）二月十五日条「請百僧於紫宸殿及清涼殿。転読大般若經」などが挙げられる。内宴と曲宴については、『日本後紀』天長九（八三二）年正月二十一日条「皇帝於清涼殿内宴。献詩者十三人。有御製。賜禄有差」と、『続日本後紀』承和元（八三四）年八月十二日条「上曲宴清涼殿。号曰芳宜花讌。賜近習以下至近衛將監祿有差」などが挙げられる。

20 『日本後紀』における原文とその訓読は、黑板伸夫・森田悌編『日本後

紀』（集英社、二〇〇三年十一月）に従う。

21 菅原道真の「勸学院、漢書竟宴。詠史得叔孫通」の題から、藤原氏族の子弟を対象とした漢書の講書が行なわれ、「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黄憲。」の詩序における「嚴君知斯文之直筆、謂斯文之良吏、遂引諸生、校授芸閣」から、芸閣と呼ばれている菅家廊下では、三史の講書が行なわれていることを看取することができる。

22 前掲注18、『京都の歴史―平安の新京』。

23 鈴木琢郎「大臣曹司の基礎的研究」『古代文化』五十九・一、二〇〇七年六月）57頁。

24 諸星友美枝「前期摂関政治における摂政・関白の機能―関白藤原基経の政治的地位を中心に―」『学習院大学人文科学論集』9、二〇〇〇年）「良房が摂政に任じられたことは、史料上では『日本三代実録』貞観八年（八六六）八月十九日によって初めて明らかにになり、その記事は「勅太政大臣、摂行天下之政」と伝えている。だが一般的には、天安二年（八五八）の文徳天皇病死後、わずか九歳で即位した幼帝清和のもとで良房は摂政の実を行い、貞観八年勅によって正式に摂政に任じられた、と解釈されている」とある。

25 『続日本紀』天平宝字二年（七五八）八月二十五日条に「図書寮、掌持典籍、供奉内裏。故改爲内史局。（図書寮は、典籍を掌持して内裏に供奉することを司る。故に改めて内史局と爲す）」とあるが、内裏の構造

は、奈良時代から平安時代に至り、変動が生じているため、内史局が図書寮であるとは安易に断定できない。

26 前掲注2、関晃氏の論考、240頁。

27 前掲注4、橋本不美男氏の論考、15頁。

28 吉川真司『律令国家の女官、日本女性生活史1原始・古代』（東京大学

出版社、一九九〇年五月）

29 飯淵康一ら「平安宮内裏承明門・日華門の儀式時に於ける性格」（『日本建築学会計画系論文集』第五四三号、二〇〇〇年八月）256頁。

30 前掲注2、260頁に「公卿が参内したときのための公卿座が、宜陽殿と近衛陣に二種類設けてあり、改まった儀式などを行う際には宜陽殿の座に、普通の時には近衛陣の座に着いたとされる。

31 前掲注29、260頁。

32 当時の竟宴詠史詩については、ただ島田忠臣の一首しか確認することができない。

33 菅原道真の詩文の訓読は、川口久雄『菅家文章・後集』（岩波書店、一九五六年）を参照。

34 同前『菅家文章・後集』補注、659頁。

35 外記庁と侍従局と右大臣の曹司との地理的關係について、詳しくは注2

3 鈴木琢郎「大臣曹司の基礎的研究」を参照されたい。

36 前掲注18、『京都の歴史—平安の新京』「太政官と財政」283頁。

37 『西宮記』「臨時二」における「始読日本紀事」に「二三年間の間に講じて読み竟りぬ」と記しているため、天慶度の講書であると推測することができ。元慶度は七年間を要し、延喜度は一年間しか要していなかったためである。

38 前掲注18、『京都の歴史—平安の新京』263頁に「十世紀以降：なお、外記庁の正庁からその南にある南舎へは渡廊で通じていたが、これを結政所ともいうのは、ここで政のはじまる前に関係文書を束ねて整理したことによる」とある。

39 前掲注2、関晃氏の論考と、注3梅村玲美氏の論考を参照されたい。

40 『日本紀竟宴和歌』には元慶六年の竟宴和歌が僅か藤原国経の二首しか残っていない。また、『新編国歌大観』には、元慶六年の竟宴和歌が応神天皇を題とした源多の一首「ひじかたのをぐらの山ははるけきを君もまもるにかげもはなれず」が残っている。そのため、現在その全貌を知りえない。

結論

本研究において、漢詩の形式、音韻、内容に着目し、平安前期の日本漢詩文学が中国漢詩文学との関連の中で、また当時の日本の漢詩文学環境や政治状況を背景にして、如何なる展開の様相を呈示したのかについて検討してきた。特に、日本漢詩が自国の文学環境と政治環境の中で独自に展開し、自立性を有していたことを明確にすることを試みた。ここで、各章節の考察結果を個別に示す。

第一章「対句の形式に関する考察」では、従来日本漢詩の論考の対象とされなかった「流水対」・「隔句対」の課題を取扱い、日本漢詩の格式作法の展開の自立性を解明することを試みた。

第一節「流水対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開」では、流水対の中国漢詩史上における意義を明らかにした上で、九世紀前半の日本漢詩の性格を最も忠実に反映している詩集とされる『文華秀麗集』と、九世紀後半を代表する島田忠臣と菅原道真の詩集を考察の対象にした。『文華秀麗集』の近体詩の全体像を見てみると、対照・対立関係にある

対句表現が非常に多く見られるのに対し、流水対は一例のみであった。

その一方で、『菅家文章・後集』には三十五例、『田氏家集』には十一例の流水対が検出された。さらに、日本漢詩における流水対の発生原因について追求し、流水対を形成している要素、即ち近体詩の対句規則を厳守することを可能にした技術的な基盤と、心情表現や意思伝達をより自在に展開させようとする詩人の意欲という二点から考察し、平安前期の日本漢詩の展開の中から流水対が自己発生した可能性を検討することで、日本漢詩の自立性に光を当ててみた。

第二節「隔句対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開」では、隔句対に関する実態を検討することにより、平安前期の日本漢詩人たちが中国書物を介して如何に漢詩文の格式作法を受容し、自らの漢詩文学を形成していったのかを明らかにした。当時、大学寮の教科書であった『詩経』・『文選』や、空海が中国の詩話を網羅し編纂した『文鏡秘府論』（八二〇年以前成立）に隔句対の句法が窺えるにもかかわらず、九世紀前半の勅撰三集においては、隔句対は、駢儷文などに盛んに用いられているのに対し、漢詩では一度も使用されていなかった。この対句法は、菅原道真や島田忠臣などが活躍する九世紀後半に至り、はじめて古体詩の表

現法として使われることになった。この原因として、白居易が隔句対を好んで用いていたこと、承和期以降の『白氏文集』の流行などが挙げられ、白詩が日本漢詩に与えた影響の大きさを推し量ることができた。しかし、道真の隔句対の運用法と白居易のそれを比較してみると、共通点を有しながらも、相違点も顕著であることが分かった。九世紀後半の日本漢詩人は、漢詩の格式作法を学習する過程で、当時流行している白居易の詩作から刺激を受けると同時に、前代の『文撰』などの書物からも詩作格式の情報を読みとり、大いに研鑽を積み重ねることにより、先人が築いた土台の上に、自由自在に詩作の形や風格を作り上げていったためだと考えられる。

第二章「押韻法に関する考察―次韻詩を中心に―」では、次韻詩の発生、展開、またその日本外交上の場における使用などの諸問題を検討し、日本漢詩における押韻法の展開の自立性に光を当てた。

第一節「平安時代以前における次韻詩の発生」では、中国南北朝六朝における次韻詩の発生及びそのメカニズムについて追究し、平安時代以前の次韻詩の発生について検討した。次韻詩が押韻法と「座」の意識を重要視した文学背景のもとで発生したものであることを明白にした上で、

『懷風藻』における脚韻の運用の状況を調査し、当時すでに押韻法の運用、「座」の意識を重要視した「聯句」、「分韻詩」、「依韻詩」（和韻詩の一種）の創作が盛んに行われたことを実証した。また、中国で初唐まで次韻詩の用例が極めて稀であることを同時に考慮すると、懷風藻における次韻詩は、中国の次韻詩の直接影響を受けずに、日本漢詩文学の環境で次韻詩の発生メカニズムの原理で自ら発生したものではないかとの考えに至った。

第二節「平安前期における次韻詩の展開」では、九世紀前半から九世紀後半への次韻詩の展開及びその展開の理由について検討した。勅撰三集と菅原道真の詩集を調査した結果、九世紀後半において次韻詩の数が急増し、より盛んに作られていることが明らかとなった。こうした展開を中国における次韻詩の展開と関連付けて考えてみると、中国の次韻詩の流行を齎した白居易を中心とした中唐の文学集団が、菅原道真へ巨大な影響を与えていることは明らかである。しかし、中国の次韻詩が中唐前期の大暦年間（七六五―七八〇年）以前には数が少なく、また原詩と次韻詩が別々に収録されていたことから、その存在を察知するのは極めて困難であった。そのため、九世紀前半の延暦期・弘仁期に現れてきた

次韻詩は、中国の次韻詩の影響を直接受けたものであるとは到底考えにくい。次韻詩は、基本的な押韻法に基づいた、脚韻の使用上の制限付きの創作形式であるため、日本において押韻法に対する工夫を重ねた上でチャレンジ的な産物ではないかと考える。そこで、延暦期・弘仁期の日本詩壇に「座」の意識、押韻法を重要視した傾向があることを確認し、当時の詩壇には、中国の次韻詩の直接影響を受けずとも、次韻詩の確立の背景が十分に備えられていたことを明らかにした。

第三節「分韻詩から次韻詩へ―奈良・平安前期における日本の新羅、渤海使との漢詩交流を中心に―」では、奈良・平安前期において日本官人が新羅使、渤海使と交流する場で用いた創作形式の変化、即ち分韻詩から次韻詩への展開に注目し、その展開の実態と当時の中国における漢詩文学潮流の変動との関わり、また日本をめぐる外交との関わりを検討した。奈良時代、平安前期における日本の新羅・渤海との外交を背景に、漢詩は、意志疎通や感情交流の道具として用いられた。長屋王の邸宅での新羅使を招待した詩宴において、日本官人が長屋王を中心にして分韻詩を詠じたのに対して、平安前期、特に九世紀後半に至り、日本と渤海との外交の場においては次韻詩による漢詩交流が盛んに行なわれたので

ある。この変化の原因の一つは、まず、中国文学潮流の変化にある。つまり、当時中国が東アジア世界における文明の中心であったことを背景に、奈良時代の日本官人が中国六朝、初唐の宮廷で流行した分韻詩を取り入れることを通じて、自国の文化の水準の高さや国際化を新羅使に示そうとしたのである。同じように、白居易・元稹を中心とした中唐文学集団による次韻詩の流行は、九世紀後半の菅原道真らが渤海使を接待する時に次韻詩を用いた直接の理由である。また、分韻詩から次韻詩への展開のもう一つの理由は、日本と新羅・渤海との政治的関係にある。これを検討するにあたり、まず分韻詩が政治的上下関係を強く意識した創作形式であること、次韻詩で交流した詩人が比較的平等な関係にあることを明らかにした。これらを、当時の華夷思想の下で生じてきた日本の新羅に対する属国観、また日本と渤海との比較的对等で友好的な関係をそれぞれ関連付け、分韻詩から次韻詩への展開に日本の政治的要因があることが了解される。

附節では、渤海使関係詩注釈稿「大江朝綱「裴大使重押蹤字、見賜瓊章。不任諷味、敢以酬答」」を掲示し、平安前期の日本詩人の渤海使への次韻詩の具体的ありようを呈示した。

第三章「漢詩の主題内容に関する考察―詠史、歴史講書を中心に―」

では、漢詩文学を平安前期の政治状況と関連付け、その政治的意義及びその九世紀前半から九世紀後半への史的な展開について探った。

第一節「平安前期の竟宴詠史詩の一考察」では、竟宴詠史詩を手掛かりにし、「文章は経国の大業なり」という平安初頭の文学上のスローガンが、日本詩壇において如何に展開してきたのかについて考察を行った。

詠史詩の題材の特徴、配分、詠法から、三史竟宴の場に官吏涵養と国家経営に役立たせようという政治的意図が極めて濃厚であることが了解される。殊に、平安前期の政治的背景を考え合わせると、平安前期の日本漢詩文学が当時の政治的背景のもとで独自の展開を歩んだことがわかる。つまり「文章経国」の文学スローガンは、儒教的な国家政治に根を下ろし、嵯峨朝においてその頂点を極め、勅撰三集の竟宴詠史詩の場において華やかな様相に現れた。九世紀後半に至り、宇多天皇の親政姿勢は中国的律令制国家の構築に努めようとした官人たちに莫大な期待を与えたため、菅原道真らの詠史詩において「文章経国」文学スローガンは再び光彩を放った。こうした平安前期の政治が日本漢詩の展開に大きな影響を与えたことが、日本漢詩の独自性が形成した大きな理由であろう。

第二節「平安前期における日本紀講書―中国三史の講書との関わりから―」では、講書の受講者、講書の場所、講書の修了を祝う竟宴の状況

に着目し、中国三史と日本書紀との特徴を対照することにより、双方の平安前期における展開の様相を明らかにし、特に元慶期に変貌を遂げた日本紀講書の意義について検討した。中国三史の講書は、中国的律令国家を円滑に運営させようとする政治上の需要に応じて重んじられていたため、その講書は、嵯峨天皇、仁明天皇などのような親政姿勢を示した天皇、及び国家官吏の予備軍といった広範囲の人々を中心的な受講者とする事になっている。それぞれの講書の場所は、平安京の都市構造の空間的秩序に厳格に即し、天皇を頂点とした律令国家の社会秩序を反映していることが了解される。他方、九世紀の日本紀講書は、ある特定の時代背景のもとで、一部の国家官吏のみを対象としている。殊に、摂関政治が進んでいる元慶年間における日本紀講書は、弘仁度・承和度の先例を破り、その講書の場所を内裏外郭から内裏における重要な政治の場である宜陽殿に移行させ、その場での天皇の存在を排除し、基経を中心とした高級官吏、下級官吏及び官吏の予備軍から成る政治の世界を形成している。また、中国三史講書の終了を祝うための竟宴が政治の場とは

直接的に関係しない私的な場で開催されているのに対して、日本紀講書は、元慶度を境にし、侍従所の南の右大臣曹司という政治的な場所において初めて竟宴を開催し、文学様式の選択などの面においても、中国三史の竟宴の先例に従うことなく革新性を打ち出しているのである。こうした斬新さを求める傾向は、基経が朝廷の従来の秩序を破り、自分を頂点とした新たな世界を作り出そうとする野心と関連しているのである。こうした中国三史の講書と日本紀講書が九世紀においてそれぞれ表わしてきた性格、及びその史的な変動は、漢文学隆盛の時代から国風文化の時代へ流れてゆくとする傾向を物語っているであろう。

本研究における各章節の考察結果は以上の通りである。中でも、勅撰三集や、菅原道真らの詩集に見られた対句表現のバリエーションである「流水対」と「隔句対」、また押韻上の拘束が最も厳格な「次韻詩」の創作の実態から、九世紀前半から後半へと日本漢詩人の創作技術がより円熟した境地に達したことが強く印象付けられていると同時に、当時の漢詩人が基礎的な対句や押韻法の運用を把握しただけに止まらず、積極的に様々な試みや工夫をし、より豊富な格式作法を運用しようとしたこと

も明確になっている。特に日本の漢詩文学の環境を考慮すると、そうした新たな格式作法のバリエーションは、必ずしも中国からの直接の影響を受けたものではなく、当時日本詩壇にすでに存在している文学的傾向や技術的基礎を背景として、それぞれに誕生したものではないかと了解される。これは、日本漢詩に現れてきたすべてのかたちや要素を中国文学に求めようとする研究方法を再考する必要性を示唆しているのである。また、当時の日本をめぐる政治状況も、日本漢詩が独自の道を歩んできたことを裏付けた背景である。これは、新羅使と渤海使をそれぞれ招待した宴会における漢詩の創作形式の変化、また「文章経国」の理念の平安前期の竟宴詠史詩における具象化、さらに竟宴詠史詩を誕生させた直接背景である三史講書とその影響を受けた日本紀講書との平安前期における展開からも、明白に看取できる。平安前期の日本漢詩文学は、日本政府の中国的律令制国家の構築と共に開花しており、その隆盛や衰弱といった運命も、日本の政治の行方に大きく左右されているのである。

この時代の日本漢詩は、形成と展開の過程では中国漢詩文学、特に白居易を中心とした中唐文学から影響を受けている一方、自国の漢詩文学

環境と政治背景においてその独自の様相と自立性も呈示しているといっても過言ではないだろう。本研究により、平安前期の日本漢詩文学を東アジア世界の漢詩文学に関連させ、より妥当な位置を与える作業に寄与することができればと考える。

しかし、残された課題も多い。以下では、本研究の考察と関連し、今後さらに展開すべき課題を提示する。

第一章第一節「流水対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開」の考察結果と結びつけ、さらに展開すべきところがある。菅原道真、島田忠臣の詩作の流水対にみる言葉の流動性¹や、繊細な感情表現、理知に富んだ論理的関係²が、古今和歌集の歌風とかなり相似しているところである。小西甚一氏は「古今集的表现の成立」³において、中国文学の、古今集的表现への影響が「直截性」を持たず、菅原道真、島田忠臣、滋野貞主、紀谷長雄などの漢詩を経て、和歌に及んで来ていると指摘したのである。換言すれば、流水対の性質と和歌の表現との関わりをめぐって考察することは、九世紀後半の漢文学と和歌との交流の実態を窺わせる上で非常に有意義な作業だといえよう。今後は、こうした作業も試みたい。第二章第二節「平安前期における次韻詩の展開」では、九世紀前半から後半

への次韻詩の変遷の原因に重みをおいて論じているが、白居易らを中心とした中唐文学集団の次韻詩と日本詩人のそれを対比させるまでには至らなかった。双方を比較し相違点を検討することは、日本漢詩の独自性をさらに見出すことに繋がるのであろう。これを今後の課題とし、次韻詩をめぐる考察を深めてゆきたい。さらに、第三章第一節「平安前期の竟宴詠史詩の一考察」では、竟宴詠史詩の題材の特徴、詠法、配分の問題に絞り、その濃厚な政治的色彩について論じているが、その研究結果を踏まえ、日本和歌文学における竟宴和歌も考察の視野に入れ、三史竟宴の詠史詩と『日本紀竟宴和歌』との関わりを明らかにすることを今後の研究課題としたい。こうした試みは、平安前期の漢詩文学が和歌文学の史的展開と並行して消長盛衰の様相を明らかにすることに繋がるであろう。

平安前期の漢詩文学に関する課題はなお多く残されているが、様々な角度から考察することが可能であり、そうした多角的なアプローチが新たな平安朝文学史の可能性を開くものと考えられよう。

1 意味上では、流水対の出句と対句は、切っても切れない関連性を持つ。これと同様に、和歌は、句切れがあるといっても、意味上では流れのよ
うな流動性を持つものである。

2 片桐洋一「古今和歌集研究史」（藤平春男編纂『国文学古今集新古今集
必携』（別冊）、学灯社、一九八一年三月）129頁に「古今集歌につい
て、「くであるのでくだ」とか、「くの結果くとなる」とか、「くでない
のにくだ」とか、「くしようとするならくするがよい」というように、
理屈や因果関係で説明しようとしたり、これに疑問の形を加えて「くで
あるのにくなのはくだからくだからだろうか」と原因を理屈っぽく推定
する詠み方の詩歌が存在することを明らかにした」とある。

3 小西甚一『古今集的表现の成立』（日本文学研究資料刊行会編、有精堂、
一九七六年）

『平安前期における日本漢詩文学の研究』参考文献

顧 姍姍

日本語著書

今泉定介編、裏松光世『大内裏図考証』（新訂増補故実叢書。国立国会図書館デジタル化資料）

内田泉之助・網祐次『文選』（詩篇上）（明治書院、一九六三年）

梅村玲美『日本紀竟宴和歌の研究―日本語史の資料として』（風間書房、二〇一〇年）

青木五郎・中村佳弘編著『史記の事典』（大修館書店、二〇〇二年）

石川忠久『詩経』（明治書院、一九九七年）

岩垣松苗編『増補点註国史略』巻第二（甘泉堂、一八七七年）

井上光貞・席冕・土田直鎮・青木和夫『律令』日本思想大系3（岩波書店、一九七六年）

今泉忠義『訓読続日本紀』（臨川書店、一九八六年）

上田雄・孫栄健共著『日本渤海交渉史』（六興出版、一九九〇年）

大曾根章介・金原理・後藤昭雄『本朝文粹』（岩波書店、一九九二年）

岡田正之・山岸徳平・長澤規矩也『日本漢文学史』（吉川弘文館、一九五

四年）

岡村繁『白氏文集』（三）（明治書院、一九八八年）

角田文衛監修『平安時代史事典本篇下』（古代学協会・古代学研究会。角川書店）

川口久雄『菅家文章・後集』（岩波書店、一九六六年）

黒板勝美『類聚国史』前編（国史大系5）（吉川弘文館、一九六五年）

黒板伸夫・森田悌編『日本後紀』（集英社、二〇〇三年）

興膳宏『弘法大師空海全集 第五巻』（筑摩書房、一九八六年）

小倉芳彦『中国古代政治思想史研究』（青木書店、一九七〇年）

小島憲之『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（岩波書店、一九六四年）

小島憲之監修『田氏家集注』（和泉書院、一九九四年）

小島憲之『国風暗黒時代の文学』全九巻（塙書房、一九六八年―二〇〇二年）

小西甚一『文鏡秘府論考』研究篇 上下（講談社、一九五二年）

横田輝俊訳注 胡心麟『詩藪』（明德出版社、一九七五年）

鈴木健一『日本漢詩への招待』（東京堂出版、二〇一三年五月）

笹山晴生『平安初期の政治改革』（『日本歴史』古代三所収。一九七六年）

辰巳正明『懷風藻全釈』（笠間書院、二〇一二年）

戸田浩暁『文心彫龍』（明治書院、一九七八年）

虎尾俊哉『延喜式』（吉川弘文館、一九六四年）

中村璋八・島田信一郎『田氏家集全釈』（汲古書院、一九九三年）

林古溪『懷風藻新注』（明治書院、一九五八年）

久木幸男『日本古代学校の研究』（玉川大学出版部、一九九〇年）

藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学、二〇〇一年）

古田敬一氏の『中国文学における対句と対句論』（風間書房、一九八二年）

松浦友久『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）

松浦友久編、植木久行・宇野直人・松原朗著『漢詩の事典』（大修館書店、

一九九九年一月）

村井章介『東アジア往還 漢詩と外交』（朝日新聞社、一九九五年）

目崎徳衛『政治史上の嵯峨上皇』（『日本歴史』二八四、一九六四年）

吉田精一『日本文学鑑賞辞典（古典編）』（東京堂出版、一九七〇年）

吉川真司『律令国家の女官、日本女性生活史1原始・古代』（東京大学出

版社、一九九〇年）

吉田賢抗『新釈漢文大系第85巻・史記五（世家中）』（明治書院、一九

七七年）

吉田賢抗『新釈漢文大系第39巻・史記（本紀下）』（明治書院、一九八

五年）

渡辺義浩氏『特集ワイド中国歴代皇帝の覇業と実像』（『歴史読本』84

4号。新人物往来社、二〇〇九年）

日本語雑誌論文

赤羽淑「定家の歌における押韻―主として頭韻について」（ノートルダム

清心女子大学紀要『国語・国文学』四（二）、一九八〇年）

飯淵康一ら「平安宮内裏承明門・日華門の儀式時に於ける性格」（『日本

建築学会計画系論文集』第五四三号、二〇〇〇年八月）

池田昌広「范曄『後漢書』の伝来と『日本書紀』（『日本漢文学研究』第

三号、二〇〇八年八月）

池田昌広「古代日本における『史記』の受容をめぐって」（『古代文化』

六一巻第三号。二〇〇九年十二月）

石母田正「詩と蕃客」（『日本古代国家論 第一部』『天皇と「諸藩」附

論』所収。岩波書店、一九七三年）

石川淳「和歌押韻―夷斎清言9」（『文学界』七（五）文藝春秋、一九五

三年五月）

井実充史「平城朝の君臣唱和」（『言文』四六、福島大学、一九九八年）

上田設夫「天慶六年日本紀竟宴和歌の世界」（『文学・語学』全国国語国

文学会、一九八〇年一〇月)

遠藤光正「長屋王の詩歌とその創作時期について」『東洋研究』(通号九五)、大東文化大学東洋研究所、一九九〇年三月)

太田英比古「菅原道真と渤海使接待」『政治経済史学』(通号三八六) 日本政治経済史学研究所、一九九八年十月)

太田晶二郎「上代に於ける日本書紀講究、(一)イ(ろ)」(史学会編『本邦史学史論叢』上、富山房、一九三五年)

太田晶二郎「吉備真備の漢籍将来」(太田晶二郎著作集第一冊、吉川弘文館、一九九一年)

大塚英子「『文章経国』の比較文学的一考察―勅撰三漢詩集の編纂をめぐる―」『国文学釈と鑑賞』五五(一〇)、志文堂、一九九〇年一〇月)

狩野直禎「光武帝の政治指針」『史窓』四八号、京都女子大学氏史学会、一九九一年)

木田章義「弁官と放還―『日本紀竟宴和歌』『文学』一(四)、岩波書店、一九九〇年十月)

清水潔「上代における毎朝御拝の伝統と神国思想」『神道史研究』四十卷二号、神道史学会、一九九六年四月)

工藤重矩「延喜六年日本紀竟宴和歌の歌人たち」『国語と国文学』五六

(四)、一九七九年四月)

黄少光「奈良・平安朝日本漢詩の詩律的研究」(東京外国語大学博士論文、二〇〇三年)

河内春人「詔勅・処分に見る新羅觀と新羅征討政策」『駿台史学』第一〇八号、明治大学史学地理学会、一九九九年十二月)

小島憲之「奈良・平安初頭文学と渤海文学との交流」『比較文学』(通号三二)、日本比較文学会、一九六〇年九月)

佐藤真一「菅原道真と父是善―卷一、九「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲。並序。」を中心に―」『北陸古典研究』一

八、北陸古典研究会編、二〇〇三年一〇月)
下西善三郎「奈良・平安時代の唱和詩」『金沢大学国語国文』五、金沢大学国語国文学会、一九七六年五月)

関晃「上代に於ける日本書紀講読の研究」『日本古代の政治と文化』吉川弘文館、一九九七年十月)

鈴木琢郎「大臣曹司の基礎的研究」『古代文化』五十九(二)、古代学協会、二〇〇七年六月)

鈴木靖民「養老期の日羅關係」『國學院雜誌』六八(四)、國學院大學綜合企画部、一九六七年四月)

谷口孝介「菅家文章」の詩体と脚韻」『国文学』第三三号、同志社、一

九九〇年三月)

玉井力「一〇〇―一世紀の日本―撰関政治」(『岩波講座日本通史』第六

巻古代5所収、岩波書店、一九九五年)

滝川幸司「藤原基経と詩人たち」(『語文』第八十四・八十五号、大阪大

学国語国文学会、二〇〇六年二月)

辰巳正明「懷風藻の詩学(二)―応詔の詩学」(『懷風藻研究』第六号、

二〇〇〇年三月)

橘英範「白居易と劉禹錫の聯句」(『アジア遊学』第九十五号、勉誠出版、

二〇〇七年一月)

月野文子「『懷風藻』の押韻―韻の偏りの意味するもの―」(『上代文学と

漢文学』和漢比較文学叢書2、一九九三年)

橋本嘉彦「『菓子の変』私考」(『奈良平安時代史論集』下巻。吉川弘文

館。一九八四年九月)

橋本不美男「日本紀章宴和歌」(『王朝和歌史の研究』笠間書院、一九六

二年一月)

長谷部将司「『続日本紀』成立以降の『日本書紀』―『日本書紀』講書を

めぐって―」(『歴史学研究』、八二六号、青木書店、二〇〇七年四月)

半谷芳文「勅撰三漢詩集押韻考―韻書の利用と韻律受容から考察する奈

良・平安初期の詩賦」(『国文学研究』一五八、早稲田大学国文学

会、二〇〇九年六月)

福田俊昭「長屋王の私邸における詩宴詩(上)」(『東洋研究』一五六、二

〇〇五九月)

福田俊昭「長屋王の私邸における詩宴詩(下)」(『東洋研究』一六〇、二

〇〇六年七月)

堀井佳代子「平安初期における渤海観―国書と儀式書の検討を通して―」

(『文化史学』六三、文化史学会二〇〇七年十一月)

福田後雄「懷風藻の応詔詩」(大東文化大学日本文学会編『日本文学研究』

村上・森・永山三教授退職記念増大号、一九八三年一月)

堀誠「菅原竟宴詠懷人士考」(『早稲田教育評論』第二十四卷第一号、早

稲田大学教育総合研究所、二〇一〇年三月)

水口幹記「奈良時代の日本書紀講書―養老講書をめぐって―」(『史料と

しての日本書紀―津田左右吉を読みなおす』所収、勉誠出版、二〇

一一年一〇月)

村田正博「上代の詩苑―長王宅における新羅使饗応の宴」(『人文研究』

大阪市立大学大学院文学研究科紀要』三六(八)、大阪市立大学文学

部、一九八四年)

諸星友美枝「前期撰関政治における撰政・関白の機能―関白藤原基経の

政治的地位を中心に―」(『学習院大学人文科学論集』9、二〇〇〇

年)

陽明文庫所藏「平安京大内裏古図」(京都市編『京都の歴史—平安の新京』

学芸書院、一九七〇年)

和田英信「聯句から次韻詩へ—中国における『座』の文学」(『アジア遊

学』第九十五号、勉誠出版、二〇〇七年一月)

中国語著書・雑誌論文

卞孝萱「唐代次韻詩為元稹首創考」(『晋陽學刊』四期 一九八六年)

戴叔倫『戴叔倫詩集』二卷補遺一卷(清・席啓宇輯『唐詩百名家全集』、

七世孫素威補刊、一七〇二年)

傅佩韓『中國古典文學的對偶藝術』(光明日報出版社、一九八六年)

盧綸『盧綸詩集』(清・席啓宇輯『唐詩百名家全集』一二、一三冊、七

世孫素威補刊、一七〇二年)

李益『李君虞詩集』(清・席啓宇輯『唐詩百名家全集』一二、七世孫素威

補刊、一七〇二年)

劉克庄『後村先生大全集』卷九五(上海商務印書館、一九三六年)

郭紹虞校釈 嚴羽『滄浪詩話校釈』(人民文学出版、一九六一年五月)

胡震亨『唐音癸簽』(上海古籍出版社、一九八一年)

蔣紹愚『唐詩語言研究』(中州古籍出版社、一九九〇年)

謝榛『四溟詩話』(人民文学出版社、一九六一年)

朱金城撰『白居易集箋校』(上海古籍出版社、二〇〇三年一〇月)

趙翼『陔余叢考』(中華書局、二〇〇六年三月)

張伯偉『全唐五代詩格彙考』(鳳凰出版社 二〇〇二年)

貞凡・顧馨・徐敏霞點校、俞樾『茶香室叢鈔』(中華書局、一九九五年)

張溥輯『漢魏六朝百三名家集』第八四冊『陳後主集』章經濟堂重刊、光

緒十八(一九八二年)

周振甫『詩詞例話』(江蘇教育出版社、二〇〇六年)

周振甫・冀勤・錢鐘書『談藝錄』讀本 上海教育出版社 一九九二年八

月)

霍松林校注 沈德潛『說詩晬話』(人民文学出版、一九七九年)

元稹『元氏長慶集』四部叢刊初編縮本41(台灣商務印書館)

楊伯峻・何樂士『古代漢語語法及其發展』(語文出版社、一九九二年)

葉夢得『玉澗雜書』(朱易安等主編『全宋筆記』大象出版社、二〇〇六年)

吳喬『垆詩話』(藝文印書館、一九六七年)

王德明『中国古代詩歌句法理論的發展』(廣西師範大學出版、二〇〇〇年)

王力『漢語詩律學』(『王力全集』卷十四、山東教育出版社、一九八九年)、

王筠『王詹事集』(『統修四庫全書』所收、上海古籍出版社、一九九五年)

『四部叢刊電子版』(北京書同文數字化技術有限公司、二〇〇〇年)

『文淵閣四庫全書電子版』(迪志文化出版有限公司、二〇〇五年)

あとがき

振り返ってみれば、日本で漢詩文学の研究をやってみたいと思いはじめたのは、二〇〇六年に東京外国語大学に短期留学にきた時でありました。その時に、現在の指導教官の村尾誠一先生の御指導を受けました。村尾ゼミで『新古今和歌集』、『百人一首』における和歌の発表を担当させていただいた記憶が今でも鮮明に思い出せます。今から考えると、その時の発表はとても稚拙なものでありました。それにも関わらず村尾先生は、それら拙い発表の中に輝いている所が少しでもあると、いつも肯定的な評価をくださいました。それは、その後の博士課程において私が自分の研究成果を積極的に発信していく勇気の源となりました。また留学中、修士課程の指導教官であった黄少光先生のご紹介で、國學院大学の辰巳正明教授を訪問しました。辰巳先生は、日本語が上手く話せず、学問に対して無知な私にご自身の著作を恵贈してくださり、私の修士論文の話まで耳を傾けてくださいました。私は、日本の大学の先生方が若手研究者を育てようとする責任感を強くもっていらっしやることに感動を覚えました。さらに、日本国会図書館や国文学資料館、神保町の古本

屋に通い、多くの重要書籍を実際に手にし、そこから学ぶことができる環境は、日本の漢詩文学研究を行う私にとっては、この上ない充実感を得る場でありました。これらを想起すると、日本で漢詩文学の研究しようとした願望は二〇〇六年から始まったように思われます。それから一年半後、二〇〇八年に日本への留学の念願が叶い、私は平安前期の日本漢詩文学というテーマを携えて東京にやってきました。来日した後、数え切れないほどの試行錯誤を繰り返し、研究の厳しさや辛さを存分に味わいました。しかし、村尾先生の懇親なる御指導に支えられ、多くの方々の励ましや応援を頂き、学会やシンポジウムでの研究発表、雑誌への投稿を行うことができました。その過程において私の研究を評価してくださる研究者の方々とネットワークを広めることもできました。こうして五年間にわたり、多くの試行錯誤を繰り返し、根強く研究に励んだことすべてが、本研究の執筆に繋がっています。それら既発表論文と本研究の各章節との関係は以下の通りです。

序論 書き下ろし

第一章 対句の形式に関する考察

第一節 流水対からみる平安前期の日本漢詩文学の展開（『和漢比較

文学』第四十五号、和漢比較文学会、二〇一〇年八月）

第二節 日本漢詩における対句の形——平安前期の日本漢詩における隔句対の運用をめぐる——（『第34回国際日本文学研究集会会議録』国文学研究資料館、二〇一一年三月）

第二章 押韻法に関する考察——次韻詩を中心に——

第一節 日本漢詩における次韻詩の発生——『懷風藻』時代の漢詩創作の背景——（『第118回和漢比較文学会大会』、於國學院大學

渋谷キャンパス二〇周年記念1号館、二〇一三年一月）

第二節 平安前期における次韻詩の展開 書き下ろし

第三節 分韻詩から次韻詩へ——奈良・平安前期における日本の新羅、

渤海使との漢詩交流を中心に——（国際シンポジウム『東アジアにおける筆談の研究』、於華北飯店、二〇一二年九月）

附節 渤海使関係詩注釈稿「大江朝綱 裴大使重押蹤字 見賜瓊章

不任諷味 敢以酬答（『扶桑集』七二）」（『日本古典籍研究所

年報』6号、早稲田大学プロジェクト研究所、二〇一三年三月）

第三章 主題内容に関する考察——詠史、歴史講書を中心に——

第一節 平安前期の竟宴詠史詩の一考察——詩作の題材からみる「文

章経国」の理念——（『言語・地域文化研究』第17号、東京 外国語大学大学院、二〇一一年三月）

第二節 平安初期における日本紀講書——中国三史の講書との関

わりから——（『総合文化研究 特集…ことばと空間』14・15、東京外国語大学総合文化研究所出版、二〇一二年三月）

結論 書き下ろし

あとがき 書き下ろし

それぞれの論文は本研究のために必要に応じて加筆・訂正を加えました。特に序論で提示した本研究の主要な目的と各章との関連を明確にするために、幾つかの節の最初と最後に加筆・訂正を加えました。

本研究は、二〇〇六年に感じた日本研究者に対する強い敬意を起点としてはじめた、五年間の博士課程における漢詩文学研究に対する情熱より生まれた一つの結果です。今はその結果を残せることにささやかな

喜びを感じますが、当然のことながら、本研究をより深めることこそがこれからの課題であり、より重要であると思っております。

＊

本研究を遂行するにあたり、多くの方々にしてお世話になりました。

まずは終始懇切丁寧に御指導、御助言を頂きました指導教官である村尾誠一教授（東京外国語大学）に、厚く御礼申し上げます。村尾先生には、学問的な助言のみならず、研究者としての心構えをご教示頂きました。また授業での御指導だけでなく、私が学会やシンポジウムで発表する際には、発表の練習に付き合ってください、発表当日いつも会場に来て頂いたり、様々な場面において心の強い支えでありました。

修士課程の指導教官であった黄少光先生（廈門大学）に対しても同様に深謝申し上げます。本研究は、修士課程在籍時から行った「菅原道真の詩学」の研究に繋がっているものであり、日本漢詩文学の研究に対する考え方、進め方において黄教授に多くの指導、ご鞭撻を頂きました。

川島郁夫教授（東京外国語大学）には、他ゼミの私をいつも研究室で暖かく迎えて頂き、漢文学の研究や博士論文の構造について有益な御助言を多く賜りました。深く感謝いたします。

また和漢比較文学研究学会の先生方に深謝の意を表わします。学会の場で、後藤昭雄教授（成城大学、二〇一三年三月に退職）、新聞一美教授（京都女子大学）、塚越義幸教授（國學院大學栃木短期大学）、堀誠教授（早稲田大学）をはじめ、多くの諸先生方から御指導と御助言を頂きました。

国文学研究資料館が主催した『第34回国際日本文学研究集会「書物としての可能性——日本文学がカタチになるまで』で司会を担当してくださった相田満准教授に心から御礼申し上げます。発表の際に貴重なコメントや御質問をくださり、また、その後『和漢比較文学研究学会』の場において何回もお会いした際には、いつも励ましの御言葉を賜りました。

早稲田大学文学学術院で河野貴美子教授、吉原浩人教授そして高松寿夫教授には、言い尽くせないほどお世話になりました。貴重な資料の『扶桑集』脇坂本（静嘉堂文庫蔵）・紀州家本（南葵文庫蔵）、尾張家本（蓬左文庫蔵）の複製本を見せて頂き、資料調査の便宜を図って頂きました。

また『渤海使関連詩研究会』で漢詩訓読の発表の場や、海外における報告の機会も頂戴しました。特に今年九月に中国杭州で開催された国際シ

ンポジュウム『東アジア世界における筆談の研究』に参加した際には、公私にわたってお世話になりました。

木下綾子講師（白百合女子大学）、中丸貴史講師（防衛大学）には、多くの場においてお世話になりました。お二方とも『和漢比較文学研究学会』『渤海使関連詩研究会』の会員であり、和漢比較文学研究の領域で活躍している研究者の中で私と年齢が近く、若手研究者の手本のような存在であります。このお二方から様々な知見をいただいたと同時に、良い刺激も多く受けました。

漢詩文学研究以外でお世話になった先生方も多くいらつしやいます。

柴田勝二教授（東京外国語大学）に厚く御礼申し上げます。柴田先生が主催する「多分野研究」の授業のおかげで、様々な研究分野を専攻する教授や若手研究者の発表を拝聴でき、研究の方法や視座に対する認識が豊かになりました。また、柴田先生が本校の総合文化研究所の所長であった時に、本研究所の補佐として働かせて頂き、学術シンポジウムの開催の運営や機関誌の編集作業などの機会に触れ、学術に対する認識を深めることができました。

田村航講師（明治学院大学）と井上亘教授（北京大学）に、歴史学の面でお世話になりました。平安前期の歴史学の調査方法について多くの御指導、御助言を頂いているばかりか、田村先生には『日本古代史年表』（東京堂出版、二〇〇八年）と著書『一条兼良の学問と室町文化』（勉誠出版、二〇一三年）などを、井上先生には『虚偽的日本』（社会科学文献出版社、二〇一二年）を御恵贈頂きました。かれらの研究を通じて、私の研究に対して数多くの知見、示唆を頂きました。

また古代中国の漢籍の流传を研究される王勇教授（浙江工商大学）と、宗教研究をなさる劉雨珍教授（南開大学）にそれぞれ平安前期における中国漢籍の流传と、空海の学問について御相談に乗って頂きました。深謝の意を表わします。

さらに、いつも励ましのお言葉と学問的な御助言を下さっている沓掛良彦教授（東京外国語大学、二〇〇三年退職）、松浦寿夫教授（東京外国語大学）、吉本秀之教授（東京外国語大学）、岡田昭人教授（東京外国語大学）に厚く御礼申し上げます。

なお、先輩の及川茜講師（神田外国語大学）、友人の藤松健介先生（長野吉田高等学校）、松岡旭様（東京外国語大学大学院修士課程）、平原真

紀様（東京外国語大学大学院博士課程）、松原理佳様（東京外国語大学大学院修士課程）には日本語の添削についてお世話になりました。特に及川茜講師は進路に関する御助言と御協力も賜り、公私にわたっていろいろ助けてくださいました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後に、研究生活において経済的な面で莫大にご支援をいただいた小林国際奨学財団と檜山奨学財団、文部科学省「卓越した大学院拠点形成支援補助金」プロジェクトに深く感謝すると共に、いつもあたたかく見守ってくれた家族、友人に本研究を遂行できたささやかな喜びを捧げたく思います。

平成二十五年十一月

顧 姍 姍